
サイドワーク プリンセス

加藤ほろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイドワーク プリンセス

【Nコード】

N5585P

【作者名】

加藤ほろ

【あらすじ】

剣と魔法の国スイートピアで『生ける魔法史』と呼ばれる年齢不詳の美少女魔法使いスカーレット。弟子と片田舎で暮らしていた彼女がある日突然、国王の依頼でお姫さま業をすることになり……。多くの謎を抱えたスカーレットを取り巻く、師匠命の変態弟子、顔はいいけどモラトリアムな王子、堅物で強面な騎士などを中心に王宮で繰り広げられる、愛と魔法のファンタジー。

<第一部>

> i 2 4 1 4 4 — 8 9 5 <

【登場人物一覧】 必要最低情報のみ記載。一番下に主要キャラ身長比較図があります。

《主要人物》

> i 2 4 8 7 3 — 8 9 5 <

・スカーレット
本業は魔法使い。副業は姫。年齢不詳の美少女。愛称はレティ。

> i 3 1 8 9 9 — 8 9 5 <

・ガーネット
スカーレットの弟子。師匠には従順。十九歳。愛称はガー。

> i 1 8 8 0 9 — 8 9 5 <

・ジゼーラル
スカーレットが町で出会った謎の青年。十七歳。愛称はジゼル。

> i 2 9 1 4 7 — 8 9 5 <

・ゴドウェルト
宮廷騎士団所属の騎士。二十六歳。

《スイートピア城関係者》

> i 1 8 8 1 1 — 8 9 5 <

・ルーファス・バトラレーゼ

スイートピア王国、侯爵。

・トートリアス・スイートピア
スイートピア王国君主。

> i 2 4 8 6 9 — 8 9 5 <

・トウトリア・スイートピア
スイートピア王国王女。

《宮廷魔道師》

> i 1 8 8 1 3 — 8 9 5 <

・アラン

宮廷魔道師団、団長。

> i 1 8 8 1 4 — 8 9 5 <

・エステル

宮廷魔道師団、古代魔法研究室、室長。

> i 2 4 8 7 4 — 8 9 5 <

・チエルシー

宮廷魔道師団で研修中の、王立魔法学院の生徒。 14歳。

> i 2 2 1 5 1 — 8 9 5 <

・ラルフ

宮廷魔道師団、実働組織の守護部隊「^{サンシャイン}太陽」所属。

> i 2 4 8 7 2 — 8 9 5 <

・ミレイユ

宮廷魔道師団、古代魔法研究室所属。 26歳。

> i 2 4 8 7 0 — 8 9 5 <

・アビゲイル

宮廷魔道師団、古代魔法研究室所属。 24歳。

> i 2 4 8 7 1 — 8 9 5 <

・カヤナ

宮廷魔道師団、古代魔法研究室所属。 23歳。

《宮廷騎士》

> i 2 2 1 5 0 — 8 9 5 <

・リネット

宮廷騎士団所属の騎士。 二十一歳。

> i 2 2 1 4 9 — 8 9 5 <

・ハワード

宮廷騎士団所属の騎士。 トウトリアの護衛兼世話係。

《エノワールド城関係者》

> i 2 4 8 7 5 — 8 9 5 <

・リリベルティーナ・エノワールド

ジゼーラルの姉。 十九歳。

> i 2 4 8 7 6 — 8 9 5 <

・ジギスムント

リリベルティーナの世話役兼護衛。三十六歳。

【登場人物身長比較図】

> i 2 5 0 4 8 — 8 9 5 <

< 第二部 >

第二部<修道女の逃亡>

> i 2 9 7 3 4 < r u b y > < r b > 8 9 5 <

< / r b > < r p > (< / r p > < r t > あらすじ < / r t > < r p >) < / r p > < / r u b y >

トウトリアの留学により王宮に留まることとなったスカーレット。トウーの代わりにやってきたのは、なんとエノワルドの王子ジゼーラルだった。客員魔道師として王宮で過ごすジゼルにガーネットは敵意を燃やす。そんな様子を冷めた目で見つめるスカーレットとゴドウェルト。

そんなある日、城に二人の魔法使いが訪れる。彼らは失踪した修道女を捜していて？

そして、スカーレットが男弟子をとらなくなった原因が明らかに――。

《登場人物》

> i 2 8 7 6 9 ― 8 9 5 <

・トレヴァー

魔法使い。フィオルト魔道士団所属。

> i 2 8 7 7 0 ― 8 9 5 <

・パティ

魔法使い。フォオルト魔道師団所属。トレヴァーの弟子。

プロローグ

遠い昔、この大地に奔めく国々に争いが絶えなかった頃のこと。

闇夜は戦火に掻き乱され、星々はその存在を脅かされる日々。

民は飢え、戦士は傷付き、国は荒廃した。

それでも国々の王は尚も争いを続けた。

人々は希望を無くし、神をも恨んだ。

もう終わりかと思われた時、一人の救世主が現れた。

其の者は両の手に大いなる光を宿し、其れを放った。

光は戦地に堂々たる佇まいで腰を下ろす山を次々と消し去った。

そこに存在した筈の山脈は、人々が瞬きをする間も無く跡形もなく消え去った。

山脈から大きな穴へと変わった大地を眺め、其の者はこう告げた。

「この醜い争いを終わらせないと言っのなら、この世界を全て無に帰すまでだ」

王達はこの者の言葉に恐れをなし、長きに渡るこの戦いは終結を迎えた。

もう誰も其の者の姿を覚えてはいない。

だが、その名だけは今も人々の間で英雄として語り継がれている。

トワール・ノディエ。

世界最高の魔法使いの名である。

【スイートピア王立魔法学院編集『魔法史における偉人』より】

第1話

「どちら様？」

大きく真ん丸な瞳が扉の隙間からこちらを窺う。薄暗い扉の向こうで、空を閉じ込めたような青い宝石だけがキラキラと輝いていた。

「怪しいものではありません、お嬢さん。私はこの家の主に用がたつて参ったものです」

「……そう」

少女はにこりと微笑んだ。そして一言。

「訪問販売、怪しい勧誘は間に合ってます」

そしてその言葉と共に、扉は大きな音をたてて閉まってしまった。

*

何もない荒野に、延々と伸びる一本の道。この道に終着点はあるのだろうか。

晴れ渡る青い空で輝く太陽を、額に手をかざしながら眩しそうに目を細めて見上げる。綺麗ではあるが、この日差しは少々老体に応える。

そんなことを考えながら、ルーファス・バトラレーゼ侯爵は深いため息をついた。容赦なく照りつける日差しから、頭を守るためにもう一度帽子を深く被り直す。少々頭皮が見える白髪では頭を守るのは役不足に感じるからだ。マントも暑いので脱いでしまいたい所だが、露出している部分の肌が赤く焼けてしまいそうで、とるにと

れなかった。

彼がこんな場所にわざわざ出向いたのにはある理由があった。まあ、理由がなければこんな田舎に貴族が一人で歩いている訳もないのだが。

その理由というのは彼の主であるスイトピア国王からの突然のお願い、もとい命令であった。彼は王の命令に従い、自国の国境際の田舎に、さる人物を迎えに来たのである。

その人物の名は「スカーレット」。国王が幼き頃に教育係も務めた、「生ける魔法史」の異名を持つ王国きつての大魔法使いらしいルーファスも彼女の名前や二つ名は何となく聞いた事があったが、如何せん魔法関係には疎い為、本当に何となくの知識であった。

「本当にこの道で合っているのだろうか……」

合っているも何も、ここには道は一本しか無いのだが。

ルーファスは白い口髭についた砂埃を払い、歩みを速めた。

しばらく歩き続けて、もう限界だと思った時、突然視界に緑色が飛び込んできた。そこには果実や花のなる木がいくつも生えているではないか。そして、その中心にある巨木の根っこに守られるかのように、小さな家の扉が見えた。

彼は疲れも忘れて、その扉に飛び付き、ノックをした。まさか、訪問販売や怪しい勧誘と間違われるとは夢にも思わずに。

*

「ごめんなさい。こんな田舎だから、来るのは訪問販売か怪しい宗教の勧誘くらいかと思って」

「はあ……」

こんな田舎に訪問販売も、ましてや怪しい宗教の勧誘など来ない

と思うが。

何とか身分を証明して、家の中へと入れてもらったルーファスは目の前の赤毛の少女を眺めた。十四、五だろうか。やけにしっかりして見えるのは、こんな田舎に住んでいるからなのだろうな。ルーファスは勝手に納得して家の中を見渡した。可愛いぬいぐるみや雑貨が飾つてある、少女趣味な部屋であつた。とても魔法使いの家には見えない。棚に並べられた色とりどりのガラス瓶の中身も、どう見てもキャンディーやクッキー、マシユマロである。

普通、魔法使いの家の瓶の中身つて蛇とか、目玉とかじゃないのだろうか。

「それで貴族サマが一体何の御用かしら？」

「ああ……そうでした。改めて自己紹介致します。私の名はルーファス・バトラレーゼ。侯爵の位を王から賜りし者です」

「ええ、先ほど聞いたわ。今は王宮に出仕してるのかしら？」

「はい。それで……実は私は国王陛下のご命令で、この家の主、スカーレット様をお迎えにあがったのです」

「そう」

「それで……スカーレット様は御在宅でしょうか？」

「いるわよ。ここに」

「え？ 失礼ですが……どこに？」

「ここよ、ここー！」

目の前の少女が、小さな手で自身の胸をトントンと二回叩いた。

「私がこの家の主、スカーレットよ」

「貴女……様がスカーレット様！？」

何てことだ。スカーレット様が既に死んでいたなんて。

ルーファスはこの少女を見て、きつとこの子は祖母か母の名を継い

だスカーレット二世だと勝手に納得をした。そして、この少女が家の主ということは、すなわち彼の探しているスカーレットは既に他界しているという図式となるのだ。

「そんな……国王陛下に何と報告をすれば良いのか……スカーレット様が既にこの世にいないなんて……」

「はい？」

「ああ、お気の毒でしたね。あなたもまだ幼いというのに、スカーレット様はさぞ心残りでしたでしょう」

「あの……」

「それで、初代スカーレット様はあなたの祖母君で？ 母君で？」

「あのねえ……」

スカーレットが腕を組んで呆れた顔をしていると、扉が開き、紙袋を両腕に抱えた青年が入って来た。青年は後ろで束ねた栗色の髪を、犬の尻尾のように振りながら、スカーレットに笑顔を向けてきた。

「お師匠さま！ ただいま戻りましたーって、あれ……お客ですか？ 珍しいですね、こんなド田舎に」

「ガー、帰ってたの？」

「ええ、頼まれていたもの、町で買ってきましたよ。今お茶でも淹れますね」

青年はそう言って、ルーファスに軽く会釈すると、いそいそと台所へと消えていった。

「あの青年は？」

「ああ、あれは私の弟子っていうか、子供みたいなものかしら？」

「弟子？ こ……子供？」

ルーファスが目を丸くしながら、必死に考えを整理していると、青年の声が耳に届いた。

「はは、そうは見えませんか。何だったら、恋人とを考えてもらっても……」

「良くない良くない」

いつの間にか、ティーポットとカップを乗せたお盆を手にも、戻つて来た弟子の一言にスカーレットは冷静に突っ込みを入れた。そして立ち上がり、お菓子の入った瓶が沢山置いてある棚へと向かった。

「改めましてこんにちは、ガーネットと申します。こんな遠くまでようこそおいで下さいました」

「は……はあ……。あの、お師匠さまとは、その、ごっこ遊びか何かで？」

「やだなあ。僕が幼女とそんな戯れをして喜ぶ変態に見えますか？」

「あ、いえ！ 失礼しました。そんなつもりでは……」

「僕は彼女の内弟子ですよ、魔法のね。今は僕しか弟子はいないんです」

「弟子……彼女の……？」

ルーファスはその言葉の意味をまだまいち呑みこめないらしく、ぼんやりと彼の淹れてくれた紅茶に口をつけた。そして、思い出したかのように自己紹介を返した。

「へえ……お城の使い、ですか」

「そうよ。ご苦勞なことよね。こっつて、魔法使いでもない限り、交通の便最悪なもの」

瓶を抱えながら席に戻って来たスカーレットは大して同情もしていない様な口ぶりですう言った。

「ほら、これ新作の虹色マカロン。味見してみて」

「は、はあ。ありがとうございます……」

ルーファスは手を瓶に伸ばしかけて、そのまま動きを止めた。何なんだ、このマカロンは。

「あら？ どうしたのかしら？ 虹色マカロン、気に入らなかった？」

「い、いえ。そんなことは……」

この虹色マカロン、鮮やかな虹の色が七つのマカロンに一つ一つ色付いている訳ではない。何というか、何と言わなくても、そう、どす黒いのだ。

「これは、何が入っているんですか？」

「えーと。ムカデと蛇と蜘蛛とトカゲの尻尾と、ドラゴンの鱗に烏の羽根、それからトリカブト？」

「いや！ 死にます！ それ死んじゃいますから！ 何でそんなのが虹色なんですか！？」

「え？ だって虹色って全部混ぜれば黒でしょう」

やっぱりこの人は魔法使いだ。どんなファンシーな見た目と部屋で誤魔化しても中身は生粋の魔法使いだ。ルーファスはそう思った途端、紅茶にも何か入っていたのでは、と思いカップに視線を落とした。ま……まさか。

「あ、紅茶には変なもの入れてませんよー？」

「あら、マカロンだって変なもの入れてないわよ」

ケロリとそう言つてのけるスカーレットにルーファスは思わず叫んだ。

「いやいや！ 百歩譲つて他はいいとして！ トリカブトは完全にアウトでは！？」

「まあまあ、冗談よ。これはワイルドベリーと黒糖のマカロン。ドラゴンの鱗とかそんなファンタジーなもの今時流行らないわ」

ファンタジーとかそういう問題では無いと思うのだが。ルーファスは大きいため息をついて頭を押さえた。

「ちょっと情報を整理させて下さい」

「はい、どうぞ」

「あなたは魔法使いなんですか？」

「そうよ、他に何に見えるのかしら」

他にというか、そもそも魔法使いに見えない。彼女の着ているピンク色のフード付きワンピースは、スカートの部分にレースがふんだんに使っていてとても可愛い装いだった。

「もしかして見た目で判断してる？ この服だって魔女服なのよ。今時、黒い伝統服なんて遅れてるのよ」

「そうなんですか……！ 魔法関係には疎くて……」

「それと、私、あなたよりもうーんと年上なのよ？」

「そうなんですか……。って！ ええ！？」

ルーファスは頭から白髪が全て抜けおちそうなほど驚き、椅子から立ち上がった。そして自身の勘違いにようやく気がついた。

この人物こそ彼が迎えに来た、王の元教育係で、「生ける魔法史」の異名を持つスカーレット本人なのだ。

第2話

*

「魔法を使うとこんなにあつという間の道のりなんですネ」

空飛ぶ馬車に揺られて数時間、スカーレット達三人は無事、城門の前まで辿りついてた。

こんなに簡単に着いてしまうとは、自分の行きの努力は一体……。ルーファスは帽子を脱ぎながら、今来た道の先を眺め、複雑そうな顔をした。

ガーネットが呪文を口の中で転がすように唱えると、馬車はみるみる縮んでいき、おもちゃのようになってしまった。

「すごいでしょう？ 私が術式を創りあげたものなのよ。まあ、便利だけど操作も難しいし、魔力も大量に消費するからあまり実用的ではないのだけど」

「しかし、あなたほどの魔法使いなら、これくらい余裕なのでは？」

「ん？ この馬車動かしてたのはガーよ」

「ああ、そうでしたか。お弟子さんもあなたに似て優秀なのですね」

「そんなことないわよ」

「そんな謙遜なさって……」

「違う違う。そうじゃなくって、私、魔法使えないもの」

「……え？」

「あるのは膨大な、知識と経験。実戦ではちょっとした魔法もさっぱりなの。だから家の雑用とか買出しは全部ガーにやらせてるのよ」

王国指折りの魔法使いが魔法を使えない？

一体何の冗談なのか、それともこれは詐欺なのか。

ルーファスは何度も目を瞬いては、魔法の使えない大魔法使いを見つめた。

「お師匠さまが大魔法使いと呼ばれるのは、優秀な魔法使いをこの国に沢山輩出したことと、魔法の研究においては並ぶものがいないことからなんです」

「つまり、魔法を使えなくても魔法使いといえるのですか？」

「普通は言わないと思いますけど。でもお師匠さまの場合、魔力自体はありますから」

「魔力があるのに、使えないのですか？」

「いいじゃない何だって。大体私は隠居なのよ。弟子だってもう取らないつもりだったんだから」

あまり追及されたくないとはかりにスカーレットは手をひらひら振って会話を打ち切った。長く生きていると色々と説明がややこしい事柄も増えるものである。

「でも隠居したつもりだったのは、私だけなのかしら……。まったく、困ったことがあるとすぐこれなんだから。今回だってトゥーの為でなかったら来たくはなかったわ」

「はあ、申し訳ありません」

「どうしてあなたが謝るのよ」

スカーレットは国王に振り回されるこの憐れな羊臣下を見て、眉根を寄せた。

自己中で我がままで尚且つ面倒くさい男である国王の為なら、死んでもこんなところには来なかったのに。しかし、事がトゥートリアの為ならば致し方ない。スカーレットは短い髪を肩の後ろへ流し、城門を睨みつけた。

トゥートリアとは、国王の一人娘で、この国の王女のことである。

ルーファスいわく、「姫に関することで、国王陛下が相談したい事があるとのこと」らしい。

スカーレットから見て、国王はどうしようもないアホだが、トウートリアは別である。彼女が赤子の時に会ったきりだが、それだけでも可愛い我が子のようなのだ。

そう思ってしまうのも歳のせいかしら。スカーレットはまだ幼さが残る顔つきで、ぼんやりとそんなことを考え城門に目をやった。

「それにしても、相変わらず無駄に立派な城門ね」

「城門っていうのは普通、立派なものなのでは？」

弟子の鋭い突っ込み、というか当たり前な意見にスカーレットは「うるさい」と小さく唸りを上げた。

しかし、実際目前にそびえ立つスイートピア城の門は、城と同じくらい立派で美しい作りである。真つ白な石造りの城壁には一定間隔で小塔が組み込まれていて、その中心にはひと際大きな、石で出来た扉である城門が構えていた。

扉には色とりどりの宝石と、金銀細工で魔法陣が描かれている。おそらくは侵入者を防ぐための守りの魔法なのだろう、とガーネットは城門をまじまじと見つめた。

「あの魔法陣にご興味が？ 何でも魔法界の権威である方が作ったものだそうで……。国の重要文化財でもあるのですよ」

「あ、いいえ。似たようなの見たことあるな、と思って」

「はは、当然ですよ。有名ですからね」

自慢げに微笑み、自分が仕える王の城を見上げるルーファス。それに対し、ガーはにこにここと微笑み返し「そうですよねえ」と愛想のいい声で同意をした。

そして、ルーファスに聞こえないようにスカーレットにそっと耳

打ちをした。

（お師匠さま、あれ作ったのお師匠さまですよね？）

（この城にある、魔法による仕掛けの全ての基礎を作ったのは私よ？ いちいち説明なんてしてられないわ）

スカーレットの冷めた返答に、ガーネットは「さすが僕のお師匠さま」と満足げに微笑みをもらした。その思いと同時に、そんな昔から王族と付き合いがあったのか、という考えが浮かんた。

自分の師匠なのに、知らないことが多いんだよな。ガーネットはそう思うと少し寂しい思いに駆られた。そして、大きなため息と共に、つい言葉ももらした。

「お師匠さまは僕のおんなことやこんなこと、恥ずかしいところも全部知ってるのに」

「昼間っから、誤解を招く様な独り言吐かないでくれる？」

「僕の体に関しても隅々まで熟知してるし……」

「そりゃあ、あなたのオムツを替えたのは私だからね。今はあなたのオツムも替えたい気分よ」

慣れているのか、スカーレットは適当に弟子の変態発言を流して、話を本筋へと戻した。

「にしても城に来るのも久しぶりね。四十数年ぶりかしら」

この言葉に、ルーファスはスカーレットが本当に見た目とは違い高齡なのだと実感させられた。

「四十……、姫様と会ったことがあると言っののは？」

「それは王妃が亡くなった時、彼女の療養先でだから」

「ああ……そうでしたか」

「というか、王都に来るのも久々なのよね」

「お師匠さま、確か王都にある王立魔法学院に勤めていたんですよね？」

「昔むかし、ね。昔の弟子の一人にどうしてもって頼まれて、断れなかったのよ」

昔とはどれくらい昔なのか、ルーファスは目を細めながらスカーレットを凝視した。しかし、どれだけ見てもやっぱり彼の目の前の少女はそんな長い時を生きてきたようには見えなかった。

「僕はさすがにお城は初めてなんで緊張しますねえ」

「それは緊張してる顔じゃないわ。わくわくしてる顔よ」

「いやだなあ、僕はそんな大物じゃないですよ」

「あつそう。私は本当に久々だから、何だか気が引けるわ」

いつも、この城門の前に立つ時は複雑な心境だった。威圧感とか、そういう問題ではなく、ここに来る時の理由というのが、いつも彼女の心を憂鬱にさせる事柄ばかりだったからである。

何だかんだ言っても私って昔から世話焼きなのよね。頬を押さえ、ため息をつくスカーレットの姿を見て、ガーネットは爽やかな笑顔で彼女にアドバイスをした。

「お師匠さま、こういう時は自信をしっかり持って！」

「ガー……」

自信がないとかそういう事ではないのだが、弟子の心使いに、スカーレットは少し気が楽になった。

そんな師匠の思いとは裏腹に、ガーネットは輝いた、自信に満ちた笑顔でこう続けた。

「大丈夫ですって、お師匠さまはそれはとても可愛らしいのですから胸を張って下さい！　というかほば無いのですから張って少しでも大きく見せて下さい！」

「……あんたは私をけなしているの？　それとも褒めているつもりなのかしら？」

「もちろん褒めてます！　尊敬してますし、むしろ愛しています！」
「……一体どこで育て方を間違えたのかしら。こんな残念な弟子に成長するなんて……」

頭を本格的に抱え、弟子と過ごした十九年の月日を振り返り、スカーレットは苦悩し始めた。

ルーファスはこの二人の関係について、師匠と弟子程度にしか把握していない為、何も言えずにこの様子を眺めていた。

（いつになったら門をくくれるのだろうか）

ルーファスはそう思いながら、門番二人に目をやった。すると彼らも同じことを思っていたらしく、弱った笑顔を返して来た。この門番達は、この門の解錠の儀式を行うための宮廷魔道師でもある。彼らは何度も門を開けようとしては、引っ込めた手が行き場をなくしていて、何とも気の毒なありさまであった。

第3話

*

三人はようやく門をくぐって、城の入り口へと伸びる階段を上り城内へと歩みを進めた。城内の長い回廊は白く滑らかで、歩く人の姿をうつすらと映して輝いている。足音が、細やかな絵が描かれた天井に、反射して響いた。

頭上からは程遠くにある天井の絵は、どうやら神話を元にした物語となっていて、謁見の間へ続いているらしい。ガーネットは天井の物語を目で追いながら、ゆっくりとした足取りで二人の後に続いた。

「ガー、よそ見しながら歩くと転ぶわよ」

「はい。おししょーさま」

返事をしながらも、天井を仰ぎ続ける弟子に、スカーレットは呆れながらもそれ以上は言わなかった。

そんな時、ふと、柱の陰から視線を感じて、スカーレットは反射的に後ろに目を向けた。しかし、後ろに人の姿などとは見あたらず、スカーレットは眉根を寄せた。

（確かに今、視線を感じただけだ）

柱の陰を詳しく調べたかったが、ルーファスのせかす声のせいか、急に興味がしぼんでしまい、身をひるがえし再び歩き始めた。

歩きながらもスカーレットは時々後ろに視線をやった。城内に怪しい人物がいるとも思えないが、もしものこともある。

（まあ、変な奴の百人や二百人、ガーがいるから何とかなるしね）

しかし、その「変な奴」の筆頭が、頼るべき弟子であることに、スカーレットは小さくため息をもらした。

やがて、スカーレットにとって懐かしく、何とも胃がむかむかする扉が見えてきた。謁見の間の扉である。

ルーファスが衛兵に用件を告げると、スイートピア王国の紋章が描かれた扉が重々しく押し開かれる。扉が開けられると同時に、赤く滑らかな垂れ幕に金糸で刺繍を施した、扉にあったのと同じ紋章が視界に飛び込んできた。

一輪の花を守るかのように交わされた剣と杖。国を守る騎士と魔法使いを象徴した紋様、それがスイートピア王国の紋章であった。

そして、その煌びやかな垂れ幕の前に置かれた金細工の椅子に、落ち着きはらって腰を下ろしている男性がいた。

そう、彼こそが今回スカーレットを呼びつけたこの城の主である、トートリアス・スイートピア国王であった。

国王は、スカーレットの姿を確認すると、みるみる内に顔を明るくして手を前に広げた。

「やあ！ レイ、よく来てくれたね！」

「で？ 用件は何？」

レイとはスカーレットの愛称で、昔馴染みの人間がたまに呼ぶ名前である。

国王はスカーレットの冷めた声や視線にも全く動じなかった。しかし、少し傷付いた振りをしながら、口を尖らせスカーレットに反論した。

「冷たいなあ。久しぶりの感動の再会なのに。もっとこう……『久

しぶり！ トト！ 私の可愛い金色の子獅子ちゃん！』とかないのかなあ」

「っていうか、五十歳にもなって『子獅子』はどうなのよ。大体別に会いたくなかったし。可愛かったのは三歳までだし」

「まだぎりぎり四十代だよ！ レティは三世紀歳だっけ？ それに比べたら私なんてまだ『子供』だろう？」

「歳のことはさておき、あなたみたいな口髭を生やしたおっさんを可愛い子供には思えないわ。タイムトリップして出直して来なさい」

容赦ないスカーレットの切り返しに、国王はがっくりと肩を落とした。そして寂しそうな目をスカーレットに向けてうるうる涙ぐんでみたが、いい加減イライラしてきた彼女に極寒を思わせる視線で跳ね返されてしまった。

「昔はベッドであんなに可愛がってくれたのに……」

「いかがわしい言い方しないでよ。あなたが三歳の頃に添い寝してあげただけでしょう」

「僕だって！ 朝までベッドで可愛がってもらいましたよ！」

「はい、そこ、対抗しない。小さい頃、恐い夢を見たっていうから朝までお話してあげただけでしょう」

どうしてこうも、自分が面倒を見た子供は変態に育ってしまうのか。いや、そんなことはない。立派な内弟子も外弟子もいたはずだ。スカーレットは膨大な歴史が詰まっている頭をフル回転して、変態では無い自分の弟子を思いだそうとした。

スカーレットが思い出の中の変態と常識人を選び分けている間に、ルーファスはうやうやしく咳払いをしてから口を開いた。

「陛下、そろそろ本題に入られてはいかがでしょう？」

「おお！ そうだったな！」

国王は大げさに頷いてから、手を大きく二回叩いた。すると、周りに控えていた城の使用人や衛兵が一斉に部屋から退室していった。その音で我に返ったスカーレットは「やっぱり常識人のが断然多いわ!」と納得するように声を上げてから国王に目をやった。

「人払いするなんて、余程の相談事なのかしら?」

「ふむ、実はレティに頼みたいことがあってな」

国王はそこまで言うと、急にもじもじしたように身をくねらせて、次の句を継ぐのをためらった。そのあまりの女々しさと気持ち悪さに、スカーレットは弟子に対して思わず恐ろしい事を呟いた。

「あそこの気色悪い髭男を死なない程度に焼いておしまい」

「ミディアムレアですね。了解しました!」

ルーファスは、本気で魔法を使おうとしているガーネットを急いで止めた。嫌な汗が体中から一気に噴き出したルーファスの顔は真っ青である。

笑顔のままの国王も、この師弟のやり取りにガチガチと歯を鳴らしていた。

「じょ……冗談はよして下さい! 国王陛下はステーキでは無いのですよ!?!」

「半分は本気よ」

「僕はお師匠さまの命令には絶対服従ですから!」

とんでもない常識外れな師弟である。ルーファスはこの師匠にしてこの弟子ありなのだ、スカーレットが聞いたら憤慨しそうなことを心の中でひっそりと思った。

「はい、それで頼みたいことって？」

「実はレティに姫になって欲しいのだよ！」

先程のやり取りのお陰か、すっかり滑舌がよくなった国王から早口で告げられた言葉に、スカーレットはもちろん他の二名も目を点にして固まった。

第4話

「は？」

スカーレットは自分の耳がおかしくなったのかと思い、国王の意味不明な発言をもう一度聞き返した。

「だから、その、ほら、我が姫トゥートリアは生来病弱だろう？」

「初耳だけど」

「病弱なのだよ！ だから今も離れで伏せっておるのだ。しかし！ トゥートリアは我が国たった一人の姫！ そのたった一人の跡継ぎが病弱だなんて国内、ましてや国外に知られたら……」

「付け込まれる。って言いたいわけ？」

「そう！ それ！」

何だか適当で納得がいかない説明にも思えたが、スカーレットは話を進めさせた。

「で、私にトゥートリアの振りでもしろと？」

「いやいや。さすがにそれは無理だろう？ だからレティを私の隠し子ということにして、この国の第二王女として振る舞って欲しいのだ！」

ばーん、と両手を広げ、スカーレットに微笑みかける国王。

「……ガー、帰るわよ」

「お師匠さま、せっかくだから王都でおいしいもの食べていきませんか？」

「そうね、ついでに買い物して帰りましょうか」

「ええっ！ ちょっとストップ！ ストップ！ レティってば！
一生のお願いだからあ」

「あなた、これで一生のお願い何回目？ そうやって駄々こねても
可愛いのは子供の頃だけよ」

この一見、小さな少女にすがりつく、いい歳したおっさんの図は、
ルーファスの頭を痛くした。

（確かに、部屋の人間を全員退出させて正解だったな……。こんな
国王の情けない姿を他の人間には見せられん）

ついには土下座をしようとした国王を席に押し戻し、ルーファス
は自身もスカーレットに頼み込むこんだ。

「お願い致します。私に出来る事でしたら何でもお力になりますの
で」

「ルーファス、こんな駄目な大人甘やかしてもロクなことにならない
いわよ」

国王を駄目な大人呼ばわりとは。スカーレットからとてつもない
威圧感を感じ、ルーファスは思わず自分が子供に戻った気分になっ
た。実際、スカーレットから見たら彼は十分子供なのだが。

「大体私に頼むメリットはなに？」

「ええと……レティは顔なじみだし、それに見た目よりしつかりし
てるから、姫になっても臨機応変に対処してくれそうだし」

「見た目よりって……当たり前でしょう。あなたより断然人生経験
豊富なんだから。理由はそれだけ？」

「ま……まあ」

「本当に？」

「本当だとも！」

スカーレットは国王のエメラルドグリーンの瞳を、穴があきそうな程に見つめた。

そして何か思いついたように、ガーネットの方を一瞥して、また国王に視線をもどした。

「いいわ、引き受けましょう」

「おお！ 本当か？」

「ただし、条件があるわ」

「ああ、何でも言ってくれ！」

スカーレットはわざとらしい咳を、コホンとしてから、指を立てて条件を言い始めた。

「一つ！ 基本的に私の意思を尊重し、優先させること」

「ああ、もちろん」

「二つ、ガーをこの城の宮廷魔道師団に在籍させること」

「上等の席を用意せよう！」

「三つ、ガーがこの城のメイドなどの女性陣に手を出しても見逃す事」

「お年頃だからな」

この条件に一番驚いたのは、他でもないガーネットだった。

「ちょっと！ お師匠さま！ 二つ目ですが、最後の何ですか！？」

「ガー、あなたもそろそろ自立する頃でしょう」

「でも……」

「だから手っ取り早く、所帯でも持って独り立ちしないかなって」

「デキ婚希望！？　そうなんですか！？　そこまで僕を追い出したんですか、お師匠さま！」

何も聞こえないふりを決め込んだスカーレットに向かってガーネツトは吠え続けたが、疲れてきたのか、無駄だと悟ったのか、急に大人しくなった。

スカーレットの言う通り、ガーネットは既に魔法使いとして自立してもおかしくない年頃や実力であった。しかし、それでもガーネツトが師匠の元に留まるのは、彼が彼女に非常に執着しているからである。

（絶対、出ていくものか。お師匠さまの思い通りにいくと思ったら大間違いですよ！）

ガーネットはそう固く胸に誓った。こうなったら根競べである。

「まあ、詳しい打ち合わせは明日にしましょう。今日は、宮廷魔法師団の団長にでも会いに行くわ。ええと今の団長は誰？」

「昔、王立魔法学院の教授をしていた者で、アランと言っただが…

…」

「アラン？　あの金髪碧眼のツンデレ美少年？　そう、あの子が。ほんの数十年で偉くなったものね」

「……ツンデレ美少年？　アランは爺さんだが？」

「昔はそうだったのよ。あんな美少年でもお爺さんになるのね」

手を頬に添え、上品にため息をつくスカーレット。

美少年だと歳をとらない理論でもあるのか？　とその場の誰もが思ったが、誰も何も言わなかった。下手な事を言っただけ彼女の怒りをかいたくはない。

基本的に魔法使いで長寿は多いが、不老長寿である者はほとんど

存在しない。魔法で若く見せている者もいるが、それは本来の姿ではないし、魔力を大量に消費するので寿命も逆に短くなるのだ。スカーレットが特別長生きで、姿が変わらない理由は誰も知らなかったし、彼女自身が知っているのかも不明であった。

ルーフアスが宮廷魔道師団の研究室まで案内すると申し出たが、スカーレットはそれを丁重に断り、ガーネットを連れて部屋を後にした。

「お師匠さま」

「何？」

「今回の件を引き受けた本当の理由は何ですか？」

弟子の意外な言葉に、スカーレットは目を丸くした。さすが我が弟子、師匠のことなら大体何でもお見通しである。

「ちょっと、気になる事があってね」

「気になること、ですか……」

スカーレットはそれだけ言うと、黙ったまま回廊に足音を響かせた。ガーネットもそんな師匠の姿に、黙ったままに付き従った。

広い謁見の間に二人だけが取り残された。ルーフアスは国王に何か言いたげな視線を向けた。

「何だ？ バトラレーゼ侯爵」

「おそれながら申し上げます。スカーレット様は四十年程前にも城に居られたようですが……」

「ん？ ああ、城の者に偽物の姫だとばれるのではと心配しているのか？ 大丈夫だ、当時は私の専属教育係のようなものだったから、

知り合いはほばいないし、その知り合いも今は隠居だ。宮廷魔道師団も団長以外に知り合いはいないだろう。つながりがあっても弟子の弟子とか、弟子の弟子の弟子とかで、面識はないだろうよ」

「さようですか……」

「まだ何かあるのか？」

ルーファスは少し考え込み、言葉を選んでから、再び王を見て口を開けた。

「私はてつきり『大魔法使い』であるスカーレット様に、姫様の力になって頂こうとお考えなのかと思っております」

「お前の考えは間違っではないぞ」

国王は自慢の髭を撫でて、玉座に深く座り直した。

「レティは確かに魔法は使えないが、一流の魔法使いだ。きっと何とかしてくれる」

国王の確信に満ちた声に、ルーファスは納得しながらも、顔を不安で曇らせた。

スカーレットとは、国王にそこまで信頼される程の人物なのか。魔法関係に疎いルーファスにはまだ彼女の実力がはかり知れなかったのであった。

第5話

*

「あーあ」

「どうしたんですか？ お師匠さま。朝食の食べ過ぎで苦しいとか？」

「そうそう。だって、王室お抱えコック長の焼き立てパンが美味しすぎてつい……って違うわよ」

「違うんですか？ あ、あと、僕はお師匠さまの料理の方が好きですよ」

スカーレットは弟子の抜け目ない褒め言葉に適当に相槌を打ち、食後の紅茶にレモンを一切れ投下した。

まだ城内の人間には今回の事についての説明をしていないので、二人は賓客室で食事をとっていた。ちなみに、ここは昨日スカーレットが一晚過ごした部屋で、ガーネットの泊まった部屋は隣である。

「だって、昨日見たでしょう？ あの白髭もじゃもじゃ！ 本当にあれでは別人ね」

「ああ、あの魔道師団長さんですか？ そりゃあ、あのお歳ですしね。あの眉毛の長さには僕も驚きましたが」

「アランは動植物の成長促進の魔法を研究してたからね。昔からその実験のせいで髪が長かったわ。私はそんなあの子を追いかけてまわして髪を切るのが好きでね。だってせっかくの美少年なのに勿体無いでしょう？」

「お師匠さまが美少年好きとは意外でした。……もしかして、僕が美少年ではなく、美青年に成長したから追い出そうと！？」

「何さりげなく、自分を美形に分類してるの……。それに別に美少

年好きというわけではないから」

スカーレットは指を横に振って、ガーネットの発言を全て否定した。

大体、自分で美青年宣言とはどれだけ図々しいのだ、この弟子はことうのうのを残念な美形というのだ。

うんうんと頷き、紅茶をすすする師匠を不思議そうな目でガーネットが見つめていると、扉を遠慮がちに叩く音が聞こえてきた。

「ルーファスかしら？ どうぞ」

扉が開かれると、やはりそこに立っていたのはルーファスだった。昨日とは異なり、今日は貴族らしい、細かい刺繍を施した襟の質のいい服を着用していた。

「失礼致します」

「そんなにかしこまらなくてもいいわよ。国王が呼んでいるのかしら？」

「いえ……。それが、陛下は朝からご気分がすぐれないそうで」

「仮病ね」

「いえ！ そんなことは決して！」

「どうせあなたに、自分では言いにくい用事を伝えてくるように頼んだのでしょうか？」

「いえ……。そんなことはけっして……」

声が小さくなっていく、ルーファスを見て、スカーレットはさすがに気の毒に思ったのか、それ以上問い詰める事をやめることにした。既に広い、彼のおでこがこれ以上広がっては可哀想だ。

「それで？ 副業姫に関することかしら？」

「ふ……副業姫？」

「だって私、本業は魔法使いでしょう。姫は副業ってことになるわけよ」

確かに言い得て妙である。

ルーフアスはスカーレットの言い回しに感嘆して、思わずうなづいた。

「副業といえば、お手当の話がまだでしたね」

「いいわよ、そんなの。あの子の馬鹿馬鹿しい提案で決まったことに国税を使うなんて、国民に悪いもの」

「しかし……」

「あ、でも、ガーのお給金はちゃんと出してね。給料分しっかり働かせるし」

「はあ……」

結局何も言い返せないまま、スカーレットに押し切られたルーフアスはがつくりと肩を落とした。自分より年上だと頭では分かっているのだが、スカーレットの姿を見ると、自分が小さなお嬢さんに言いくるめられている気がして情けなくなってくるのだ。

「……何してるの？ ルーフアス」

「いえ、見なければいいのだと思い」

手で目を覆ったまま、直立するルーフアスを怪訝な目で見ながら、スカーレットは話を続けるよう勧めた。

「実は、近々隣国から大事なお客様がいらっしゃるのですが。その席に是非、スカーレット様に姫として同席して頂きたいと陛下が」
「そんなの国王一人で平気でしょう」

「ですが……。その、王女様も同席させるとのお約束でして」

齒切れの悪い、ルーファスの様子を見て、スカーレットは嫌な予感がした。すると、彼女がその予感を言うよりも先にガーネットが口を開いた。

「おやおや、まるでお見合いみたいですな」

スカーレットも考えたその言葉に、ルーファスの肩がビクツと震えた。凶星らしい。

「いえ！ 別にお見合いと言っわけでは！ ただ向かい会って、『ご趣味は何ですか？』とか話合うだけでして……。え！？ って！？」

力説もと言いつくする為の勢いで、今まで塞いでいた目を明かりにさらしたルーファスは目の前の光景に息を呑んだ。

彼の目の前に見えたのは、窓から差し込む陽の光よりも眩い光。

それはガーネットが体から発してる怒りの光であった。

「あんまりくだらない事をお師匠さまにやらせるつもりなら、僕が黙ってませんよ？」

「そ……そのようなつもりでは」

「僕だって、基本は平和主義ですから。こんな方法で説得はしたくないのです」

それは説得ではない。脅迫だ。

ルーファスは顔を引きつらせおろおろして、スカーレットに助けを求める視線を送った。スカーレットは軽いため息をつき、手をポンと叩いた。

「はい。そこまで。あなたの保護者は私だけど、私の保護者はあなたではないのだから」

「でも、お師匠さまあ」

「いじけた声出しても可愛くないから。あなたも時空の旅にでも出て来なさい」

スカーレットにたしなめられ、急速に光は小さくなり、ガーネットの体に収まっていた。ルーファスはその様子を確認し、ホツとした様子で息を吐いた。

しかし、光に当たったせいか、ガーネットの足元で黒く焦げている絨毯を見て、今度は深いため息をついた。

「それが魔法ですか？ まじかではあまり見た事がないので判断がつかねますが」

「そんな魔法なんて大それたものではないけどね。今は」

スカーレットはガーネットを軽く睨みつけ、小さくため息をついた。

「魔法っていうのは、繊細なものなの。ただ力を放出するだけなら素人にだってできるわ。まあ、その加減は難しいのだけど」

「では、私にもそのくらいは出来ると？」

「魔力があれば可能性はあるわね。でも、この国の人間は十人に一人くらいは、大なり小なり魔力を持って生まれてくるけど魔法使いになれるのはほんの一握りなの」

「つまり、殆どの人は、魔力を御しきれないということですか？」

「そういうこと。魔力が小さくても器用なら良い魔法使いになれるの。まあ、魔力が大きくて器用なら言う事なしね。でも、ガーミタに魔力が大きい人間がそもそも希少だし、そういった人間が魔法使い志望とも限らないんだけど」

「そういうものなのですか……」

つまり、スカーレットは不器用だから魔法が使えないのか。ルーファスはそう納得して、思わず口に出してそのことを言いそうになった。しかし、ちらりと焦げた絨毯を再び見て、ルーファスは慌てて口をつぐんだ。

また逆鱗に触れるところだった。

そんな彼の様子を、スカーレットは違う風に解釈したらしく、にこりと安心させるように微笑んだ。

「あ、絨毯は平気よ？ 後でガーに元に戻させるから」

「そうですか！？ 助かります」

「当然よ、ガーが悪いんだもの」

しゅんとしながら、今度は大人しく話を聞いていたガーネットはその言葉に小さく頷いた。しかし、その瞳の奥は未だにルーファスに敵意の炎を燃やしていた。

「そういえば、その隣国がどこか聞いていなかったわね」

「ああ、申し訳ありません。言いそびれていました。エノワルドです」

「エノワルド……」

スカーレットはその国名を聞いた途端、微妙な表情を見せた。かと思えば、懐かしそうに微笑んだり、また眉根を寄せたりと一人百面相である。

「何か思い入れのある国なのですか？」

「え？ ええ、まあね」

「それで、今回の件は……」

「……いいわ。受けましょう。別に結婚するわけでもないのだし」

案外、あっさりしたスカーレットの快諾に、ルーファスは胸を撫で下ろした。未だに黒い視線が突き刺さるが、仕事なのだから仕方が無い。

どうか呪い殺されませんように。

ルーファスは今晚から毎晩、神にそうお祈りをすることを心の中で固く誓った。

第6話

*

朝早く、城内の廊下をせわしく歩き回る音が響いた。

広く、まるで迷路のように入り組んだ城は、どこになにかあるかも分からない複雑さだった。

巨人の住居でもあるまいし、こんなに広くする必要性がどこにあるのか。

足音の主、ガーネットはそんな事を考えながら、とにかく前へ前へと歩みを進めた。自室への帰り道は魔法で目印をつけてあるから心配がない。とにかく突き進むまでである。

そんな彼の前に見覚えのある顔が現れた。

「おや、ガーネットさん。どうかされたのですか？」

白く長い髭と眉毛に顔の大半を覆われた老人は、ずり落ちてきた三角帽子を元に戻すのにこりと微笑んだ。正確には白い毛が微かに上に動いた、気がしたという程度だが。

頭は顔と違い、全く毛が無いのだが、後ろで結んだ無駄に長い眉毛のせいで上手く誤魔化せていた。

「魔道師団長さん……」

ガーネットは彼を見てそう呟いた。そう、彼こそが「元金髪碧眼ツンデレ美少年」の宮廷魔道師団長、アランなのだ。

「どうかしましたか？ 私も丁度あなたを尋ねようと思っていたのですよ」

「何かご用でも？」

「ええ、宮廷魔道師団の制服を届けようと……」

アランはそう言うと、持っていた紙袋から、制服を出して見せた。宮廷魔道師団の制服は黒に近い紺色で、ケープとインヴァネスケープの二種類があった。どちらにも中心には大きく王国の紋章が刺しゅうされていて、それ以外には特に華美な装飾のない実用的なものである。

「一応、二種類持つてきました。私が着てるのはインヴァネスの方ですが、今の若い方はケープだけの方が人気があるようですね」

「はあ、ありがとうございます」

長い裾を引きずっているアランを見て、彼もケープだけの方がいいのでは、とガーネットは思ったが面倒なので言わないでおいた。

「レティ殿が王女様用の部屋へ移られましたら、ガーネットさんも魔道師団の宿舎の方へ移って頂こうと思ったのですが」

「えー？ お師匠さまと部屋が離れるんですか？」

「あ、いえ。そう思ったのですが、陛下がレティ殿の警護はひとまずガーネットさんに任せよとの仰せなので、部屋はレティ殿の近くに用意して下さるそうです」

「そうですか」

ガーネットはその言葉に安堵し、表情を緩めた。そして当初の目的を思い出して声を荒げた。

「そうでした！ その警護すべき僕のお師匠さまが見当たらないんですよ！」

「レティ殿なら、外に買い物へ行きましたよ？」

「えっ！」

「魔法で捜されればすぐに見つかるでしょう？　あなたほどでしたら、そのくらいは簡単では？」

「緊急事態以外は、お師匠さまの許可が無い限り、基本的に魔法を使うなど言われてまして……。お師匠さまに対して使ったらさすがにばれるので……」

ということは、ばれなければ使うのか？

アランはガーネットの抜け目のなさに苦笑いをしてから、城下町の地図を魔法で紙にさっと印字して渡した。

*

「ああーいい天気だわ、絶好の買い物日和ね」

昨日はルーファスと副業についての打ち合わせで終わっちゃったし。

スカーレットは背伸びをして、久々の王都を見渡した。四十年前と変わっていない所も多いが、知らない店もいくつもあった。石畳の道は所々舗装され、点々と白い綺麗な部分があったが、基本的には四十年前のままである。

背伸びをした拍子に脱げた、赤いケープのフードを被りなおすと、スカーレットはこれからの計画を練り始めた。

（あの店まだあるかしら？　あそこのケーキも食べたいなあ。でも折角久しぶりに来たんだから、新しい店も開拓したいなあ）

ぼんやりと考え事をして道の真ん中に立っていると、急に肩をポンと叩かれた。振り返ると、そこには知らない中年の男性が気持ちの悪い笑顔を浮かべて立っていた。

「お譲ちゃん、迷子かい？」

（ええ）。真昼間から人攫い？）

ナンパという考えに至らないのが、スカーレットがちゃんと自分のことを客観的に見れている証拠である。

「迷子じゃないし、お譲ちゃんでもないわ」

かと言って、おばあちゃんと呼ばれるのもかなり不本意だが。

「おじさんが美味しいケーキ、ご馳走してあげようか？」

「結構よ。タダより怖いものはないからね」

「そんなに警戒しないで大丈夫だよ。おじさん、怖い人じゃないんだから」

「確かに怖くはないけど、すっごく怪しいわよ」

「でも、ほら！ お譲ちゃん可愛いから、変な人に連れて行かれたら危ないでしょう？ お家の人が見つかるまで、おじさんが一緒にいてあげるよ」

そう言っつて男はスカーレットの腕を乱暴にとって歩き始めた。

スカーレットは引つ張られながら、いかにも面倒くさいな、という顔をしていた。

（全く、最近のガキは。どうしてこう人の話を聞かないのかしら）

中年をガキに分類しながら、スカーレットは大きなため息をついた。そして懷に手をつっ込み、何かを探し始めた。スカーレットが探しているのは、首から下げている護身用の魔法の金笛である。そ

れを吹くと、特殊な音波が発生し、自分以外の半径三メートル以内にいる人間を気絶させることが出来るのだ。

スカーレットが笛を見つけ、口に運ぼうとした瞬間、男が急に立ち止まった。あまりに急だったので、スカーレットは男の背中に鼻をぶつけてしまった。

「な……何だ、お前」

「後ろのお譲さんは嫌がっているように見えますが」

「お前に関係ねえだろ！ 優男は引っ込んでろ！」

「私は暴力は好きではないのですが……仕方ありません」

その言葉が聞こえた直後、男はスカーレットの手を離し、一目散に逃げていってしまった。前に立っていた男がいなくなった事で、視界が明るくなったスカーレットの目に入ったのは、剣を鞘に収めている最中の青年だった。

青年は顔を上げ、スカーレットに微笑みかけた。黒く切り揃えられた黒髪がさらりと揺れ、青く透き通る瞳がスカーレットを捕らえる。途端、スカーレットの中で血が逆流するような衝撃が走った。

似てる、あの人に。

スカーレットの遠い記憶の向こう側で、「彼」が確かに微笑んだ。

第7話

「怪我はありませんか？ 赤ずきんのお嬢さん」

話しかけてもぼんやりとしているスカーレットを、まだ怯えているのだと勘違いした青年は困った顔をして首を傾げる。小さい女の子の扱いに手をこまねいている、といった様子だ。

「ええつと。もし良かったら、家の人と一緒に探しましょうか？」

「え、あ、いいえ。平気よ、迷子じゃないわ」

「そうですか？ でもさっきのような人間もいますから、一人で出歩くのは危ないですよ。王都は警備が厳重と言っても、あのような者も多いですから」

「そう、ね。あ、先ほどは助けてくれてありがとう。私、スカーレットと言うの」

「良い名前ですね。私の名はジ……ジゼルと言います」

ジゼルと名乗った青年はとっさにスカーレットから目をそらし、そのまま足元に視線を移した。そんな彼の声や様子を見て、スカーレットは疑わしげに目を細める。怪しい。

「……ふうん。女性のような名なのね」

「そ……そうでしょうか？」

スカーレットはジゼルをよくよく眺め、左耳に付けられた耳飾りに目をとめた。古代文字が組み込まれた魔方陣を刻んだ銀の円盤に、夕焼けのような鮮やかな赤の飾り紐が付けられた耳飾り。

それを見て、スカーレットの頭の中で一つの線が繋がった。

「なるほど……似てる訳よね」

「え？」

「いいえ、こちらの話。あなた、国外の方でしょう？」

「え、ええ。まあ……」

「しかも結構いい家柄の」

「え！？ 何故……」

スカーレットは、本当に驚いたという顔をしたジゼルを見て少し呆れ返った。耳飾りの件はともかく、そんな立派な格好してれば誰でも気がつくに決まっている。地味なものを選んだのだろうが、質のいいものばかりなのだ。

（案外抜けてる？ それとも世間知らずなだけかしら）

「身につけているものが高価そうなものばかりだからね」

「そうですね……。一般市民はこういったものをつけないのですね」

そう言った時点で「自分は坊ちゃんです」と白状しているようなものだ。

「自分であまりものを選んだりした事がないので……。失敗でした」

「そうなの？ あ、もし良かったらさっきのお礼に町を案内させて私、いい古着屋さん知っているからそこでマントでも買ったら？」

「そんなご厄介になるわけには……」

「いいのよ。それに私もあなたといった方が絡まれなくて済みそうだし。ねっ？」

「そういうことでしたら……。お願いします」

「決まりね！ さあ、行きましようジゼル」

スカーレットは満面の笑みを浮かべ、ジゼルの前を歩き始めた。
まだ少し戸惑っていた彼も、その笑顔につられたのか、彼女の歩幅に合わせて歩き始めた。

*

古い店が多く並ぶ通りをしばらく歩いた後、スカーレットはある店の前で足を止めた。その店は、両脇の店に押し潰されてるような外観で、看板も傾いて落ちそうな程のボロさである。

ジゼルは一瞬息を呑んだが、所詮庶民の基準など分かっていないお坊ちゃんなので、これがボロいのか普通なのかの判断さえつきかねていた。

「ここ……ですか？」

「そう！　ここよ。外見は悪いけど、中は結構快適なの。料理も店も、見た目じゃないわ」

指を立ててさりと断言するスカーレットを見て、ジゼルは店の中へと足を踏み出した。

すると、店の中は外観からは想像が出来ないほどに広く、凝った内装をしていた。高く伸びた棚に溢れんばかりの衣服が詰め込まれていて、中心部には螺旋状の柱が伸びていた。

おかしい。あの外観でこんなに天井が高いわけが無い。

「これは……魔法ですね」

「そうよ、大正解」

教え子を褒めるような口ぶりで、スカーレットはそう言葉を返した。ジゼルはどう見ても歳下にしか見えない少女が大人のように思えて首を傾げた。

「スカーレットさんは……」

「レティでいいわ。さんも無し、ね？」

「では、お言葉に甘えて……。レティは見た目よりもしっかりしているですね」

「良く言われるわ。ジゼルは見た目より幼く見えるわね。ええっと、歳はいくつなのか聞いていいかしら？」

「歳は、十七になります」

「あら、じゃあ同じね。私も十七だわ」

スカーレットはその言葉の後に、

（下二ケタが）

と、心の中で付け加えた。

「そうなんですか？　じゃあ同じ歳だったんですね。どうも幼く見
てしまって……。すみませんでした」

本当に申し訳なさそうにしているジゼルを見て、同じ歳ではない
のよ、と言うタイミングをスカーレットは逃してしまった。決して
わざと言い忘れた訳ではない。多分。

「いいのよ。私、年相応に見られたことないし」

これは本当である。彼女を見て、三世紀以上も生きていると一体
誰が思うだろうか。

「私も、見た目では大人に見られがちというか……。でも実際はそ
うでもない気もするのですが。でも周りはそう思ってるようですし。
どっちが正しいのやら……」

「な、なんかこんがらがるわね？　とりあえず服！　マントを見ま

しょう！」

スカーレットは無限ループな考えに囚われ始めたジゼルを無理やり現実へ引き戻し、棚からマントを引きずり出した。

藍染めのマントと暗い紅色のマント、何枚かをジゼルに合わせてみたスカーレットはこの二枚を選択肢として残した。どちらも一般庶民が着るには少し質がいいものだが、これは古着だったし、騎士身分の人間なら良く好んで着ている素材である。

あまりに陳腐なもの過ぎると、かえってジゼルのような端正な顔には浮いて見えてしまう。醸し出される育ちの良さをカバーするには、これくらいの素材のほうがいいのだ。

「どっちがいいかな？　どう思う？」

「そうですね……どちらも良いのでは」

「二枚もいらないでしょう、とりあえず」

「ええと、じゃあ赤？　いや青？」

「……もしかして、自分で服選んだことないとか？」

そう言われて、ジゼルはぐっと黙り込んだ。どうやら図星らしい。下を向いたまま、目だけを動かし二つのマントを交互に見比べる。

「正直、どちらが私に似合うか、自分では良く分からないんです。身の回りのことはいつも人任せでしたので。だから、今回は自分の足で町を周り、自分の目で沢山のものを確かめたかったです。…

…が」

「が？」

「新しい発見をするどころか、既に自分を見失ってます……」

これは優柔不断というよりもモラトリアムなのだろうか。周りが世話を焼き過ぎるがゆえに、自分を見失ってしまっているのだろう。

スカーレットはしょんぼりするジゼルに、片方のマントをふわりとかけてあげた。

「藍色のぼうが、耳飾りの紐の赤が映えて綺麗よ。こっちにしまし
よう?」

「レティ……。そうですね、こちらにします」

ありがとう、と礼を言いながら微笑むジゼルの顔に、スカーレ
ットの頬がほんのり赤くなった。
この笑顔は反則だ。

そう思い、すぐさま顔をそらしたスカーレットはマントを持って
レジへ向かった。

するとレジにいた白髪交じりの老人が、丸眼鏡を鼻の上にあげな
がらスカーレットの方を見た。そして、嬉しそうに微笑むと頭を何
度も軽く下げた。

「おや? レティ様。お久しぶりですね。お変わりないようで」

「ええ、私は相変わらずよ。でも、あなたはすっかり老けてしまっ
たわね」

「もう四十余年も経ちますから。あの時ちっこかった息子が今や三
児の親ですからね」

「そういう話を聞くと、どっと歳をとった気がするわ」

「……そうは見えませんかねえ」

二人で和気あいあいと再会の会話を済ませた後に、ジゼルが顔を
出した。店主は目を見開いて、スカーレットに耳打ちをした。

（随分若い恋人をお連れで……。歳のことをご存じで?）

（そんなじゃないわ。今日知り合ったばかりなもの）

（ナンパというやつですか?）

(……だからそういうのじゃないの。町を案内しただけ。せつかくここを紹介してあげたのに)

しつこい店主に呆れながら、とどめの一言を刺すと、その言葉がきいたのかどうなのか彼は納得したような素振りをみせた。

誰もかれもが歳のことを言うけど、私より年上の男性つて、恋人の条件としてハードル高すぎじゃないかしら。などとスカーレットが考えていると、ジゼルが何か聞きたいような顔で彼女を見つめていた。

「買い方、分かるかしら？」

「はあ、多分。といいますか、値段が……これで足りるでしょうか？」

ジゼルが取り出したのは、スイートピアの通貨の最高額である金貨であった。スカーレットは、彼がそれ以下の硬貨を持っていないのだろうことにすぐには悟り、店主に大量のお釣りを要求することにした。

第7話（後書き）

拍手画像更新しました（*^_^*）

第8話

スカーレットとジゼルは店を出ると、町をのんびりと散策し始めた。もちろん、ジゼルは買ったばかりのマントを羽織っていた。これで多少は一般市民に馴染む事ができるだろう。

石造りの橋の上から、遠くまで流れる小川を食い入るように眺めていたジゼルの横から、突然いい香りが漂ってきた。その香りにつられ、思わず顔を横に向けると、そこには彼が見た事のない様な食べ物を両手に持ったスカーレットの姿があった。

「はい。朝ごはん、まだでしょう？　これ、私のおすすめのな」

スカーレットはそう言い、微笑むと、温かな白いパンの様なものをジゼルに手渡した。ジゼルは、見た事のないいびつな形のパンを恐る恐る受け取り、スカーレットの顔と交互に眺めた。

これは食べ物なのだろうか。第一、一体どこでこのようなものを。そんなことをジゼルが考えてる間に、スカーレットは橋の手すりに寄りかかって、パンにおいしそうにかじり付き始めた。途端、ジゼルのお腹からぐぐもった音が唸りをあげた。

その音を聞いて微笑んだスカーレットを一瞥し、ジゼルは照れ隠しに咳払いをした。そして、ようやく決心をしてパンを一口。

「おいしい……」

「でしょう？　中のチーズとハムがトマトソースといい具合に絡んでて絶妙なよね」

「確かに素晴らしい調和ですね、これは」

ジゼルは心の底から感動したという表情をして、パンをもう一度口にした。それから一言もしゃべらずに、夢中でパンを頬張って

いた。ジゼルが最後の一口を呑みこむのを見届けると、スカーレットは彼に話しかけた。

「ジゼルって、もしかして、自分の国も自由に見て回ったことないのかしら？」

「え……。ええ、まあ」

「ふうん。随分過保護なご両親なのね」

「そう……。なんですかね。兄と姉が幾分か奔放な人達でして、その分余計に心配されていると言いますか……」

「皺寄せがきちゃってるって感じね」

そう言われて、ジゼルは初めてその事に気が付いたとでも言いたげな顔をした。恐らく彼にとってはそれがごく自然なことで、疑問を抱く様なことではなかったのだろう。

ジゼルは、自分の無知さに再び打ちひしがれ、虚ろな瞳で川を見つめた。

「今まで、私はどれだけ多くのことを知らないで生きてきたのでしょうか」

「そんなに落ち込むことじゃないわ。私も昔は魔法以外の一般常識には疎かったわよ？」

「でも、私は、しっかりとした自分を持つ必要がある立場なのに。こんなところでつまづくんなんて」

「最初から完璧なんてあり得ないわよ。今日、沢山の事に気付けたでしょう？」

「はい……。本当に新鮮な事ばかりで……」

顔を上げたジゼルの瞳には、微かに光が戻り始めていた。スカーレットはしっかりとその眼差しを捕らえ、彼の青い瞳に自らの柔らかな笑顔を映した。

「それなら大丈夫。明日も明後日もあるのだから。知りたいと思う気持ちがあれば、知識なんて後からついて来るものよ」

ジゼルはその言葉に、自然に顔をほころばせた。どこか、幼さが残るどこか未完成な微笑み。スカーレットはその笑みを、彼の答えと受け取り嬉しそうに口元を緩めた。

「そうやって、自分を形成していくものなのですね」
「そんなに小難しく考えなくてもいいのだけど……」

どこまでも生真面目な青年に、スカーレットは少し体の力が抜けた気がした。

（これは、しばらくはモラトリアムのままね……）

スカーレットは手すりに落ちていた木の葉を手で払い、川の緩やかな流れに乗せた。木の葉はくるくると回りながら、河川を辿る旅へと出掛けていく。こんなに小さい葉でも、気が付いた時には海に辿り着くのだろうか。

スカーレットは木の葉を見送ると、その視線を街路へと向けた。そして、目をぱちくりさせながら、ある人物達を指で指し示す。それはやけに身なりのいい男性の二人連れで、彼らは落ち着きなさそうに辺りを見回していたのだ。

「ね、あれ、もしかしてあなたの知り合いじゃないかしら？」
「え…… 本当だ。もう気が付いたのか……」

ジゼルは彼らの顔を確認すると、少し慌てた表情になり前髪を撫でつけた。そんなことしても顔を隠せるわけではあるまいに。

「では、これで失礼します。今日は本当にありがとうございました。また、何処かでお会い出来たらいいですね」

「あら？ 多分近い内にそうなると思うわよ？」

「え……？ それはどういう意味で……」

スカーレットの自信に満ちた言葉に、ジゼルは目を丸くした。だが、二人の男性がこちらに気付き近づいてきたので、彼は慌てて彼らの方へ足を向けた。言い訳はきちんと考えてあるのだろうか。

「まずい、もう行かなくては」

「ええ、またね」

駆けだしたジゼルをスカーレットはひらひら手を振りながら笑顔で見送る。男性達と合流したジゼルが、両腕をそれぞれ彼らに掴まれながら歩いていくのを確認しスカーレットも帰ることにした。

すると彼女の後ろには意外というか予想通りとも言える人物が立っていた。

「ガーネット、いつからいたの？」

大して驚きもせず、スカーレットは不機嫌そうに腕を組んだ弟子にそう尋ねた。しかし彼はその問いには答えず、逆に質問を返して来た。

「お師匠さま、今の人は？」

「さつき、知り合いになったの。何だかデートみたいだったわ」

ふふつと少女のように笑う……というか見かけはそもそも少女そのものなのだが、とにかくそんな師匠を見て、ガーネットは顔を引

きつらせる。

「は？ デ……デートですか！？ また、冗談を」

「そうよね、いい歳するときめいちゃうなんて、ね」

「ときめき……え！？ どういう事ですか？ ああいうのがいいんですか？」

「だってだって！ 初恋の人にそっくりなんだもの！」

頬を両手で押さえながら、ほんのりと赤くなるスカーレットに、ガーネットは益々顔を引きつらせる。

僕にはこんな反応一切したことないのに、とガーネットは一瞬言葉を失ったが、すぐに持ち直して肝心な事を聞いた。

「初恋……？ 誰ですか？ お師匠さまの初恋って！」

「まあ、似てるのは当たり前なのだけだね。あの顔で微笑まれると、やっぱり弱いわ」

「似てるのが当たり前？ というかお師匠さま、僕の質問聞いてないですね！？」

「あ、結局買い物出来てないわ。ガー、荷物持ってたね」

「お師匠さまっ！」

さっさと歩きだしたスカーレットを追いつつ、ガーネットは尚も質問を続けた。全ての問いかけを流され続けるだろう覚悟をしながら。

しかし、ガーネットはその後すぐに「彼ら」の正体を知ることになった。

第9話

*

宮廷魔道師の制服に身を包んだガーネットは、小さく咳払いをしてから目の前の扉をノックした。中から入室を促す軽やかな声が聞こえてくる。

その声を聞いて扉を開けたガーネットはその光景に思わず息を呑む。そこには煌びやかなドレスをまとったスカーレットの姿があった。薄紅色のドレスには銀糸や金糸で華やかな刺繍が施されていて、スカートや袖にはレースがふんだんに使われている。

「どうしたの？ 入っていいわよ」

しばらくその姿に見惚れて、言葉を失っていたガーネットがその言葉で我に返る。

「いえ……お師匠さまがあまりにも綺麗だったもので。あ、いつも綺麗ですが。今日は綺麗を通り越して神々しいくらいです！ 女神ですね、女神！ 今すぐに教会へ攫って結婚式を挙げてしまいたいそうになるほど美しいです！」

「そう、ありがとう。あなたも良く似合っているわよ、その制服」

ガーネットの暴走気味な褒め言葉を適当に流してから、息子に等しい弟子の晴れ姿を見て、スカーレットは満足そうに微笑む。ガーネットは師匠の微笑みの意味を瞬時に理解し、子供扱いされたことの不満を心の奥で感じた。

いつまで経っても、スカーレットにとって自分は小さな子供同然。それを覆すには自立するしかないのだが、その為にはスカーレット

の傍を離れなくてはいけない。それなら子供扱いでも仕方ないか、という考えにいつも収まってしまうのだ。

弟子のそんな葛藤など少しも知らないスカーレットはゆっくり椅子から腰を上げる。ガーネットが慌てて差し伸べた手を一瞥だけして、軽やかにドレスの裾を広げ一人で歩きだした。

「お師匠さま、ドレス着慣れてるんですね」

「まあ、昔いやって程着せられたから、ね」

「昔ドレスを？ 国王陛下の教育係をやっていた時ですか？ それとも別の機会に？」

「ガー、教えたはずよ？ 『女性の過去は』」

「『詮索しない』ですよ。わかってますよ」

少し不満の残る笑みを浮かべながらも、ガーネットはスカーレットの言う事に逆らおうとは一切しなかった。これもスカーレットの英才教育の賜物である。

女性に優しく紳士的に育った彼は、スカーレットに関する除いては理想的に育ったと言えるだろう。そう、師匠に対する変態的な執着心を除いては。その執着心からか、詮索をしないではいけないのだ。

長く続く回廊を、しばらく無言のまま歩いていたスカーレットが急に後ろを振り返った。ガーネットも釣られて後ろに目をやったが、そこには今来た白い石の廊下が伸びているだけで、他には何も見あたらない。

スカーレットがあてがわれた王女用の部屋の近くには衛兵もメイドも配置されていないので、人気が無いのも当たり前である。なぜなら、雇われの姫であるスカーレットの身元がばれると面倒だと思つた国王が、「第二王女はまだ城に慣れていないのでそつとしておいてやりなさい」などという適当な理由をでっち上げたからだ。しかし、そのおかげで気を楽しませて過ごしているのは確かである。

「どうしたんですか？ 柱なんかを睨みつけて」

「何だか、ここに来てからやけに視線を感じるのよね」

「僕の熱い視線ですか？」

「そういうよこしまな感じとは違って、何かこう……」

「よこしまって何ですか！ 純粹で情熱的な視線と言って下さい」

ガーネットは拳を握りしめてそう熱弁したが、スカーレットの耳には全く届いていないようだった。

スカーレットが長い年月をかけて培ってきた直感をすり抜け、姿を隠すその身のこなし。そもそも、隠れるところなんて柱の陰しかなさそうだというのに、柱の陰にも誰もいない。だが、スカーレットは知っていた、この城には把握するのが困難な程の無数の隠し扉があるということ。

（つまり、城を良く知るものってこと？ 隠し扉を知っていて尚且つ熟知しているってことは、代々城に仕えてる人間なのかしら）

スカーレットは眉間に皺を寄せながら、顎に手を添え考えにふけた。その姿からは全く幼さというものが感じられない。スカーレットが幼いのは本当に姿だけで、仕草も言動も洗練された大人そのものののだ。

「まあ、変な輩がいたとしても、僕が四六時中お師匠さまに張り付いてますから安心してください」

「そっちの方が不安だわ」

「照れないで下さいよ。僕を護衛に指名してくれたくせに」

今日一番の満足そうな微笑みでもじもじするガーネットを見てスカーレットはため息をつく。勝手に照れているのはあなたでしょう

が。

「別に指名したわけじゃないわ。ただ……」

「ただ？」

「城の護衛にろくな思い出がないのよ」

スカーレットの露骨に嫌そうな顔を見たガーネットは目を丸くした。彼女がここまで嫌悪感を表に出すことが珍しいからである。

スカーレットは伊達に長生きしてるわけではなく、普段は自身の感情を極端に顔に出すことがない。特に相手に不快感を与えたりする、負の感情はわざとでない限り押し込めているのが普段の彼女なのだ。

一体、お師匠さまの護衛だった人物とはどんな人物だったのか。ガーネットは気になって仕方がないのか、すぐさま口を開いた。しかし、先ほどたしなめられたばかりだったので、渋々その口を閉じざるを得なかった。

スカーレットとガーネットの姿がその場から見えなくなった頃、一人の青年が柱の陰から姿を現した。どうやら柱の近くの壁が回転扉になっていたらしい。

柱に寄りかかった青年は目を瞑りながら、左頬にある古傷を指で軽くなぞる。物事を深く考えだすと出てしまう彼の癖であった。

考えがまとまったのか、彼は瞼をゆっくりと開け、頬にあった手を腕組みにまわす。そしてスカーレット達が去った方を険しい瞳で真っ直ぐに見据え、自身にしか聞こえないような小さな声で呟いた。

「彼女が、『生ける魔法史』スカーレット……」

低い声が、長い回廊に微かに響いたかと思った時には、既に彼の姿はそこにはなかった。

第10話

*

『魔法大国同士による魔法技術意見交換会』それが今回のお見合いの表向きの呼称であった。まず、意見交換の前にまあ食事会でもという流れになる。そして、せっかくエノワルドの王子がいらしているのだから、という事で開催国のスイートピア王女も列席することとなるのだ。わざわざらしいことこの上ない。

しかし、王子はというと、ここまできてもこれが見合いだという事に気が付いていなかった。抜けているというか、鈍いというか。

「それにしても、国王陛下にもう一人、ご息女がいたとは驚きです」

エノワルドの白髭を蓄えた魔法使いが笑顔でそう切り出した。笑顔だが、言い方はどこかわざとらしく、それが嫌味であることを物語っている。彼はエノワルドの王直属魔道師団の副団長で、今回の訪問の王子のお目付け役であった。

「ええ、私も最近知ったものでな。あなた以上に驚いたものだ」

さらりと嫌味を笑顔で返すあたりは、この国王もそれなりに切れる頭の持ち主なのかもしれない。

「……その、まだ城にも慣れないと思われる姫君を、第一王女であるトゥートリア様の代わりに列席させるとは、国王陛下も随分意地の悪いことをなさいますね」

「いやいや、第二王女は私の思う以上にしっかりしていてな。しかも魔法に興味があるから、進んでこの場に出たいと申し出てきた

のだよ。さすが私の血を受け継ぐだけはある」

うんうん、と満足そうに頷く国王を横目に、彼の脇に控えたルーファスは小さくため息をついた。そんな適当な設定を追加して、またスカーレット様に怒られるのでは。懲りないお人だ。

エノワルドの副団長は自分の嫌味が通じていないことを感じたのか、不満そうな顔を一瞬表にだした。しかし、国の代表として来ている身であることを自覚しているのだろう、すぐさま何も気にしない様な顔つきをして見せる。中々食えない人物だ。

「しかし、トウートリア様のお顔も是非拝見したかったものです。王女の美貌は我が国でもそれは有名ですから。ですよね、殿下」

話題を振られ、今までぼんやりとしていた王子はハツとして口を開いた。

「え？ ああ、そうだね」

「……殿下、聞いておられましたか？」

「え、あ……ごめん、聞いていなかったよ」

王子は困った様に微笑み、小さく息をついた。話を振って来た副団長の「しっかりして下さい」と言いたげな視線が痛く、思わず俯いてしまう。からっぽの白陶器の皿に情けない顔をした自分が映る。長く伸びるテーブルを挟んで向かい会う国の代表の魔法使い達。もちろん、上座にはスイートピア国王が、後は身分の高い順から国王に近い席についていた。

王子の目の前には銀の燭台が炎に照らされ光っているだけで、その先の席は未だ空席のままである。その席に座る予定なのは、今回のもう一人の主役であるスイートピア第二王女であった。そう、即席副業王女のスカーレットである。

「まあ良いではないか、第二王女は歳は十七で、殿下同じ歳だ。トウートリアよりもきつと気が合う。それに、あれもトウートリアと同じくらい見目麗しくてな、私に似て」

果たして国王に似ている美人とは、とそこにいる全員が息を呑んだ。国王は確かなかなかいい男と言えるが、彼を女性に脳内変換したらそれはとても微妙なものだからである。

国王と血なんかこれっぽちもつながっていないと知っている、ルーファスとアランだけが呆れたような顔をしていた。似てる訳ないというのに。

「それは……楽しみですね。ねえ、殿下」

「ああ、そうだね……」

彼の声の調子から興味が無いという事が明らかに伝わってきて、白髪の副団長はため息をついた。王子がこの調子ではこのお見合いはご破算である。このままではいけない。

そもそも、このお見合いを企画したのはエノワールド側であり、半ば無理やりに押し進めたと言っても過言でないのだ。ここで王子が王女に積極的にアプローチをしなければ、スイートピア側はこれ幸いとこの話をうやむやにしてしまう。

しかし、この王子ではやはり難しいかもしれない。

王子は眉目秀麗で物腰も柔らか、まるでおとぎ話の王子そのものである。そう、第一印象でいったら完璧な青年なのだ。だが彼は、「作られた王子」感満載で、押しが弱く、貪欲さや積極性に欠けている。

そんな王子に、その気のない王女を力ずくで娶らせるなど無理なこと。ましてや、誘惑するなどは夢のまた夢なのである。

副団長はそんな風に、王子の縁談に対する不甲斐なさを憂い

だれた。

そんな様子の副団長を見た国王は、首を傾げながら嫌味のない笑顔で彼に話しかけた。

「どうなされた副団長殿？ ああ、その真っ白な魔道師服が食事の最中に汚れないか心配しているのだな。なあに、心配なさるな、何か前にかけるものを用意させよう！」

「……いえ、結構です」

このお気楽国王に対して副団長は再びため息をついた。それと同時にルーファスまでもひっそりため息をついたのは言うまでもない。

その時、扉を叩く音が会場に響いた。国王は表情を明るくして、その音の方へ顔を向ける。すると客人達も一斉に、国王の視線の先を目で追った。

「おお、着いたようだな」

扉が衛兵によって重々しく開かれると、柔らかなドレスを纏った少女の姿が見えた。

激しく燃えるような赤の髪。いや、それよりもっとくすんだ様な、深みのあるまるで血のような赤。どこかで見た事のある色である。王子はそんな事を考えながら、他の人々と同じ様にその美しい髪に視線を釘付けにされた。

先程まで不満そうにしていたエノワルドの魔法使い達や、従者達から思わずため息と共に「可愛らしい」「お美しい」などと言葉が漏れる。その言葉を耳にして、王子はようやく王女の顔に視線を移す。

そして、言葉を失うと同時に頭が真っ白となった。

スカーレットは王子の視線に気が付くと、優雅な微笑みを浮かべ彼を見つめた。そして、どことなくわざとらしいよそ行きの話し方と声で自己紹介をする。

「初お目にかかります、殿下。スイートピア王国第二王女、スカーレットと申します」

王子は瞬きさえも忘れ、彼女の顔を食い入るように見つめた。ここで自身も名乗らないといけないというのに、それすらも上手く出来ないでいる。そんな王子の心ここにあらずの状態を察知して、副団長が慌ててそのフォローに回った。

「王女様、お目にかかれて光栄です。こちらにおわすお方は我が国第二王子であらせられます。名を……」

「存じていますわ」

呆然とする副団長を気にもせずに、スカーレットは悪戯っぽく笑い、言葉を続けた。

「エノワルド王国第二王子、ジゼーラル殿下。愛称はジゼルだったかしら？」

おかしくて堪らない、といった様子のスカーレット。状況が呑みこめないのか、完全に固まってしまって、思考回路も停止状態の王子。

そして、スカーレットの後ろには、王子以上に信じられないという顔をしたガーネットがいた。

なんと、モラトリウム青年ジゼルの正体は、今回の見合い相手である王子、ジゼーラル・エノワルドだったのだ。

第11話

*

お見合いの定番「後は若いお二人で」とのことで、スカーレットとジゼーラルは食事を終わると大広間を後にした。エノワルドの副団長は、言葉の通り二人で庭でも散策して欲しかったのだろうが、ガーネットがそんなおいしいイベントを許すはずがない。姫の安全だとか、姫は城内に慣れていないから案内役が必要などと難癖をつけて、彼女らに無理やり同行することを了承させた。

恐るべし、粘着気質男である。

この三人だけでは不安だと感じたルーファスが、アランも供に付けさせた為、結局計四人の食後の散歩となった。

庭に面した廊下を歩きながら、四人はしばらく一言も発しないままであった。外は日差しが強く、庭の葉の緑を美しく煌めかせてる廊下には屋根がある為、彼らのもとへ直接光は差し込んでこなかったが、作られた小さな池に反射して眩しく感じる瞬間があった。

飛び込んできた水面の光に目を細めながら、食事会の最中もずっと黙り込んでいたジゼーラルがようやく口を開けた。

「知っていたんですね、私がエノワルドの王子だったことを」

「ええ、まあね」

「どうして……」

「それよ、それ」

スカーレットはおかしそうな顔をして、ジゼーラルの耳に付けられた飾りを指差す。ジゼルは一瞬キョトンとして耳飾りに触れると、何かに気付いた顔をして目を見開いた。

「そうか、これはエノワルドの王位継承権を持つものの証だから……」

「そう、そういうこと」

「しかし、その事を知っているのはエノワルドでもごく一部の人間だけだと思うのですが。ましてや、あなたはスイートピアの方で、最近王女だと判明したとお聞きしましたが」

「今回の食事会のお話を聞いた際に、国王……お……オトウサマに教えてもらったのよ」

余程、あの国王のことを「お父様」と呼びたくなかったらしい。完全に棒読みだ。

「そうでしたか。それにしても、あなたが王女だったとは本当に驚きました」

「こんなお転婆が、って？」

そう言い、いたずらっぽく微笑むスカーレットを見て、ジゼルは慌てて首を振った。

「いえ、そうではなく。まさかあの時励まして頂いたあなたにこんな所で再会出来るなんてと」

ぎこちない笑顔でそう訂正しつつ、ジゼーラルは外に目をやった。そして、空に浮かぶ雲を目で追いながら、ふと独り言のように言葉をもらす。

「これも、運命というものなのでしょうか」

無自覚の上の言葉なのだろうが、スカーレットは思わず頬を染める。

ああ、だからその顔でそんなことを言われると弱いんだってば。

これにムツとしたのはガーネットである。物憂げに遠くを見つめる王子と、頬を染めながら彼を見つめる王女。何だ、このフラグが立ったような良い雰囲気は。

王子に呪いでもかけかねん、ガーネットの黒く渦巻くオーラを感じとったアランはわざとらしく咳払いをしてこの場の空気を変えようとした。その咳で我に返ったスカーレットは、何か思いついたように手を叩く。

「そうだわ。仮にも魔法技術交換会なのだから、城にある魔道師団の研究室でも見せてもらいましょうよ。いいでしょう？ アラン」

「それは良い考えですね。殿下は魔法の心得はおありで？」

「ええ、エノワルドの王族はそのほとんどが大なり小なり魔力を持つて生まれてきますから。それなりの教育は受けています」

ジゼーラルのその言葉は実際はかなり謙遜したものである。エノワルドの王族は皆、強力な魔力を持つて生まれ、高度な指導を受けて育つ。スイートピアの王族も強い魔力を持ち生まれる者は多いが、ばらつきがあるのが事実である。

「じゃあ早く行きましょう。私もまだじつくりは見ていないのよ」

ふわりとドレスの裾を持ち上げ、スカーレットは歩みを速める。

アランは身丈に合っていない魔道師団服を引きずりながら、急いで彼女の後に続いた。

この流れに乗り遅れたジゼルは彼女達に遅れてようやく前へと足を進める。そして、そんな彼の隣にはいつのまにかガーネットが並び立っていた。

「あなたも魔道師団の方なんですよね？」

自分よりも目下の人間にも丁寧な口調を崩さないジゼーラル。招待してくれた国側の人間であるから、と言う事もあるのだろう。

「ええ、僕は姫さまたっての希望で護衛にあたらせてもらっているんです。ここだけの話、僕と姫さまはともじやないけど人には言えない関係でして」

「は、はあ……」

「姫さまは僕から片時も離れたくない一心で、護衛に指名されたんです。健気ですよ、どんな時も僕の笑顔と共にありたいなんて」

「はあ……それは、なんというか」

眩しい笑顔で、滑らかにそう言い切るガーネット。確かに人には言えない関係と言えば関係だが、如何せんニュアンスが怪しすぎる。ジゼーラルは、どう対応していいか困った顔をしていたが、そんなタイミング良くスカーレットの声がした。

「ガー、あんまりいい加減な事言っと城から追い出すわよ」

弟子の変態発言には地獄耳な師匠である。

スカーレットの言葉が本気だと分かったからか、ガーネットは調子のいい口を片手で塞いだ。追い出されては堪らない。

ジゼーラルは結局、ガーネットの言葉の意味を呑みこみ切れなかったようで、困り顔でガーネットとスカーレットを交互に見つめ続けた。

第12話

*

「ここが研究室ですか」

ジゼーラルは感心しながら、興味津々な瞳で部屋中を見渡した。高くにある天窓から差し込む光が、円状になった広い部屋全てを隈なく照らす。部屋には様々な書物や、使い方が不明な珍しい魔法道具などが溢れかえっていた。部屋にある細かい彫刻の家具や、上質な糸で作られた織物は異国の香り漂う品々である。しかし、何というか。

「汚いわね。独身男性の部屋みたいだわ」

「えー？ おししょ……姫さま、独身の男の部屋に入ったことあるんですか！？」

「……たまにはまともな質問をしなさい」

スカーレットとガーネットがショートコントをしている間、アランはさりげなく書類の山を部屋の端へと寄せる。それは果たして片づけたと言えるのだろうか。

「いえね、物がどうにもこうにも多すぎて整理が間に合わないのですよ。膨大な資料に対して人手が少ないので」

「どうしてですか？ 宮廷魔道師志望の魔法使いは多いでしょうに」

宮廷魔道師は魔法界の花形職種である、人気が無い筈はない。ガーネットは首を傾げてアランに尋ねた。

「志望する人間が多くても、ある程度の基準を満たしていない限り採用する訳にはいきませんからね。城の内部に引き入れるのですから、それなりの人物でなければ」

「つまりは身元が保証された人物ということですか？」

「そうよ、だから宮廷魔道師は基本縁故主義なのよ。古い体制よね」
「ですが、最近では外からも積極的に人材を取り入れているんですよ。それに今、王立魔法学院の生徒を卒業前に研修生として迎えるんですよ」

「あら、卒業前から招き入れるなんて、よほど優秀な人材なのね」
「ええ、それはもう。学院では私の師匠以来の才女だと言われてますね」

スカーレットはアランの師匠を良く知っていたので、その彼女以来の天才だと聞いて感心したように息をもらした。

「ところで、ここはどのような研究をされてる部屋なのですか？」

スカーレット達の話を、時々頷きながら黙って聞いていたジゼルが、ここにきてようやく口を開いた。

アランはすっかり説明を忘れていた事に気が付き、ジゼーラルの方へ体を向きなおした。

「ここはですね……古代魔法を……」

アランが説明を始めようとしたまさにその時、研究室の入り口から何かが転がりこんできた。そして、そのまま派手な音を立てながら無造作に置かれた資料の山へと突っ込んでいった。

その謎の侵入者らしきものに驚き、ガーネットやジゼーラルはスカーレットの前に出て思わず身構える。

しかし、臨戦態勢な彼らとは逆に、アランは心配そうな顔をしな

がら音のした方へと駆け寄っていった。

「大丈夫ですか、エステル室長殿」

そう言いながらアランが書物や魔法道具などを掻きわけたその下から、アランと同じインヴァネスコート型の魔道師服を着た女性が姿を見せた。女性は深い紫色の短い髪を丁寧に撫でつけながら、ゆっくりと身を起こす。

「ええ、大丈夫ですわ。どうしてもここでつまずいてしまうのでしょうか？」

「それはこちらの台詞ですよ。毎回これでは私の寿命は縮まりすぎて尽きてしまいます」

「あらまあ、それは困りましたねえ」

「他人事のように言わないで、もう少し気をつけて下さい」

「気をつけているんですけどね。どうしてもかしら？」

女性はほんわかと微笑みながら、首を傾げる。見た目はしっかりとした出来る女性のようなが、中身はとんだドジっ子らしい。アランはこの光景に慣れているのか、やれやれと首を振り、呆然としているガーネットやジゼーラルの方へ戻った。

「紹介します。こちらがこの部屋、古代魔法研究室の室長殿です」

「エステルと申します。ようこそ古代魔術研究室へ。そちらは新団員のガーネットさんですね？　と言う事はそちらはスカーレット王女でいらっしゃいますか？」

「そうですよ。そして、その隣にいらっしゃるのがエノワールド第二王子、ジゼーラル殿下です」

「エノワールド……。ああ、今日は技術交換会でしたわね。それはそれは、ようこそおいで下さいました」

エステルはポンと手を叩いてから、深くお辞儀をした。それにつられて、ジゼーラルも頭を少し傾ける。一体どれだけ腰の低い王子なのだろう、とスカーレットは少し呆れてしまった。威厳も何もあつたものじゃない。

「エステル室長殿の専門はスイートピアの魔法史なのですよ。この国特有の魔法に関して研究しているんですよ」

「ええ、スイートピアの魔法の成り立ちはそれは素晴らしいものなのですよ。試行錯誤を繰り返し発達した魔法は、この国の魔法使い達がどれだけ優秀であつたかを物語っています。だから調べれば調べるほど、この国の魔法使いであることに誇りを感じるのです」

胸の前で手を組んで、うつとりと語るエステル。自分の専門分野の話となると急に饒舌になるタイプらしい。

「エノワルドの魔法技術も伝統を感じる素晴らしいものですよね」

部下が自分の国も話ばかりで盛り上がってしまったので、アランは気を利かせてそう切り出した。他国の王子が技術交換会で来ているというのに、自国の自慢ばかりをしているわけにはいけない。

「我が国の技術進歩の最盛期は戦乱の時代でしたので、素晴らしいと言いつつと自信がありませんが……。ああ、でも昨今では自然と共生する為の精霊魔法などの伝統的魔法回帰なども行われていて……」

「ふうん、様々な視点からの魔法史を読んでいるのね。勉強熱心なのは感心だけど……。自分の意見がまとまってないんじゃない？」

「批判も肯定も、全ての意見を知っていないとするべきではないと思つたのですが……。その前に答えを見失ってしまったのは確かに

事実です」

「ま、まあまあ、そう落ち込まないで。知識はいくらあっても決して無駄にはならないわ」

落ち込んで俯いてしまったジゼーラルの肩を、スカーレットは慰めるように軽く叩く。何だか毎回このやり取りをしているような気がするのだが。

そんな情けないジゼーラルの姿を見てガーネットは、

（案外ちよろそうだな）

などと酷い事を、余裕の笑みを噛み殺しながら考えていた。彼の本当に酷い所は、いざとなったら本気でジゼルを潰そうと思っている所である。どこまでも陰湿な弟子だ。

彼らの話を、相変わらずにこにことしたまま聞いていたエステルが、ここに来て再び意見を述べる。

「確かにエノワルドの魔法はそれはそれで素晴らしいとは思いますが、私は自国の魔法に誇りを感じているのです^{わたくし}」

「そうね、自国に誇りを持つのは大切よ。でも、良いものは何でも吸収していかないと、文化もそして魔法もね」

これはスカーレットの長年の経験から導き出した一つの結論の様なものである。彼女は時代が移り変わるたびに、多くのものが進化していく過程をその目で見てきた。そして、その進化に関わる大勢の多種多様な人間達も。

「そうしてまた新しい可能性が生まれるのですね」

ジゼーラルはスカーレットの意見に賛同し、柔らかに微笑んだ。

ようやく顔に明るさを取り戻した彼を見て、スカーレットは安心して様に息をつく。

「レティ殿は歳のわりに考えが柔軟ですからね」

「え？ 歳のわりに？」

「ええ、幼そうに見えて中々明朗快活だと良く言われるわっ」

アランがすっかり年齢の話題を出した為、すかさずフォローを入れるスカーレット。彼女に一瞬だがすざましい視線を送られたアランは、髭を撫でる振りをして下を向いた。

スカーレットは話題を逸らす為に、エステルに全く違う質問を投げかけることにした。

「そう言えば、人が全く見当たらないけれど。他の研究員はどうしたのかしら？」

「彼女達は今昼食中ですの。私はいつもここで留守番を兼ねてお昼をとるので、一斉に行かせているんです」

「彼女……達？」

「はい、御察しの通りですわ。この研究室は女性のみで構成されているんです」

「それは……女性限定ということ？」

「いえいえ、ここ数年、この研究室の志望者が女性ばかりでしたので、いつのまにかこうなっていたのです。男の方ももちろん大歓迎ですよ」

その言葉を聞き、スカーレットの口元に不敵な笑みが浮かぶ。その笑みの意味することを、瞬時に感じ取ったガーネットの背筋に寒気が走る。

まさか。

それは、スカーレットの心の中で、護衛期間を終えた後のガーネ

ットに所属させる宮廷魔道師団の部署が決まった瞬間であった。

第13話

*

他の研究室や宮廷図書館を見て回った後は、エノワルドの来賓を招いた賑やかな晩餐会がとり行われた。昼食会といい、意見交換会や見合いではなく本当は食事をしに來ただけなのではとスカーレットは苦笑いをした。

ようやく緊張が解けてきたジゼーラルも淡々と面白いのか面白くないのか良く分からない話をし続ける。スカーレットはその話を半分流しながらも、しっかり聞いているかのように相槌を打って対応した。ついでに、ちょいちょい横やりを入れてくるガーネットの腹に何度か肘や拳をお見舞いする。

言葉を教えなければ良かったかしら、とスカーレットは本気で考えてしまった。

無駄に長く退屈な食事が済み、スカーレットはガーネットを連れて大広間から退室をした。これ以上いるとボロが出るとの判断である。

「お師匠さま」

スカーレットの後を歩くガーネットが彼女に声を掛ける。

「おししょうさまー」

しかし、やはり返事が無い。

「おししょうさまあー!」

「聞こえてるわよ……」

「『呼ばれたら返事をするのが紳士淑女というものだ』って、お師匠さま言ってたじゃないですか」

「いつの話よ……。でもだったら、『人が話している時は割り込まない』ももう一回復唱しなさい」

「でもあれは……」

「言い訳しないの。ガーネット、あなた一体いくつになったのよ」

「花の盛りの十九歳です！」

「堂々と宣言しなくていいから。その歳にもなって親に注意させないでちょうだい」

「……お師匠さまは僕の親ではありませんよ」

珍しく不機嫌な顔になったガーネットは緑色の瞳でスカーレットを黙って見つめる。窓の外では欠けた月がぼんやりと輝いて、闇夜を少し穏やかにしていた。

スカーレットはため息をついてから腕を組み、弟子の次の言葉を待つ。子育ては根気強さが必要だと言うが、今がまさにそんな感じである。

ガーネットは少し俯いてから、再びスカーレットの青い目を捕らえる。そして呟くようにようやく言葉を発した。

「お師匠さまの初恋って、エノワルドの王子なんですか？」

「なあに？ その質問にまた戻るの？」

スカーレットはガーネットのしつこさに呆れながらも、少し考えてからその問いに答えた。

「そうよ、エノワルドの王子。でもかなり昔の話よ」

「その人とはどうなったんですか……？」

「どうにも。というかどうにかなる訳もなかったのだけど」

「どうしてですか？」

「理由は簡単よ、『初恋は叶わない』ってジंकス知らないの？」

スカーレットはジंकスの部分だけ声を強調して、勝ち誇ったような笑みを浮かべる。明らかにガーネットへの牽制である。

恋が叶わなかった理由には、実際はもう一つ重要な事柄があったのだが、そちらはあえて伏せることにしたらしい。

ガーネットは師匠の堂々たる宣言に一瞬怯んだ顔をしたが、ここで負けてたまるかとばかりに強めの声で応戦した。

「僕の初恋がお師匠さまだと思ったたら大間違いですよ！ うぬぼれもいいところです」

「あらそう」

「いや、まあ、お師匠さまが初恋ですけど！」

「はいはい」

「というか今でも大好きですけど！」

「……あのね、ガー」

スカーレットは額に手を当てながら、大きく息を吐く。

「今までは町とかにもたまにしか行かなかったから、同じ年頃の女の子と触れ合う機会が少なかったでしょう。私もこのことについては反省してる。せめて学校は町まで行かせるべきだったわ」

「僕は四六時中お師匠さまと居られて幸せでしたが」

ガーネットはさも当然のように凜々しい顔で大真面目にそう答える。その考えが問題なのだと、スカーレットはますます頭を痛くした。

「でもね、この城にはあなたと同じ年頃の可愛い女の子が大勢いるのよ？ 町に自由に出て出会いを探してもいいわ。私が姫代理

をやめた後もずっと残っていたっていいのよ」

「どうしてお師匠さまはそこまで僕を追い出したがるんですか？
掃除洗濯炊事に買出しや畑仕事、何だってこなしてるじゃないですか」

確かにガーネットの働きぶりは一家に一人欲しいほど有能である。
スカーレットの徹底した教育により、いつ婿に出しても恥ずかしくない青年に仕上がったといえるだろう。

しかし、本人がこれでは婿に出しようがない。

「あのね、私が言いたいのは、視野を狭くしないでってことなの」
「じゃあ……お師匠さまは僕に、ここでしばらく暮らして、いろんな人と触れ合って欲しいと？」

「そう！　そう言う事なの」

スカーレットはようやく話が通じたことにホッとして笑顔で手を叩く。

「そして、それでもやっぱりお師匠さまのことが好きなままだった
ら、この気持ちを受け入れてくれると！？」

「……そんなことは一言も言っていないわ」

話を通じたと思ったのはうたかたの幻だったのだろうか。スカー
レットはがっくりと肩を落とし頭を押さえた。前向きすぎるのも考
えものである。

「ああ、もう、頭が痛いわ。私は部屋に戻るから」

「え、じゃあ僕も一緒に……」

「一人で戻るわ。あなたは折角だから研究室にでも顔出してきな
さい」

「でも、心配ですし。具合が悪いのでしょうか」

「……あなたが傍にいと悪化しそうなのよ」

「ひどいですよ！　僕を病原菌みたいに！　僕はどちらかと言うとお師匠さまの抗体だと思うのですが」

本気でそう思っているところがガーネットの面倒なところである。スカーレットは怒鳴る気力も失せ、大きく長いため息をこぼした。

第14話

*

「ひどいんですよ、お師匠さま。ポツと出のあの優柔不断王子のどこがいいと言うんですか！」

「それは、顔ではないでしょうか」

もつともなことをざっくりと言うアランをガーネットは恨みがましそうな目で見つめる。何も、止めを刺すこと無いではないか。

ガーネットは何か悪いものを出すかのように息を吐き出しながら、机に顎を乗せた。すっかりふて腐れた目をした彼の目の前に、アランは湯気が立ち昇るカップをそっと置く。そのカップから漂う甘い香りに釣られて、ガーネットは小さく鼻をひくひくとさせた。

「ホットチョコレートですか？」

「ええ、これは私の好物です。昔は甘いものは苦手だったのですが、亡くなった妻がこれが本当に好きで。私もいつの間にか好きになっていたんですよ」

もこもこした髭の間から器用にホットチョコレートをすすりながら、アランは嬉しそうな声でそう話す。苦手なものが好きになるくらい、彼女を愛していたのだろう。

そんなアランを見て、ガーネットもそろっとカップに手を伸ばした。甘くてとろける感触が、口の中に広がりながら心を解きほぐしていく。

「お師匠さまも、良くホットチョコレート作ってくれました。白くて柔らかなマシュマロをいつも一つ入れてくれるんですが、僕が落

ち込んでる時だけ二つにしてくれたんです」

「おや、優しいですね」

「そうなんです。優しいんです！」

実際は厳しいことの方が多かったのだが、ガーネットにはそれすらも彼女の優しさに思えていたらしい。

「優しい……。まあ、優しいとは思いますが。レティ殿は基本的には意地悪だったような……」

「意地悪？ お師匠さまが？」

「はあ、私はよくいじり倒されたものです」

遠く昔に置いてきた、忘れ物を思い出したかのような顔つきで、アランは窓の外を眺める。今も昔も、人の姿形がすっかり変わってしまったっても星々の輝きはそのままだ。いや、スカーレットの姿もあの頃と少しも変わってはいないのだが。

「魔道師団長さんは……」

「アランで構いませんよ」

「アランさんは、お師匠さまとどういった知り合いなんですか？」

「レティ殿は、私の師匠の友人でして、それで私も関わる機会が自然と多くなっただけですよ」

「へえ……。アランさんのお師匠さまってどんな方だったんですか？」

過去形なのは、高齢のアランの師匠にあたるような人物が今も健在だとは思えなかったからだ。

アランは彼の質問に、少し思案を巡らせてから夢見心地のような微笑みを見せた。

「そうですね……。一言で言うとガラス玉ですかね。一見、小さて壊れやすく儚いものですが、光を受けて輝くとそれは綺麗で、また色々な表情を見せてくれる。そう、実際はどんな宝石よりも強く美しい」

それは師匠と言うより、好きな人を褒める言葉ではないだろうか。ガーネットはアランの師匠に対する形容の仕方にいささか疑問を感じたが、他人の師匠に関してそこまで興味もなかったので追及はしないことにした。

「よく師匠と私と、レティ殿とエルゼ殿とでお茶をしたものです。あ、エルゼ殿はレティ殿の当時のお弟子さんでして。まあ、私が結婚して王立魔法学院の分校に移った後は交流も途絶えてしまいました。なんでもあの方は頻繁に住まいを変えるらしく、すぐに音信不通になってしまいました」

「そういえば、気が向いたら即引っ越しをする、とか言っていましたね。僕も幼い頃に一度引っ越しを経験しましたよ。ある日突然、引っ越すから必要最低限の荷物をまとめろって。あれには驚きましたね」

「ガーネットさんは……。その、レティ殿と……」

「僕とお師匠さまの関係は見ての通り魔法の師弟ですよ。残念ながらそれ以上ではないんです、今は」

ガーネットは飲み干して空になったカップの底を見つめながら大きなため息を落とす。アランは髭についたいい香りのする茶色を、栗色の猫が刺繍されたハンカチで拭うともう一度質問をし直した。

「いえ、あなたの話を聞いていると、随分前からレティ殿に師事しているようなので」

「師事、というか。僕を育てたのはお師匠さまなんです。僕、捨て

子なんですよ」

今日のおやつは何かと答える時くらい、さらりとそう告げる。それは、その事実を彼が全く気にしていないことを表していた。しかしアランにとってはどうでもいい話ではない。

「それは……すみません、込み入った事を聞いてしまい」

「ああ、気にしないで下さい。捨てられたのは赤ん坊の頃ですから、ほとんど記憶にありませんし。だから、物ごころついた時から僕の唯一はお師匠さまだったんです」

ある意味、それは恋よりも激しく深い感情なのかもしれない。

ガーネットは幸福そうに目を細め、今までの日々をぼつりぼつりと頭の中で再生する。幸せな時間の中でも更に幸せな時を、砂の中から砂金を見つけ出すかのようにそつとすくい出す。

しかし、アランにはガーネットがスカーレットに恋をしていると言うよりも依存してしまっているだけのようになか思えなかった。しかし、結局のところ、彼の心は彼にしか分からない。

（依存も恋の一部だと言ってしまうえばそれまでですからね）

アランはこの問題は当人達に任せることにして、ハンカチを胸元へと押し込んでしまひ込む。

「これで少し謎が解けましたよ。レティ殿は普通は男の内弟子はとらないと聞いてましたから」

「そうなんですか？」

「ええ、昔エルゼ殿がそう言っていました。何故かは知りませんが三十年前……あ、今だと丁度百年前ですかね、そのくらいから内弟子は女性のみだと。外弟子もほとんど女性だったらしいですよ」

「へえ……どうしてでしょうか」

「どうしてでしょうねえ」

すっかり和んできて、だらだらと他愛もない事を話し続けていた二人ののんびりモードを遮ったのは、昼間と同じような大きな衝突音であった。

第14話（後書き）

若かりし頃のアランの恋物語「君の鼓動に魔法をかけて」もよろし
かつたらご覧ください（*^ - ^*）↓[http://ncode.
syosetu.com/n2182q/](http://ncode.syosetu.com/n2182q/)

第15話

二人はその音の正体が何か、薄々感づきながらそろっとその「事故現場」に視線をやる。彼らの予想通り、そこには書類や資料道具の下敷きになったエステル室長の姿があった。

エステルは情けない微笑みを浮かべながら、自身の頭を軽く小突く。夜空と同じ色のケープには白い埃が、空に浮かぶ星のように手を広げその存在を誇示していた。それは満天の星空とは異なり、美しいとはとてもじゃないが言えない姿だったので、彼女は出来る限りその埃を叩き払おうと奮闘する。

「あらあら？ 何だか楽しそうな会話をしていたようですね」

まるで、先ほど転んで転がって、資料の山に激突したことなど微塵も感じさせない笑顔と声で、エステルは二人に話しかけた。案外、只者じゃないのかもしれない。

「ええ、少し僕の恋愛相談を」

「あれは恋愛相談だったんですか……」

「あら、ふふ、私も混ざりたかったですわ」

歳のわりに幼い笑みを見せ、エステルは彼らの近くの席に腰を下ろした。

「こんな時間まで研究ですか？ 本当にあなたは熱心な人ですね」

「そんな、アラン団長には及びませんわ」

口元に手をあて、エステルは柔らかく微笑む。

こんなにおっとりしているのに一研究室の室長とは本当に意外性

抜群だな、とガーネットは彼女をじつと凝視する。

しかし、その後の三人の白熱した魔法に関する議論によって、彼女が室長であることに対する疑問など木端微塵に吹き飛んでしまった。それほど、彼女の論述は熱く、尚且つ正確なものだったのである。

「スイートピアの魔法史は僕も一通り学んだつもりでしたが、ここまで詳しくはありませんよ」

「好きこそものの上手なれ、ですわ。私はこの国の伝統的な魔術体系をもっと世の中に広めていきたいんです。トワール・ノディエが残した、この国の最高の遺産を。トワール・ノディエは我が国の誇りですわ。あのお方が今のこの国、いえ、この世界の魔術の基礎を作ったと言っても過言ではありませんもの」

そう語るエステル瞳には子供のような無邪気な光が輝いていた。トワール・ノディエに心酔する魔法使いはこの国では珍しくない。それほどにこの魔法使いの伝説は強烈な印象を人々に与えたのだらう。

しかし、この魔法使いについては謎が多く、魔術の体系の基礎を作ったというのも後の研究者の見解であり、真実かは定かでないのだ。

これほど神秘的で尚且つ胡散臭い魔法使いも他にはいないのだが、その事について言及するものは誰一人としていない。

「そういえば、姫様のお名前って、あの『生ける魔法史』と同じなんですわ。もしかして、彼のお方がご由来で？ そうだとしたら素晴らしい御母上様ですわね」

「ああ、そうですね……。僕は良く知らないのですが、そうかもしれませんね」

スカーレットがその「生ける魔法史」と同一人物だと知っている
ガーネットとアランは作り笑いを浮かべながら顔を見合わせ適当に
頷く。大魔法使いスカーレットにあやかりたいと考え、彼女と同じ
名前を子供に付ける親はこの国では少なくないので、この名前は珍
しいものではないのだ。

「と、もうこんな時間ですか。僕はこれで失礼します、とても勉強
になりました」

「私も久々に楽しみましたわ。また討論会、しましょうね」

「では、私もそろそろ休むとします。歳をとると体力が落ちてしま
って」

ふわあ、と可愛らしい欠伸を一つして、アランは席を立った。ガ
ーネットもそれと同時に立ちあがると、彼の先を行き扉を開ける。

アランを扉から先に通し、ガーネットはまだ研究室に残る様子の
エステルに頭を下げてから自分も退室をした。にこにことした笑顔
で手を振る彼女の姿を見ながら、扉をそっと閉じる。

「『トワール・ノディエが我が国の誇り』……か」

閉じた扉を見つめ、ガーネットは自身に何か確認するかのように
そう呟いた。まるで、二つの深い緑色が、何もかもを見透かすか
のように。

ガーネットが真剣な顔つきをしたのはその一瞬で、すぐに顔を崩
しいつもの穏やかな表情に戻す。彼の本当の顔がどちらかなんてこ
とは、彼やその師匠であるガーネットくらいにしか分からないこと
である。

（部屋に戻る前にお師匠さまの様子でも見に行こうかなあ。もう寝
ているか。……いや、それはそれでおいしいかも）

先程あれほど怒られたというのに全く懲りていないらしく、ガーネットは幸せそうな笑みを零した。考えていることは低俗なことだと言っのに、彼の傍を歩いていたメイド達はその笑顔を見て愛らしい声をもらす。顔が良ければ変態でも関係ないのだろうか。

彼を見ながら数人で何やら楽しげに話している少女達をガーネットはちらりと一瞥する。何を話しているのか良く聞こえないが、どうやら自分のことを話しているらしい事だけは分かった。

だが、ガーネットは彼女達にさほど関心がないのか、何を言われているかも気にならないらしい。一般的に見て、彼女達はとても可愛らしい容姿をしていたし、さらにガーネットと同年代でもある。そんな少女達が自分の噂をしていたら年頃の男だったら少しは心が浮き立つものだというのに、彼にはそういった様子が全くない。

どこまでも一途、というか一方向しか見えていない奴である。

興味が無いといっても、話しの種にされてはその場に少し居辛かったのか、ガーネットは小さくため息をつく。

そして、歩みを速めさつたとその場を去ろうとしたその時だった。まるで心臓を鋭利な刃物で射抜かれたような視線をその身に感じたのだ。

思わず身構え後ろを振り返ると、そこには今度は柱ではなく一人の青年が立っていた。歳は自分よりいくつか上だろうか。左頬に古い傷跡が一本通っている。

こいつがお師匠さまを尾けていた例の輩だろうか。

ガーネットは相手を警戒し、いつでも魔法を使えるように唇を軽く舐めてから息を吸う。細身のガーネットとは違い立派な体躯、腰に帯びた剣、相手はどう見ても武闘派である。接近戦に持ち込まれたら彼には少々分が悪い。

だが、ここは城内で、しかも今は他の人の視線がある。仕掛けてくる可能性は低い。青年は、未だに楽しそうにおしゃべりを続けているメイド達を横目で見た後、ガーネットへと視線を移す。そして、

茶色の短い髪をわずかに揺らしながら、静かな足取りで彼の脇を通り過ぎた。

ガーネットは青年が自分の横を通る際の風を肌に感じながら、その間微動だにしなかった。しかし、青年が通り過ぎていった後、何かに驚いたように目を見開いて勢い良く後ろを振り返る。しかし、既にそこに青年の姿はなかった。

残ったのは、ガーネットの耳に木霊する低い声だけ。

「気をつける」

そう、確かに青年はガーネットに警告の言葉を囁いていたのである。

ガーネットはその言葉に言い表せない不安を感じ、急いでスカレットのいる部屋へと駆けていった。息を整えながら心を落ち着かせ、扉を軽くノックする。しかし、返事が返って来ない。いても経ってもいられなくなった彼は了承を得ないまま扉を勢いよく開ける。

「お師匠さま、失礼します！」

無駄に広い部屋の中を見渡しながら、ガーネットは必死な顔で師匠の姿を捜す。だが、そこにあるのは彼女がいた痕跡である積み上げられた本だけであった。

「一体どこへ……」

その時、何かが弾けるような爆発音がガーネットの耳に微かに届いた。上の方から聞こえてきたその音に応えるかのように、ガーネットの心臓ははち切れそうなほどに鳴り響いた。

第16話

*

ガーネットがアランとホットチョコレートを飲みながら談笑している時、スカーレットは私服に着替え、自室で本を読みふけていた。窓際にある、麻で編んだ籠のような大きめのゆったりとした椅子に両足を抱えながら座り、本を凝視する。

彼女が読んでいたのは、前に城に來た際にはなかった、宮廷図書室の魔法研究書や指南書であった。最近の魔法界の流れを知っておく必要もあり、スカーレットは度々家の近くの図書館や本屋でも書物を仕入れていたが、やはり数も質も段違いである。

「ふうん、あの子こんなに立派な文を書けるようになったのね。誤字脱字が数段減ったわ」

スカーレットは自身の過去の弟子の本を読んでいるらしく、感心しながらページをめくる。これでは勉強しているというより、添削をしているようだ。

「ええっと、次はこの魔法歴史書を……。ん？ 著者、エステル・メイシー……ってエステル室長のことかしら？ へえ、あの子メイシー家の人間なのね。それはあの若さで室長というのも頷けるわ」

メイシー家は代々優秀な魔法使いを輩出してきた、スイートピアにおける魔法使いの名門なのだ。裕福だが爵位は高くなく、富や名誉よりも誇りを何より大事にする一族である。

「メイシーの人間って皆表情が固いのが多かったけど、あの子は柔

らかい感じよね。ホント、時代は移り変わるものだわ」

三十を過ぎた女性に対して「あの子」は無いのでは、といった感じもするが彼女にとってはその位の歳はまだまだひよっ子なのだろう。

「でも、彼はまるで記憶の中から飛び出して来たようだったわ」

スカーレットは本をそつと撫でながら、懐かしそうに目を細める。記憶の奥底に眠っていた、優しい笑顔、揺れる黒髪、深く響く声。ジゼルはその全てを、彼女の心から呼び覚ましたのだ。

『僕の可愛い、小さな妖精さん』

スカーレットの目の前に、一瞬、花びらが舞い踊る庭園が浮かんだ。懐かしくて、憎らしくて、でもどんなに時が経とうと忘れることなんて出来ない。いつだって心の大切な位置を占めている彼女の故郷。

（まあ、性格は全く違ふのよね。ジゼルにはあんな歯の浮く様な台詞言えないだろうし）

そう思い苦笑いをしながらも、スカーレットは何だか楽しい気分だった。本を置いて椅子から下りると、彼女は近くにあったストールを掴んだ。柔らかな真つ白のストールを肩にかけながら、テラスへの扉を両手で開ける。途端、冷たい風が吹きこんできて、スカーレットは思わず身震いした。夜はまださすがに冷える。

外の景色に広がるおぼろげな光達。この国の灯りは魔法道具を使うことが多かったが、それは富裕層や公共の施設などの話であり、魔法の使えない一般市民はランプやろうそくの光に頼り切っている

のが現状であつた。だから、王都以外の田舎では家の窓からみれる灯りは星の光よりも頼りない輝きなのだ。

「こういつた景色を見ると、王都に来たつて実感が湧いてくるわね」

スカーレットは手すりに寄りかかり、体を反らせて空を見上げる。すると、真上の方から眩しい光を感じたので体を少し起こす。どうやらその光は上の階にある部屋からもれているらしい。

スカーレットのいる部屋の近くは人気が少ない為、ほぼ灯りの無い状態だったのだが、その部屋だけは灯りが煌々と輝いていた。

（上の階つて確か賓客室よね。ということはあの部屋にいるのは…
…）

何かおもしろいことを思いついたのか、スカーレットはにんまりとした笑いを浮かべバルコニーから部屋へと戻った。

*

「はい、どうぞ」

扉を叩く小さな音に、書机に向かって書きものをしていたジゼーラルは不思議そうな顔で振り返る。こんな遅くに誰だろうか。

彼の許可を受け、遠慮がちに扉が開かれる。扉の隙間から赤い髪がひょこりと覗く、続いて青い瞳がこちらを窺う。これに驚いたのはジゼルである。

「レティ！？」

あまりに慌てて立ち上がった為、椅子が大きな音を立てて床に転

がる。ジゼーラルは戸惑った顔で、倒れた椅子を元に戻しながらも視線はスカーレットから外さなかった。

「ごめんなさい。驚かしてしまったかしら？」

「いえ、すみません。まさかあなただと思わなかったもので」

部屋へ入って来たスカーレットの周りを、ジゼーラルは何かを捜すように見渡す。それに気付いた彼女は首を傾げてジゼルを見つめる。

「どうかしたの？」

「あ、ええと、ガーネット殿は一緒にいるのですか？」

「ガー？ 別にいつも一緒に訳ではないもの」

いや、実際はほぼ一緒、というか基本的には四六時中付きまとわ
れてはいるが。

ガーネットがこの場にいないことが分かったジゼーラルは、気にな
っていたことをスカーレットに聞いてみた。

「あの方とは……その、城に来る前からの付き合いで？」

「そうよ、ほぼ生まれた時からの付き合いになるわね」

「幼友達なのですね」

生まれた時からの付き合いといっても、赤ん坊だったのはガーネ
ットだけだったので、幼友達というのはおかしい感じがしたが、説
明が面倒だったのでスカーレットはあやふやな笑顔で頷いた。本当
は養母と養子であり、師匠と弟子の関係です、なんて言える訳がな
い。

「お二人は、何と言うか……お付き合いをしているのですか？」

「まさか」

ジゼーラルのおずおずとした質問に、スカーレットは間髪を入れずに否定の言葉を返した。どこをどう見たら、二人が付き合っているように見えるのだろうか。

「でも……ガーンネット殿は」

ガーンネット殿はあなたが好きだと思います。

そう言おうとしたジゼルの方が急に重たくなり、心臓が冷えたような感覚に襲われた。どうして次の言葉が出てこないのか、彼の頭では上手く理解が出来なかった。彼の心の中にある無自覚な気持ち、おそらくそれが言葉を反射的に押し込めたのだろう。

ガーンネットがスカーレットを好いていることなど、初対面の人間でも一目見れば分かるくらい分かりやすい。しかしそういった事に疎いジゼーラルは、スカーレットが彼の気持ちに気付いてないと考えていたのだ。

「ガーが何か言っていたの？ あの子の言う事鵜呑みにしちゃ駄目よ。頭の中が年中お花畑で、妖精が飛び回ってるような子なんだから」

「あ……いいえ、彼は特には」

「ガーが言う私に関する事柄は九割は虚言だと思った方がいいわ」

「はあ……」

スカーレットの言う事があまり頭に入って来ないのか、彼女の「あの子」発言への違和感もジゼルの脳内を通り過ぎていった。

第17話

何だかぼんやりとした表情のジゼーラルを少し眺めてから、スカ
ーレットは書き物机辺りへと視線を移した。

「何か……論文でも書いてたの？」

スカーレットがそう思うのも当然である。部屋の床には書き損じ
の紙が何枚も散らかり、卓上には書き終えたらしい書類の束と、資
料らしい本が積まれていたのだ。

ジゼーラルはスカーレットの言葉でハツとし、急いで床に散らば
った紙を集め始めた。

「すみません、散らかっていて。少し日記を書いていて……」

「に……日記？」

「はい、ですが書いている内に様々なことが頭に浮かんできたので、
報告書にしようと思って……」

「なるほどね」

「けれど、報告書を書いている内に気になることが出てきて資料を
読み込んでいたら、段々文章が長くなってしまう、その、いつのま
にか論文のように……」

「そ、そう……」

スカーレットはほんの少し顔を引きつらせながらも笑顔を保った。
どうしてそこまで行動がぶれてしまうのだろうか。計画性が皆無な
のか、はたまた効率性を重視しすぎなのか。

「良い文は書けたのかしら？」

「書くのに夢中で、まだ見直しをしていなくて」

「もし良かったら私に読ませてくれないかしら？」

スカーレットはそう言いながら、原稿を持ち上げた。そして、ジゼーラルが「どうぞ」と言う前に紙の束をパラパラとめくり始めていた。

「ふんふん……ん？ え……？」

読み始めた頃は真剣な表情に笑顔も混じっていたが、最後に行くにつれてその表情は微妙なものへと変わっていった。

（け……結論が序論ヘループしているわ）

スカーレットは読み終えた「終わりの来ない論文」を丁寧に机に置き、作り笑いを浮かべる。そんな彼女の目の前には、小動物のようなつぶらな瞳で意見を待つジゼーラルの姿があった。そんな汚れの無い眼差しで見つめられてしまったのは下手に酷評出来ない。

「ええっと、そうね。中々面白い考察だと思うわ。一つ助言するとしたら、最後をもう少しすっきりとまとめた方が分かりやすくなる、という所かしらね」

「そうですか、もう一度見直してまとめ直してみます。やはり人に見てもらった方が違う観点からの意見を頂けて良いですね」

ジゼーラルはそんなに厳しい指摘をされなかった事に胸を撫で下ろし、柔らかに微笑む。つられてスカーレットも自然に微笑んでしまった。優柔不断だがとんでもない癒し系である。

「そつえば、何かご用があったのでは？」

ジゼーラルはスカーレットに席を勧めながら、彼女に来訪の目的を尋ねる。勧められるがままスカーレットがソファに腰を下ろすと、彼も向かいの一人掛けソファに腰を落ち着かせた。

「用という程の事では無いのだけど。バルコニーに出たら上の階に灯りが見えたから、ジゼルもまだ起きているんだなあと。思ってたらずい少し話でもしに行こうかなって」

「それは…… 光栄ですね」

「本当にそう思ってる？」

「もちろんですよ。何故嘘を言う必要が？」

スカーレットの問いかけにキョトンとした表情で真面目な意見を返すジゼーラル。そんな彼が可愛らしく思えて、スカーレットは笑いそうになったが寸でるところでそれを押さえた。相手は大真面目なのだから笑っては可哀想だ。

それから二人は食事会の時とは打って変わって、肩の力を抜いた取り留めの無い話しを続けた。ほとんどスカーレットが話しをしていたが、彼女の話す庶民の生活の話はジゼルの心をつちりと捉えた。

一息置くと、ジゼーラルは少しスカーレットから視線を逸らし、ぼつりと声を落とした。

「私は幸運だったと思います。意見交換会がこの時期だったからこそ、あなたに出会えたのですから」

「そう言ってもらえると城に来て良かったと思えるわ」

「本当は来たくなかったのですか？」

「そうね、あまり気は進まなかったわ。でも、トウー…… お姉様のこともあるからね」

「そつえば、結局お姿を拝見していませんね。もしかしてどこかお具合でも？」

「……それならまだいくらかマシなのだけど」

心配そうな顔をするジゼーラルの顔を見て、スカーレットは彼に聞こえない小さな声でそう呟く。彼女もまた、この城に来てからトウトリアに一度も会っていないのだ。

魔法技術交換会という名の見合いの直前に依頼された「姫副業」。これはあまりにタイミングが良すぎるのではないかと、スカーレットは始めの方から考えていた。

スカーレットは今回の話には一筋縄にはいかない、何か裏があると薄々感じていたのだ。だからこそ、面倒だが今回の依頼を受けただのである。

スカーレットが何かを考え込み始めたので、ジゼーラルは手持無沙汰になり窓の方へと目をやった。少し肌寒いと思っていたら、窓が少し開いているではないか。

ジゼーラルが立ち上がり、窓を閉めようとした時、その隙間から一匹の黒い蝶が舞い込んできた。全体的には黒く、羽根に複雑な金色の模様を持つその蝶はとても美しく、彼の目線を釘づけにした。

「変わった種類ですね……。模様も何だか不思議な……。魔法陣に似ていますね？」

その言葉に、今まで考え事をしていたスカーレットが顔を上げる。そして、部屋の中をひらりと舞う蝶を目にするとさっと顔色を変えた。

「あれは……！ 駄目よジゼル！ その蝶に近づいては駄目！」

蝶に手を伸ばすジゼーラルに向かってスカーレットは大声でそう叫んだ後、勢い良く彼の方へ駆けだす。スカーレットが彼に飛び付いた瞬間、彼女の懸念が確かなものとなった。

鼓膜が破れてしまいそうな破裂音に目を開けていられない程の眩い光。部屋全体に焦げくさい風が巻き起こる。そう、蝶がその身を輝かせながら魔法陣を発生させて、爆発を引き起こしたのだ。

スカーレットは目をきつく瞑りながら、勢い良く床に倒れ込む。

（あれ？ 痛くない。というか何だか暖かい……）

そつと目を開けると、そこには自分の上に覆いかぶさったジゼーラルの姿があった。庇うつもりが逆に庇われてしまっていたのだ。ジゼーラルはスカーレットをきつく抱きしめていた自分の腕の力を緩めると、爆発のあった方へ視線をやる。蝶は焼け焦げた紙くずに姿を変え、まだ火が残る絨毯の上に散らばっていた。椅子などの家具も爆発に巻き込まれたせいで所々焦げて黒ずんでいる。こんな状況の中、良く助かったものだ。スカーレットは息を呑んだ。

「レティ！ 怪我は？」

ジゼーラルは心配そうに、自分の胸の中にいるスカーレットの顔を覗きこむ。その耳には輝きを増した耳飾りが存在をより主張していた。

「そつか……耳飾りの加護の力……」

スカーレットは納得した様に小さく呟く。エノワルド王族の証であるこの耳飾りは、守護の魔法を基盤とした特殊な魔法陣、魔法で編み込まれた飾り紐で出来ている。王族の証であると同時に、緊急時に持ち主を守る防御魔法を発動する非常に貴重な魔法道具なのだ。

「私は大丈夫よ。逆に助けてもらってたわね」

「いえ、あなたが無事でほっとしました」

ジゼーラルは泣きそんな笑顔でスカーレットを見つめた。余程気を張っていたのだろう。

「……と、とりあえず、起き上がらない？」

未だ、押し倒されている状態であったスカーレットは遠慮がちにジゼーラルにそう告げる。彼もそのことによろしく気が付いたのか、急に顔を赤く染めた。そして謝りながら、急いで立ち上がるうと体を動かす。

しかし、タイミングが良いのか悪いのか、彼が立ちあがるより前に扉が勢い良く開かれたのだった。

「お……お師匠さま？」

そこには、爆発音を聞きつけて上の階まで走ってきたガーネットが、息を切らしながら茫然として立っていた。

扉を開けた彼の目にまず飛び込んできたのは、惨状と化した部屋でなく、押し倒されているかのようにしか見えない最愛の師匠の姿であった。

それを見た瞬間、ガーネットの中で何かが切れる音がした。無言かつ無表情のまま部屋へ入り、ジゼーラルをスカーレットから引きはがすと、そのまま彼女を抱え上げて踵を返す。

「ガー！ 降ろして、誤解よ。というかこの部屋の惨状見て、少しは察しなさいよ」

スカーレットの反論する声にも耳を貸さずに、ガーネットはただ去り際にジゼーラルを冷たい眼差しで睨みつけるとそのまま部屋を後にした。

突然のやってきた嵐が訳も分らないままに過ぎ去り、ジゼーラ
ルは焦げた臭いが漂う部屋に一人取り残された。そして、爆発音を
聞きつけたエノワルドの護衛やスイートピアの衛兵が部屋へ駆けつ
けるまで、彼は床に座り込んで扉の先を瞬きもせずに見つめていた。

第18話

*

「ガー、降ろしてつたら！　ちよつと、聞いてるの？」

ガーネットは、吠えながら足をバタつかせるスカーレットを黙ったまま抱きかかえ歩き続ける。スカーレットは力の限り彼の腕の中で暴れたが、降ろしてもらえそうな気配は一向に無かった。

（無言なのが余計に気味悪いわ）

いつもまくし立てるように話しかけてくるガーネットが、こんな時に限って一言も言葉を発さない。それが余計にスカーレットを慌てさせた。

一体これからどうするつもりなのか。

普段は従順な弟子の反抗とは実に恐ろしいもので、スカーレットは彼を一流の魔法使いに育て上げたことさえ後悔しそうになった。身の危機、つまりは貞操の危機をじわりと感じる。

しかし、小さくて力がなくても、魔法が使えなくても師匠は師匠である。こんな時の為に手を打っていない訳がない。

スカーレットを抱えてせかせかと歩いていたガーネットの体が急にぐらり大きく揺れる。その隙をついてスカーレットは彼の腕の中から軽やかな身のこなしで逃れた。

ガーネットは自分の身に突然起こった見えない衝撃に前のめりになり、頭を押さえる。見えない刃で頭の中を切り裂かれた感覚に意識を失いそうになったが辛うじて片目を開け、前を向く。

「魔法の金笛ですか……」

金細工が見事な笛を口にくわえる師匠を見て、彼は何が起こったのかをすぐに悟った。一定距離にいる使用者以外の意識を混濁させる魔法道具。スカーレットが町で人攫いに使用しようとしたものである。

そもそもこれは「対暴漢用」ではなく「対変態弟子用」にスカーレットが知り合いに手伝ってもらい作ったものなのだ。

「あなたが話を聞かないからよ。ジゼルは私を助けてくれたのよ？ それなのに何あの態度は。失礼でしょう」
「助けてくれた？」

未だに耳鳴りがする頭を押さえながら、ガーネットは不思議そうな顔をした。どうやら、本当にあの部屋の惨状に目がいつてなかったようである。

スカーレットがああの部屋で起こったことを簡潔にガーネットに説明し終える頃には、彼の耳鳴りも音を潜めた。

「すみません……。僕の勘違いだったんですね」

「そうよ、あと謝るならジゼルに謝りなさい」

「それは断固拒否します。どんな理由であれ、僕のお師匠さまを押し倒すなんて羨まし……。破廉恥なことをしたんですから。あいつには罵られないだけでも感謝して欲しいくらいです」

「ガーネット……」

スカーレットはガーネットを睨めつけたが、彼は一瞬だけ怯んではからそっぽを向いてしまった。意地でも謝らないつもりらしい。

しかし、何かを思い出したかの様に急にしおらしい顔を見るとガーネットはスカーレットに向き直った。

「でも、元はと言えば僕がお師匠さまの傍を離れたのが原因なんですよね。それはとても反省してるし、後悔してます。もし、もし僕のお師匠さまが傷ものになっていたらと考えると恐ろしくて……。
あ、でもその時は僕が結婚という形で責任を……」

「とらなくて結構よ」

「これからは二十四時間、いつでもどこでもお供させてもらいます！ ええ、寝所の中でもお風呂の中でもばっちりお守りしますよ！」
「そう、それは安心ね。じゃあ頼んだわよ、ジゼルの護衛」

スカーレットのその言葉を聞いた途端、ガーネットの顔が真顔に戻る。

「何で僕が野郎の裸を見なくちゃならないんですか」

「……本音がだだ漏れよ。結局それが目的なのね」

スカーレットは欲望に忠実な弟子を軽蔑の眼差しで見つめる。しかし当の本人に悪びれた様子は全くない。最低だ。

「というか、あの部屋が狙われたのだから、ジゼルが狙われたと考えるのが普通じゃない？ どうして私が狙われたと考えたの？」

「それは……」

ガーネットはその問いで、自分がスカーレットを捜していた理由を思い出す。

「そう、そうだ！ 例の男が僕に忠告したんですよ、『気をつけろって。だからお師匠さまの身に何かあったんじゃないかって」

「例の男？」

「お師匠さま、視線を感じるって言ってたじゃないですか！ その男が姿を現したんですよ」 ガーネットは男に会った時の出来事を

スカーレットに事細かに話して聞かせた。スカーレットは腕を組みながらその話しに耳を傾け、少々眉根を寄せる。

「なるほどね、だから私が狙われたと考えたのね」

「そうですね！ もうこんな依頼断つてさっさと僕らの家に帰りましょうよ」

「そうはいかないわ。ねえ、ガーネット、そこにはメイドもいたのよね？」

「ええ、三人くらい」

「でも彼女達は特に騒がなかった……。ということは、その人やつぱりこの城の人間なんじゃない？」

「確かに……。知らない顔がいたら少しは不審がりますもんね。でも私服っぽかったですよ。騎士団の制服って堇色のマント付きの結構かつちりした服でしたよね？」

「逆によ、私服でうろついていても不審がられないくらい顔が知られてるってことよ。ガー、あなたそのメイドのお譲さん達に彼が何者か探りを入れて来なさい」

「でもあそこにいたメイドの顔なんて覚えてないですし」

微妙に嫌そうな顔をするガーネット。スカーレットは仕方なしに奥の手を発動させることにした。

ガーネットの手を握りしめ、上目づかいで彼を見つめる。

「お願い、あなただけが頼りなのよ」

「お任せ下さい！！ 何でも聞いてきちゃいますよ！！」

単純馬鹿である。というか馬鹿である。

ガーネットの了承をもらうとすぐに、スカーレットは握っていた手をパツと離れた。目的を達した後握り続ける意味は無い。

「良かったわ。それからね、もう一つ、聞いて来て欲しいことがあるの」

スカーレットに握られた手の感触を確かめるように手をさすっていたガーネットは、彼女の次の言葉に目を丸くした。

「それが今回の事件と何か関係が？」

「とにかく聞いてきてちょうだい。話はそれからよ」

ガーネットはまだいまいち納得がいかない顔をしていたが、師匠の言葉にとりあえず頷くことにした。

そして、部屋へ戻ろうとしたスカーレットに「僕も一緒に添い寝で護衛を！」と懲りずに食い下がり、再び金笛の餌食となった馬鹿弟子なのであった。

第18話（後書き）

拍手画像更新しました（o・人）

第19話

*

あの爆発騒ぎから一夜明け、スカーレットは情報収集を終えたガーネットの話聞きながら紅茶をすすっていた。ガーネットは聞いてきた事をぎつしりとメモした茶色い手帳に視線を落としながら、すらすらと報告を続ける。

「あの男、スイートピア騎士団に所属しているれっきとした騎士らしいです。性格は真面目で面白みがない。でも家柄はいいし、将来性は二重丸。年齢も二十六歳結婚適齢期で狙い目だとか」

「……その感想はまるつきり『メイドから見た有望株データ』ね」

スカーレットはそう言い少し呆れた顔を見せた。

「それで、名前は？ 聞いてきたのでしょうか」

「ええ、もちろん。ゴドウェルト・オルソンと言っらしいです」

「ゴドウェルト……オルソン？ オルソンって確か……」

スカーレットは一瞬とてつもない嫌そうな顔をしてから、何か納得したように何度も頷いた。

「そう、分かった。もう彼のことはいいわ」

「え？ いいって……知ってるんですか？ あいつのこと」

「彼のことは知らないわ。それよりも、もう一つ聞いてきて欲しいって言ったことは？」

ゴドウェルトに関する何を何だかはぐらかされた気がしたが、

ガーネットは渋々次の報告に移った。

「そのことについても様々な噂があるようで……」

「そう、どんな？」

「お師匠さまに言われた通り、トウートリア様の最近の様子について探りを入れてみたところ……『護衛の騎士と駆け落ちした』とか『実は不倫をしていて、護衛を連れて相手の家に乗り込んでる最中』とか『黒魔術に凝ってしまっ、護衛を生贄に悪魔を召喚しようと部屋に籠っている』とか……」

ガーネットが並べる噂話に、スカーレットは微かに顔を引きつらせる。

「ず、随分バラエティー豊かな噂ね」

「他にも何人かの城の人間に聞いてみたのですが、ほぼ似たような内容でしたね」

「そう……」

スカーレットは顎に手をやり、ほんの少し考え込んでからうやうやしく口を開いた。

「この噂には共通点があるわ」

「共通点……？」

「つまり、城の使用人達はここ最近の間、トウーとその護衛の姿を目にしないのよ」

「そういえば、そうですね」

ガーネットは頭の中で、噂話をもう一度整理してから納得の声を洩らす。

「王女は……もしかどわかされたのでしょうか」

「それはまだ分からないわ。だって、護衛も居なくなっているのよ？ 王女の護衛なのだから腕は立つでしょうに」

「さあ……どうなのでしょう。とりあえず顔だけはいいつて皆言つてましたよ」

「……顔だけって言うのが引つかるけど。でも、護衛付きでしかも城の中から王女を攫うなんて……」

城の守りは完璧だ。守りの魔法術式を作り上げたスカーレットがそう思うのだから間違いないだろう。彼女よりも魔法に詳しい人間など、この国にはいないと言っても過言ではない。

——外から魔法を破ったのではなければ。
スカーレットの脳裏に最悪の可能性が浮かび上がってきた。

「王女はいなくなるし、城で事件は起きるし、やっぱり何か変ですよ」

「ああ、あの爆発事件ね……」

「あれだって、お師匠さまは違うと言いましたけど、やっぱり『第二王女』を狙ったものだったのかもしれないよ」

嫌な事を思い出してしまったという顔をして、ガーネットは眉根を寄せた。

しかし、スカーレットはそんな弟子の様子など全く気にせずに冷めた紅茶に口を付けてから、ゆっくりと首を振った。

「それは無いわ。ジゼルが狙われたと思ったのには、彼の部屋で起きたから、という以外にも根拠があるのよ」

「根拠ですか？」

「ええ、今回使われた蝶をかたどった爆発物。紙に魔法を編み込んで作る爆弾みたいなもので、爆発する前に潰してしまえば効果はな

いもののなの」

「ああ、知ってますよそれ！ 確か、昔戦で使われたって言うあれですね。大量に飛ばした時に限って途端大雨に襲われ、紙くずと化して使い物にならなかった、っていう」

「そう、そうなのよ。スイートピアではこの話は有名で、魔法使いじゃない一般人でも知ってる話よ」

「そうか、相手がエノワルドの人間だからこそ使えた手なんですね」
「外国ではあまり有名な話ではないからね。何よりもこの魔法道具は案外作るのが簡単で、少しでも魔法をかじったことのある者なら簡単に作れる代物なのよ」

スカーレットは机の上にメモ用紙に、さらさらと魔法式を書いていく。ガーネットはその紙を見て、口の中で音を転がしていった。すると、急にその紙がふわりと浮きあがり、まるでさなぎが羽化するかのように紙は蝶へと変化を遂げた。

スカーレットはその蝶をすぐさま握りつぶし、飲みかけの紅茶が入ったカップへと押し込めた。

「確かに簡単ですね」

「誰が実際に作れて言ったのよ。危ないでしょうが」

スカーレットは呆れながら、茶色の海を漂うかつては蝶だった紙くずを眺めた。

ガーネットは「すみません、つい」と微笑みながら精いっぱい可愛らしく頬を掻いた。しかし、その下ごころたつぷりな仕草はスカーレットに一笑されて終わってしまった。仕方がないのでシャンと姿勢を正し、ガーネットはずっと気になっていたことをスカーレットに問い掛ける。

「でも、王女がいなくなったことをどうして僕らに隠してるんまし

ようか？ 第二王女なんて存在をでっち上げるよりも、その話を話して協力を仰いだ方がいいのでは？」

「馬鹿ね。私達に協力を仰がなくても、ここには優秀な魔道師がごろごろいるのよ」

「ですけど、それでも見つからないのでしょうか？」

「それもそうね……」

スカーレットはガーネットのもっともな言葉に少し頭を捻った。

（宮廷魔道師にもトウートリアを見つけだせない。そもそも捜しているのかも定かじやない。国王は詳しいことは話さずに私に第二王女のふりだけを頼んだ。最初から何かあるとは思ってたけど、もしかしてあの国王……）

——気付いた頃には大抵手おくれとなっている。

それが彼女の長い人生で得た教訓である。ここまで巻き込まれてしまったからには、もう行くところまで行くしかない。

恐らく、「事件」はもう一度起こる。そしてその時が勝負である。スカーレットは今迄得た情報を頭の中で、パズルのように組み立てていく。様々な予想が浮かんだが、謎が解けたところで結局は自分の通る道は一つしか無い様に思えてため息がこぼれた。

「まあ、成るようになるわよね。伊達に三世紀も生きていないわ」

「お師匠さま？ 一人で勝手に先に進もうとしてませんか。一人よりも二人の方が何でも上手いきますよ！ 愛の力って偉大なんです！」

「そもそも愛なんて存在しないから、何の力にもならないわ」

「いえ、これはとりあえず一方的な僕からの愛の力です！」

「……余計いらないわ」

馬鹿弟子の鋭いような、ずれてるような発言を聞き流しながら、スカーレットは空を見上げた。

この広い空は全ての真実を見渡しているのだろうか。

物語は、確実に先へ先へと歩みを速めている。それをハッピーエンドに出来るかは、登場人物である自分達次第なのだ。そんなことを考えながら、青い空を瞳に吸い込み、スカーレットは目を閉じた。

第20話

*

「そう、ジゼルは部屋を移ったのね。まあ、懸命な判断だね」

ルーフアスからの報告を聞いて、スカーレットは満足そうに頷いた。

部屋の修復は魔法で簡単に出来るが、あのような事件があった後も同じ部屋にいるというのはあまりに無防備である。部屋を移し、どこの部屋に移ったのかを伏せるくらいは当然の処置と言える。

「護衛も大勢付けましたし、とりあえず当面の間は安心かと」

「油断は禁物だけれどね。それにしても、こんな事件があった後も帰らないなんて、エノワルドはこの見合いに相当力を入れているのね」

スカーレットはソファに寄り掛かりながら、足を組み直した。スカーレットに勧められ向かいの席に腰を下ろしていたルーフアスは、扉の傍に立っているガーネットの視線を気にしながら両手を組んだ。手にじわりと汗が滲む。

「それは私も意外でした……。今回の見合いは単に第二王子の外交研修くらいに思っていましたので。そもそもこの話を進めてきたのはエノワルド第一王子なんです。ですから……」

「確かに国王が勧めた話じゃないなら、本気度は低いと考えるのが妥当だね。まあ、でもあの国の第一王子っていうのは大体食えない連中ばかりなのだけれど」

「そうなのですか？ それにしても困りましたね。流石にスカーレ

ット様を結婚させる訳には参りませんし……」

そう言いながら、ルーファスはガーネットの方をちらりと横目で見た。

（怒っている！ この前よりも瞳の炎が黒い！）

「ガー、睨まない。別にルーファスが悪い訳ではないのだから」

「今回の件に関わった奴は皆同罪です」

「関わることを選んだのは私自身よ。こうなったら仕方無いわ」

「えー？ 結婚するんですか！？」

「どうしてそうなるのよ……。大体、三百も下の少年と結婚なんて出来ないわよ」

「じゃあ僕は永遠に同棲彼氏止まりですか！？」

「……あなたの今の立場は『住み込み弟子』そして将来的には『独立して巣立つ元弟子』よ」

その言葉に対して、長くてしつこい反論を繰り広げるガーネットは放って、スカーレットは再びルーファスの方へ向き直った。

「仕方ないから、いざとなったら私の正体を明かすわよ。それでいいわね？」

「ええ、このまま縁談を進める訳には参りませんし、そうになったらお願いします。出来るだけ、こちらでも努力はしますので」

「期待しないで待ってるわ。ああ、でも正体を明かさなくても、トウトリアだっているものね。病弱と言ってもいつかは結婚しなくてはいけないのだし。第二王子だから婿養子にも来てもらえるし言う事なしよね」

スカーレットがそう言った途端、ルーファスの表情が固くなって

いった。

恐らく、ルーファスはトゥートリアがこの城にいないことを知っているのだろう。目だけが落ち着きなく動く彼を見て、スカーレットはそう確信した。

（けれど、今ルーファスを問い詰めたところで何も解決はしないだろうし）

一時も早く、この場から立ち去りたいのか、ルーファスは体を前後に軽く揺する。その姿は手洗いに行きたくて仕方の無い子供のようにも見えた。

「……報告はそれだけかしら？ だったらもう退出していいわよ」「そうですか！ ええ、お伝えすることはそれだけです」

スカーレットからの退出許可が出るや否や、ルーファスは勢い良く立ち上がり、扉へ一直線に向かう。扉の手前で深く頭を下げると彼は逃げ出すかのような足取りでその場から去って行った。

ガーネットはルーファスの姿が見えなくなるまで黒い視線を送り続けると、スカーレットの傍に寄り、声を洩らした。

「いいんですか。拷問して吐かせなくて」

「ちよつと……どうしていきなり拷問って手段が出てくるのよ。そんな無理やり聞き出さなくちゃいけない情報なんてないでしょう？」

どうせ、ルーファスが知っていることと、スカーレットが分かっていることは大体同じ情報量だろう。それならば、無理に聞き出すのは無意味に近いと言うものだ。

「それに、あの可哀想なオデコを見ていると、あまり責められなく

てね。アランに頼んで増毛剤でも調合してもらおうかしら」

「あの人が禿げようが、呪われようが、知ったことですか」

「まさかとは思うけど……呪っちゃ駄目よ。それに、ガーだっていつかは禿げるかもしれないのよ。もっと他人の傷みが分かる人間にならなきゃ！」

「僕は禿げません！」

「どうして断言できるのよ？」

「美青年は歳をとっても禿げないというお約束があるんです。成長してもフサフサのダンディーです」

「知ってる？ アランも帽子の下は禿げなのよ」

アランの帽子着用時しか知らないガーネットは、元美青年の現在の姿を知らされ、一瞬で微妙な顔になった。年月とは何と恐ろしいものだ。

「お師匠さまは禿げても僕を可愛がってくれますか？」

しょんぼりとした潤んだ瞳で、ガーネットはスカーレットを見下ろす。

そんな殊勝な彼を見て、スカーレットは鼻で笑った。

「言っただでしょう。可愛かったのは三歳までよ。今も既に可愛くないのだから、禿げても大差ないわ」

師匠の血も涙もましてや愛の欠片もない一言に、流石のガーネットも反撃の手を失い、がくりに床に手をついてうな垂れた。しかし、抜け目の無い彼だ。そのままの姿勢でスカーレットの足にすり寄ろうとして、お茶を運ぶのに使われた盆で頭に一撃をくらった。

馬鹿だ。

第21話

ガーネットが頭をさすりながら、ようやく立ち上がったその時、扉を遠慮深く叩く音が聞こえてきた。

入室許可を得て、ドアを開いたのは魔道師団の制服に身を包んだ中肉中背のこれといって特徴の無い青年であった。制服がガーネットが着ているのと同じようにパリッとしていて、新品のように見える。彼も新入りなのだろうか。

青年はガーネットの方へ目線だけを向けると、小さい声で第一声を発した。

「えーと、あなたがガーネット殿、ですか？」

「そうですけど、何かご用ですか？」

下を向きながらもじもじと指いじりをした青年は、ガーネットの足元を見て呟く。

「エステル室長にあなたをお呼びするように言付かって参ったもので」

「僕を？ 何の用ですか？」

「自分は伝言を頼まれただけなので……。何の用かまでは、ちょっと……」

「生憎、僕は今ものすごく忙しいんです。そう、室長さんに伝えて下さい」

「でも……」

そう言い、ガーネットがそっぽを向いてしまったので、青年は困った顔をして彼とスカーレットを交互に眺めた。ガーネットは青年の困り様になど全く興味を示さず、スカーレットに甲斐甲斐しくお

茶のお代わりやお菓子を進めていた。

「いいじゃない。行つてやりなさい、ガー」

スカーレットは青年をちらりと一瞥すると、ガーネットにそう許可を出した。というよりも、それは命令に近いものだった。

「僕がいない間に、あなたに何かあったらどうするんですか!」

「大丈夫。その彼にその聞いてもらえばいいわ。ねえ?」

いきなり話を振られた青年は驚いたのか、肩をビクツとさせて「ひゃい!」と言葉になっていない返事をした。ガーネットはスカーレットの言葉を受けた後も、未練がましそうに彼女を見つめたが、笑顔で手を振られてしまい、がつくりとうな垂れた。

「いいんですか! 行っちゃいますよ! ホントにいいんですね!」
「ちゃっっちゃとしなさい」

しょんぼりとうな垂れる彼の後ろ姿は、尻尾を垂らして拗ねている犬そのものであった。そのあまりに哀愁漂う後ろ姿に、スカーレットは思わず笑みを零しそうになったが、紅茶を口に含んで誤魔化した。これぞ、秘儀お茶で濁す。

しばらく部屋の外で聞き耳を立てていたガーネットの気配が完全に消えるのと同時に、スカーレットはうやうやしく口を開いた。

「それで?」

「はい? 何でしょうか」

「何でしょうか、はこっちの台詞よ。私に何の用かしら? 犯人一味のお一人さん」

スカーレットの鋭い視線が、青年の今まで伏せがちだった瞳を射抜く。

すると、彼の表情は、先ほどの自信無さげなものから、自信を過信しているかのようなものへと変貌していった。

「どうして分かったんですか？」

「簡単よ。エステル室長の研究室は女性しかいない、それなのに男性のあなたが言付けを頼まれるなんておかしいわ」

「それだけですか……」

「いいえ、もう一つあるわ。この部屋が私の部屋だと知っているのはごく一部の人間だけなのよ」

「ああ、そうか、それは迂闊でした」

「本当にね。脇が甘すぎるわ」

「でも、本当に迂闊なのはあなたの方ですよ。姫様」

その警告と共にスカーレットは後ろから何者かによって口と体を抑え込まれた。息苦しい薬品の匂いで重たくなる瞼。目の前が完全に遮断される前に彼女が見たものは、薄ら笑いを浮かべる青年の姿だった。

*

「あらあら？ ガーネットさん、どうされたんですか？」

研究室に辿り着いたガーネットを待っていたのは、本棚を整理しながら不思議そうに顔を傾げるエステルの姿であった。彼女は箒に横座りして、高い棚に本を並べていたのだが、ガーネットの姿を確認するとゆっくりと床へと降り立った。

「どうって……。あなたが呼んでいると聞いたので来たんですが」

「私が？ あらあらおかしいですわね。そんな事誰にも頼んだ覚えはないんですけど」

エステルは頬に手を当てながら、目を瞬かせた。

彼女のその言葉を聞いた途端、ガーネットの中で体中の血液が逆流したかのような衝撃が走った。心臓が痛いほどの焦燥。

ガーネットは気がついた時には何も言わず走り出していた。エステルは突然来て、風のように去って行った彼をポカンとしながら見送っていた。

部屋に戻ったガーネットは、自分の予想通りにスカーレットの姿が見えないことに愕然とした。一度ならず二度までも。彼は歯を噛み締め、開け放たれた窓の傍で踊るカーテンを睨みつけた。

「落ち着け、落ち着くんた。まだ城内にいるかもしれない……」

彼はそう自分に言い聞かせながら、手を下へ向かってかざした。

複雑に編み込まれたような音に近い言葉を彼が発すると、床に青白い輝きの魔法陣が浮かび上がった。

（お師匠さまお師匠さまお師匠さま……！ 駄目だ、見つからない！）

魔法でスカーレットの位置情報を確認しようとしたガーネットは、歯ぎしりをした。何者かによって追尾魔法が阻害され、場所が特定できないのだ。彼の魔力は強大だが、こういった探索といった類の魔法は繊細な技術や経験がものをいう。

ガーネットは何とか、阻害を振り切ろうと魔法の構造をほどいては編み直したが、相手の方が一枚上手らしくついには魔法陣が崩れ始めた。

「これじゃあ、どうやって捜せばいいんだ……」

前髪を乱暴に掻き上げ、ガーネットは冷静に考えようと息を大きく吸った。酸素が頭に満ちると同時に、彼の脳裏にある人物の顔が浮かんだ。

「そつだ……！　いたじゃないか、怪しい奴が！」

そう声をあげ、足に風魔法で浮力を与えると、ガーネットは開け放たれた窓からひらりと外へ降り立った。

第22話

*

「ゴドウェルト先輩、この後稽古に付き合って貰えませんか？」

騎士服を纏った赤茶髪の女性が、仕事を終え立ち去ろうとしていたゴドウェルトに明るい調子で声を掛けた。

剣術演習を終え、外にある鍛錬場から城の中へと向かおうとしていたゴドウェルトはこの声に少し振り返りかえっただけで、すぐに元に体勢を戻し歩みを進める。

「悪い、リネット。今日は急いでるんだ」

「今日はって……ここ数日いつもそんな感じじゃないですか。そんなに急いで何処へ行くんですか？」

リネットは凜々しい眉を少し不機嫌そうに上げて、ゴドウェルトを見つめた。

「……話すほどの所じゃない。稽古は他の暇な奴に付き合って貰え」「他の奴って……。私は先輩に、稽古を付けて貰いたいのに。あ、いえ！ 深い意味はないですよ！ ただ先輩が城でも一、二を争う剣の使い手だからってだけでっ！ 決して不純な動機などでは！」

身ぶり手ぶりを交えて必死にいらぬ弁解をするリネット。しかし、ゴドウェルトは彼女のそんな彼女の様子など全く気にも留めない風に、再び歩き始めた。

「って！ ちょっとゴドウェルト先輩！ まだ話の途中ですって」

「何だ、もう用は済んだんじゃないのか」

「まだ話してるじゃないですか。他の皆も言っていましたよ、最近何だか様子がおかしいって」

「気のせいだろ」

「そんなことないですってば！ 何だか仕事中心につきもそわそわしてるし。落ち着きが足りないといえますか」

リネットはゴドウェルトの後を追いながら、尚も話を続けた。彼の歩幅が大きいので、リネットの足は自然と小走りをしていた。

「俺はちょっとやそつとの事で心を乱したりはしない」

「まあ、確かに表情はいつも通り固いままですけど」

何だか納得してしまいそうになり、リネットは急いで頭を振った。駄目だ。ここで流されてはいけない。

中庭に面した回廊に、追いかけてくる二つの影が伸びる。

小さい方の影は、時折諦めたかのように動きを止め、少し前後に揺らいだ。

もう今日は駄目か、とリネットがようやく諦めをつけようとした時、殺気に近い気配が頭上から降りかかってきた。

「見つけた！ ゴドウェルト・オルソン！」

急に聞こえた声に反応して、ゴドウェルトが身構えた時には彼の体は光の縄で壁に括りつけられていた。リネットは突然の事に驚いて動きを固くしたが、すぐに剣を鞘から滑らせ、声の方へと刃先を向ける。

「何者だ！」

彼女がそう叫ぶと同時に、声の主が空から舞い降りたかのように姿を現す。

花々が輝く花壇の上に立っていたのは、逆光の中、エメラルドの瞳の奥に炎を灯したガーネットの姿であった。彼はリネットを一瞥すると、何か音に近い言葉を発した。するとリネットの体は急に石のように固く重くなり、その場に縫い付けられてしまった。

ゴドウェルトは多少は戸惑っているように見えたが、その表情から落ち着きは消えていなかった。彼はいつも通りの凄味の利いた目でガーネットを捕らえる。

「一体何のつもりだ……」

「何のつもり？ こっちが聞きたいくらいだ！ 言え！ おししょ……姫さまを何処へやった！」

首が絞まりそうな程強く、ゴドウェルトの襟元を掴みあげたガーネットは今にも彼を噛み殺しそうな声でそう叫んだ。

しかし、この言葉に対してゴドウェルトが見せた反応は、ガーネットが想像していたものとは全く異なるものであった。彼は普段から深い眉間のしわをより一層深くし、大声で叫び返したのだ。

「スカーレット様がいなくなれたのか!？」

「だ、だから何処へやったんだと」

「俺がのうのと仕事をしている間にこんなことになるなんて……! くそっ!」

「……お前は今回の件に関係ないのか？」

ゴドウェルトの反応を見て、ガーネットは彼の袖を掴む手の力を緩める。

「今回の件？ 何のことだ」

「トウートリア王女のことや、爆破事件のことだ」

「待て、話が見えないんだが……」

「じゃああの『気をつける』は何だったんだよ！」

「は？ ああ、あれは『城のメイド達がお前を落とそうと狙ってるから気をつける』ということだったんだが。あいつらは将来性のある結婚相手を得るためなら多少エグイことも何なくこなす人種だからな。俺の同僚も大勢悲惨な目をみている」

ゴドウェルトは大真面目な顔で、そう堂々と断言した。

ガーネットは彼のどこかずれている発言に肩の力は完全に抜け、手にこめていた力も行き場を失った。ゴドウェルトの襟元から手を放したガーネットは、その手で自身の髪の毛をぐるぐると掻き回す。

「ま……紛らわしい忠告の仕方をしないで下さいよ！」

「俺は物事は簡潔にしか伝えられん性質なんだ」

「じゃあ、姫さまをつけ回し、柱の陰から監視してたのは！？」

「監視なんて……ただ見守っていただけだ！」

「あなたのような人相の悪い男にいつも背後で見つめていたら怖いだけですよ！」

もっともな意見だが、ガーネットのこの言葉にゴドウェルトは相当ショックを受けたのか、目を見開き少しの間固まった。

どうやら全く自覚がなかったらしい。

「……とりあえず、このことを陛下に報告した方がいい」

そう言つと、ゴドウェルトの周りにあつた光の縄が蒸発するように消え失せた。まだ魔法を解いていないはずだったガーネットはこの光景に思わず面を食らった。

「魔法が……」

「これくらいなら俺にも解ける。俺の母方の祖母は魔法使いの家系だからな」

そんな事は何でもないと言った風に、ゴドウェルトは薄紫のマントを翻し歩き始めた。ガーネットは未だ、釈然としない気分であったが、ここでごたついていても仕方がないので彼の後に従うことにした。

しかしその場を去ろうとした際後ろから、「ああっ！ これ元に戻して下さいよ！」と言う声が聞こえてきたので、指をちよいと動かし魔法を解いた。

リネットは急に体が軽くなった反動で地面にへたり込んだ。そして、こちらのことなどまるで気にしていない薄情な男性陣二人組の背中を眺め、大きなため息をついた。

第23話

*

謁見の間へ向かう回廊は、いつも通りの平和な日常だと錯覚しそうなほどの静けさを保っている。城に来たばかりの時はあんなにも美しく感じた天井画が、今では雑多で趣味の悪い装飾にしか思えなかった。

（こんな所、来なければ……。そうすればお師匠さまが危険な目に会うことはなかったのに）

しかし、これはスカーレットが決めたことで弟子身分の自分がどうこう言えることでは無い、とガーネットにも分かってはいた。

離れたくはない。しかし、一人前にならない限り、彼の言葉の重みは感じてもらえない。そんなジレンマに、ガーネットが脳を熱くさせていると、前から低い声が流れてきた。

「お前はスカーレット様の弟子なのか？」

「そうですけど……」

「そうか」

「何ですか、その素っ気ない返事は。どんな答えを期待していたんですか」

「いや、スカーレット様は男弟子はとらないと聞いていたから、どいう関係なのかと思っていただけだ。だが、やはり弟子だったんだな」

「それアランさんにも言われましたよ。男弟子とらないってどうしてなんですか？」

「知らん」

歩きたびにふわりと宙を踊る薄紫。話しながらも一度もこちらを振りかえないゴドウェルトに、ガーネットは微かにいらだちを覚えた。礼儀というものを知らないのか、この男は。

「今度はこっちが質問です。どうしてお師匠さまをストーキングしていたんですか」

「ストツ……！」

ゴドウェルトは思わず後ろを振り返り、不本意だと言いたげに眉間のしわを深める。少しの間その鋭い眼光をガーネットに浴びせると、目線を床に投げ再び前を向いた。

「スカーレット様が城に来ることを風の噂で耳にしてな。少しでも役に立ちたいと思い、仕事の合間に自主警護をしていたんだ。警護を」

無駄に『警護』という言葉を強調するゴドウェルト。余程ガーネットにストーカー扱いされたのが気に食わなかったらしい。

「あなたはお師匠さまのことを知っていますか？」

「もちろん知っている。俺は小さい頃からあの方がどんなに素晴らしいか聞かされて育ったからな。偉大な魔法使い『生ける魔法史』。その知識もさることながら、柔軟性に満ちた判断力、穏やかな物腰。そして燃えるような美しい赤髪。俺はあの方をどんな歴史英雄よりも尊敬している」

夢見心地にスカーレットのことを話すゴドウェルトにガーネットはむっとする。彼女のことを一番理解しているのは自分でなくてはならないという偏ったプライドがあるからだ。

「さつきも思いましたけど、聞かされたって一体誰に……」

ガーネットがその質問を投げかけたその時、目の前に扉が現れた。謁見の間の入り口だ。そのせいで、ガーネットの質問はあやふやなまま通路の冷えた空気に溶けていつてしまった。

*

「レティが攫われた！？　それで犯人は見たのか！？」

ルーフアスやアランと何やら話し合いをしていた国王は、二人からの報告を受けて、声を荒げた。

「いいえ……。ですが、僕を『エステル室長の使い』だと呼びに来た男がいました。でも研究室に行ってみたら室長はそんな事は頼んでいないと……」

ガーネットは国王の目の前で、顔を伏せながら伝えるべきことを述べた。その隣で、ゴドウェルトは騎士らしい凜とした佇まいで腕を後ろに回し立っていた。

「そうか……。やはり城に内通者がいたか」

「やはり？　知ってたのですか？　なら、どうして何も言わなかったんですか！？」

「いや、それは……」

「まさか……。お師匠さまをおとりに使ったんですか！？」

ガーネットの頭の中で、全ての出来事がようやく一つの線で結ばれた。

つまり、国王はトゥートリアを攫った犯人をあぶり出す為に、スカーレットを餌にして犯人を泳がせていたのだ。しかし、肝心の犯人を取り逃がしてしまっているのではまるで意味を成していない。ガーネットの瞳に黒い炎が勢いよく燃え上がる。

「もし、お師匠さまに何かあったら……ミディウムレアじゃなくてウェルダンにしてやる」

謁見の間の高い天井に、重低音の殺意が響く。国王はその迫力に思わず奥の齒をカタカタ鳴らした。

「バ……バトラレーゼ！ いざとなったら守ってくれるだろう？」

「……努力はします」

「アラン！」

「そ、そうですね。ミディウムくらいまでに押さえることなら……」

頼りにしていた臣下達の素直すぎる薄情な言葉に、国王は頭を抱えた。

（ああ、レティよ、無事でいてくれ。でないと今晚のメインディッシュは国王のステーキだ）

自分が食卓に並ぶ姿を鮮明に思い描き、国王は唸り声を上げた。嫌だ。嫌過ぎる。

蛇に睨まれた、と言うよりも呑み込まれかけた国王を恐ろしい空想から引き戻したのは低く響くゴドウェルトの声であった。

「陛下、失礼を承知でお聞きいたします」

「あ、ああ。何だ？ オルソン」

国王が名前を知っているということは、ゴドウェルトは騎士としてそれなりの地位を持っているのだろうか。ガーネットは未だ怒りの収まらない目で彼を値踏みするように眺めた。

「何故このような回りくどいことをなされたのですか？ 宮廷の魔道師を使い、王女殿下の居場所を探らなかったのですか？」

「いや、捜したのだが……。全く反応を示さなくてな」

国王は困った顔をしてアランの方に目をやった。

「そうなのですよ。何日もかけて、広範囲を調べたのですが……。反応が弱すぎるようで。私もそういった魔法は専門と言う訳ではありませんし」

「エノワルドとの技術交換会も控えておったから、あまり公にも出来なくてな。このことを知っているのは私とバトラレーゼ候とアランだけだ」

「僕もお師匠さまの位置を探ろうとしたら、妨害にあって……」
「妨害？」

アランは先程から落ち着きなく触っていた髭から手を離し、もふもふな眉を動かしてガーネットの方へ顔を向けた。

「横やりが入った、という事でしょうか」

「え？ ええ。アランさんの時もそうだったのでは？」

「いいえ。私の時は完全に姫様の存在が遮断されている感じで……。もしかすると、それなら場所を探れるかもしれません！」

アランは白くふわふわな眉毛を嬉しそうに上下させ、急いで駆けだした。長い紺色の裾が床を綺麗に掃除していく。

「アランさん！？ どこへ行くんですか？」

「集中して魔法を使いたいの、天文部屋へ！」

そこまで言っただけ、アランは何かに気がついたようにふと足を止めた。アランを追いかけようとしていたガーネットも、走り出していた足に急ブレーキをかける。

「もしかすると……。レティ殿はこの為にわざと捕まったのかもかもしれません」

ぽつりと呟いたアランの言葉に、ガーネットは表情を固くした。スカーレットの性格からして、賊の手に簡単に落ちるなどということとは確かに考えられない。

自分は何をそんなに焦っていたのか。ガーネットは師匠を心配するあまり、彼女の本質さえ忘れていたことを内心恥じた。

少しの間しんとした場で、ルーフアスは大きく頷きながら声をあげた。

「だとしたら、スカーレット様の心使いを無駄には出来ません。团长殿、頼みましたよ。私は城のものに怪しい動きをしたものがないか、見慣れない荷が出ていないかなどを確認します」

「ああ、頼んだぞ、バトラレーゼ候」

「では、自分もお供させて頂きます」

「それは助かるよ、オルソン。まずは表門から行こうか」

アランやルーフアス、ゴドウェルトがバタバタと謁見の間から出ていくのを、ガーネットは黙ったまま眺めていた。そして、国王のほうへ無感情な視線を向けると、再び扉の方へ振り返り、何も言わずこの場を後にした。

スカーレットのことを信じることにした彼の心には、ようやくほ

んの少しの平穩が戻りつつあった。

第24話

＊

確実に朝の香りに近づきつつある深夜、庭に面する外の回廊の長椅子でうたた寝をしていたガーネットは肩を叩かれ、目を開けた。彼を起こした人物であるアランの後ろには、ルーファスと、ゴドウエルトがいた。

勤務外時間だからか、ゴドウエルトは普段着である苔色の上着と枯れ草色のスラックスといった軽装に着替えていた。ガーネットは少し回り始めた頭で、「ああ、ゴドウエルトはいつものストーカールックに着替えたのか」などと本人に聞かれたらどつかれそうな事を考えていた。しかし、完全に頭がはつきりしてくると、ガーネットはアランに飛び付かん勢いで立ち上がった。

「居場所がつかめたんですか!？」

「今現在の居場所までは分からないのですが、ここを通ったのは確かなようです」

アランは椅子に大きな地図を広げ、そのある一点を指差しながら首を傾げた。どうやらそれ以上のことは分からなかったらしい。

ルーファスも地図を覗きこみながら、口元を手で押さえ考え込み、聞き込みで得た情報をぼつりと呟く。

「城からは王室抱えの行商の荷馬車以外は出ていないと。しかし、確認したところ、今日荷物ので出入りは無いはずだと」

「じゃあその荷馬車でお師匠さまが？」

「おそらくは……」

「荷馬車移動という事は、実行犯は魔法使いで無い可能性が高そう

だな……。お前が言っていた宮廷魔道師も偽物だろう」
「けれど、探索魔法は妨害されているんですよ、実際」

ゴドウェルトの推理に、ガーネットは反対意見を提示する。ただ単に、すかした態度が気に食わなかったのもあるが。

「おそらく妨害をしているのは別の人間でしょうね。でなければ、顔を見たガーネット殿を放っておく訳がありませんから。それに、前に言ったように宮廷魔道師は身元が保証されたものしかいませんしね」

「確かに……」

アランの説明にガーネットはようやく首を縦に振る。そして、ゴドウェルトの表情を盗み見たが、彼は相変わらず仏頂面を維持していた。

（魔法で捜せない……魔力を遮断？　もしかして『あの場所』か？）

ガーネットは顎に手をやりながら、記憶の引き出しから何かを探し出そうとしていた。考えを巡らせながら、様々な言葉を自身にか聞き取れないほどぐぐもった声で転がす。やがて顔をあげると、突然地図を掴み取って、紙面の目を走らせた。

「僕の記憶が正しければ、お師匠さまはここにいる可能性が高いと思います」

ガーネットは地図のある場所に爪を立て、印をつける。

「分かったのはいいが……何故そこだと？」

「説明は後です。とにかく一刻も早くここに向かいましょう」

「待つて下さい、まだ夜が明けるには時間がかかります。出立は朝を待つては……」

ルーファスの心配そうな顔を一睨みすると、ガーネットは彼を馬鹿にするようにフツと笑った。エメラルドの瞳を煌めかせた彼の顔は自身に充ち溢れていた。

「あなたは馬鹿ですか？ 箒を飛ばせばそこに着く頃には青空が広がってますよ。それに、夜は魔法使いの本領発揮の時間帯ですから」

ガーネットがそう言いきると、アランやゴドウェルトも少し笑いを口に浮かべ頷いた。

魔法使いとは、月明かりしかない漆黒の空を支配し続けてきた、夜の支配者なのだ。

「では早く参りましょうか」

「いえ、アラン殿は城で待機願います。そのお歳で箒の長時間移動はお体に負担がかかりますので」

「しかし……」

「待機願います」

「はい……」

ゴドウェルトの絶対に頑として譲らない態度に、アランは彼の意見を受け入れる他なかった。どこまでも固い頭の人間を論破するには労力と時間が必要だが、今はそんな場合ではない。

「あなた、箒乗れるんですか？」

「その程度、訳無い。バトラレーゼ候は俺の後ろに乘せていく。それでよろしいでしょうか？」

「ああ、頼む」

「え、この人も連れて行くんですか？」

ガーネットは「役に立たなさそう」と言う視線でルーファスを見る。

「魔法は使えませんが、私は元は騎士団の人間ですから。まあ、城勤めではありませんでしたが」

「まあ、今から行くところは、物理攻撃に強い人がいた方がいいですし……。僕が後ろに乗せる訳でもないですしね。好きにして下さい」

どうしても良さげに手をひらひら振るガーネット。自分の力しか信じるものは無いと言いたげな態度である。

やれやれとルーファスが口元の髭を指でなぞっていると、突然聞き覚えのある声が耳に響く。

「私にも行かせてもらえませんか」

声と共に柱の傍で、一つの影が伸びた。その影に続いて姿を現したのは、闇に溶けそうな黒い服に青のマントを羽織ったジゼーラルであった。

「ジ……ジゼーラル殿下！ 何故このようなところに！？」

「すみません、立ち聞きする気はなかったのですが……。その、目が覚めて、護衛の方も気持ち良さそうに寝ていたので、その間に少し散歩でもと……」

本当は、ルーファスやゴドウェルトが何やら慌ただしくしているのが窓から見えた為、気になって抜け出して来たのだ。

警備が厳しくなったとはいえ、今日一日スカーレットと全く会っ

ていないことも気にかかっていたので、尚更彼らの行動が気になったのだ。

今までのジゼーラルであつたら、護衛の目を盗んで部屋を出るなどあり得ない行動であつた。

「それで偶然ここに居合わせて、盗み聞きですか？」

「ガ、ガーネット殿！」

「ルーファスさんは少し黙っていて下さい！ 元はと言えば、こいつのせいで……エノワルド王子との見合いが原因なのでしょう！？ 今回のことは！」

「そ……それは何とも言えないのですが。恐らくは……そうかと」

声が小さくしながら、ルーファスは顔を伏せた。

ガーネットはジゼーラルの顔を一切見ようともしないまま、この場を去ろうと地図を丸め踵を返した。

そんなガーネットの態度にルーファスやアランがハラハラしているたが、ジゼーラルの瞳は怯んでなどはいなかった。

「それなら尚のこと！ 私にも責任の一端があるのなら、是が非でも同行させて頂きます！ 私のせいでレティが危険な目に合っているのに、何もしないで待つてなどいられません」

強く握りしめた手が熱い。血が体の中を駆けまわっているようだ。ジゼーラルは自分の出した大声に、自分自身でも驚いたらしく、品の良い唇を少し開けて戸惑った顔をした。

しかし、すぐにまた表情を整えると澄みきった青でガーネットの背中を見つめた。

「それに、なにより、私は……少しでも彼女の力になりたいんです」

透き通るような真っ直ぐな声。それはジゼルの心を表しているかのようだった。

ガーネットは小さくため息を漏らし、ちらり振りかえるとジゼルと視線を交わした。

「どうせ付いて来るなと言っても付いて来るのでしょうか？」

「え……あ……はい！」

ジゼーラルはその言葉で顔に明かりを灯した。

一方、そんなことを言いつつも、どさくさ紛れに闇に葬ってやるうか、なんてことを半ば本気で考えている、どこまでも外道なガーネットであった。

第25話

*

壁の窪みに据えられた燭台の光がぼんやりと灯った石造りの部屋に、ぐったりとしたスカーレットを担いだ男が入ってきた。大柄でジャガイモのような素朴な顔をしたその男は、偽宮廷魔道師の相棒で、スカーレットを薬で眠らせた張本人である。

スカーレットが運ばれて来たその場所は、部屋と言うよりは広間という表現が正しいと思えるような広い場所であった。しかし、横の広さとは対照的に天井は低く、どうやら地面の下に作られた空間の様である。

男は入り口の近くにスカーレットをゆっくり降ろすと、その部屋の先客に声をかけた。

「ほら、妹姫を連れてきてやったぜ。せいぜい仲良くするんだな」

男はそう言い、くつくつと笑うと、重たい石の扉を開き部屋を去って行った。先程男に声を掛けられた少女は男がいなくなるなり、スカーレットに駆け寄り、彼女の顔を心配そうに覗く。そのすぐ後ろでは頼りなさそうな顔をした青年がおろおろと様子を窺っていた。男の足音が遠くなり、やがて聞こえなくなると、スカーレットはむくりと起き上がった。

「まったく、もう少し丁寧に運べないものかしら。私を荷物と勘違いしているんじゃないの。荷馬車の運転も乱暴だったし」

突然スカーレットが起き上がったからか、少女はプラチナブロードの髪をふわりと揺らし、反射的に身を引いた。

「あなたは何者ですの？ 先程の輩が、私の妹などと言っていましたか」

少し身構えた少女は、スカーレットの顔を凝視しながら、思慮深くそう尋ねた。しかし、スカーレットはそんな彼女の様子とは打って変わって、パツと明るい表情になり、彼女に顔を近づけた。

「驚いた！ ミシエの生き写しだわ。綺麗に成長したわね、トゥートリア」

全く見ず知らずの少女にいきなり自分の名前を呼ばれ、トゥートリアは美しく整った顔を微かに崩した。

「どうして私の名前を……。それにミシエとは、ミシエーラお母様のことを知っておられるのですか？」

「もちろん、知っているわ、あなたのお母様のこともあなたのことも。あなたが赤ん坊の頃に会ったことがあるのだけど……。まあ、覚えていないわけないわよね」

「私が赤子の頃？」

トゥートリアは不思議そうに眉根を寄せた。しかし、それも仕方がないことである。自分より年下にしか見えない少女にそんなことを言われて、訝しがない人間はいないだろう。

「ああ、自己紹介がまだだったわね。ごめんなさい、つい懐かしくて。私の名前はスカーレット、魔法使いよ」

その名前に、トゥートリアの記憶が微かに刺激される。

「スカーレット……さん？ あ……もしかして、お父様の教育係をなさっていた『生ける魔法史』と呼ばれる？」

「ええ、分かってもらえて良かったわ」

「まあ！ 私、一度お会いしてみたかったの。お母様とあのどうしようも無いお父様を結ばせるなんて、何てやり手のキューピットなのかしらって思っていましたのよ」

「そ、そう……」

口元で手を合わせて嬉しそうに微笑む少女の口から出たとは思えない、情け容赦ない無い言葉にスカーレットはほんの少し目元を引きつらせた。

娘にまでこんな風に思われてる国王が少し不憫にも思えたが、結局自業自得だと言う結論にたどり着き、スカーレットは深く頷いた。

「ほら、ハワード。いつまでもそんな所にいないで、スカーレットさんに挨拶なさい。まったくもう、姫の後ろに隠れる護衛なんてどこの国搜しても貴方だけですわよ」

「申し訳ありません……姫様」

そう言いながら、トゥートリアの後ろから現れたのは、金髪金眼の美青年であった。ハワードは、薄紫のマントを引きずりながら、膝立ちのままこちらへにじり寄って来た。

「ああ、あなたが『顔だけ騎士さん』ね」

「まあ、ぴったりなあだ名ですわね。誰にお聞きになりましたの？」

おかしそくに笑うトゥートリアの横で、ハワードは大きなため息をつく。

「私もそれなりに努力しているつもりなのですが。そもそも姫様の

専属護衛など私の身には余るのですよ」

「仕方が無いわ。いくら実力が無くても、あなたはスイートピアでも有数の名家の出で、その上私の幼馴染なんですもの」

「しかし、今回の様な事態がまた起きたらと思うと……。正直、私一人で姫様を守りきれる自信がありません」

ハワードはその端正な顔立ちからは想像出来ない程情けない声を出して、がっくりとうな垂れた。

「城の噂では、トウートリアとハワードが駆け落ちした、なんて言う話もあったけれど、そんな行動力は無さそうね」

「まあ、そんな噂が？　あり得ませんわ、私がこのようなへたれた騎士と駆け落ちだなんて」

「ヘタレ……って姫様。そんな、本人の目の前でひどくないですか！？」

「けれど、本当のことですもの。でも大丈夫よ、ハワード。あなたにはその整った顔があるのだから、将来はそれを活かして食べていけばいいわ。上流階級令嬢の入り婿とか、未亡人の愛人とか、お金持ちの隠居の男妾とか」

「どうして全部食べさせてもらう側なんですか！？　しかも後半ひどすぎませんか？　私はこれでも候爵家子息ですよ！？」

必死に反論するハワードを楽しそうに眺めるトウートリア。そんな二人の関係を見て、スカーレットはハワードがトウートリアの護衛に抜擢された他の理由を察した。

つまりは体の良い、暇つぶし相手なのだろう。

「でもまあ、駆け落ちでないとすれば、ここにいるのは私と同じ理由かしら？」

「ええ、私達、何者かにここへ拉致監禁されていますの。食事や毛

布などの生活に必要なものは十分に与えられていますから、今のところ殺すつもりはないのでしょうが……。すぐに逃げ出そうと思っただけですけど、何だか魔法が上手く作動しなくて」

「それは仕方がないわ。ここはそういう場所なんですもの」

「そういう場所？ どういう事ですか？ それに……。どうしてスカーレットさんがここに連れ去られて来たのかもまだ聞いていませんわ」

トウートリアのもつともな意見に、スカーレットは国王からの副業姫依頼から始まった今回の事件について一通り話して聞かせることにした。

「まあ、そんな事が……。それにしてもお父様ったら、本当に考え無しなのだから。スカーレットさんまで捕まってしまうて……。これでは余計事態が悪化しただけですわ」

トウートリアは少し汚れた白のドレスを両手で握りしめ、沈痛な面持ちとなった。しかし、スカーレットはそんな事は何でも無いといったような顔をして、トウートリアの片手を握った。

「あなたがそんな事を心配する必要は無いのよ。私が自分で選んだ事なのだから。それに、私はわざと奴等に捕まったのよ。気絶するふりをしていたの」

（まあ、あまりに移動時間が長いから少しうとうとしていただけれど）

誘拐されてうとうと出来るとは、本当に度胸が据わっている。これも年の功か。

「わざと？ それはどうして……」

「さっき言ったでしょう？ 『魔法が上手く発動しない』 って。それはこの場所に原因があるの。ここはね 『神に祝福を約束されし地』 と言って、魔法力を抑制する働きのある土地なの」

「その様な土地が本当に存在しますの？」

「ええ、実際ここにあるでしょう？ この土地は 『神が羽を休める為に創りし、争いを遠ざける憩いの場』 とか言われてるけれど、本当は只の古代魔法遺跡なのよ。まあ、珍しい土地だし、下手に荒らされりすると大変だから、最近では一握りの人間にしか伝えられていないのだけど」

十年前の事も昨日のことに様に話すスカーレットの『最近』はあまりあてにならないのだが、この場所を知っている人間が今現在ごく少数なことは確かだろう。

「古代遺跡……。だからここも祭壇の様なものがありますのね。教会の様な施設だったのでしょうか？」

「そうかもしれないわね。魔法力を抑制する力を持つ古代魔法遺跡の数は、国内国外に大小ある古代遺跡の中でも少数なのだけれど、それでも結構な数があるの。だから、私が攫われた方がてっとり早く場所を特定出来ると思ってね」

「ですけど……。一体ここからどうやって逃げ出しますの？ 魔法が使えないのでは、いくらスカーレットさんでもどうすることも出来ないのでは……」

「まあ、魔法は使えなくても、経験豊富な年寄りが一人いた方が心強いでしょう？ それに、上手くいったら、城の魔法使いに場所を特定してもらえるかもしれないの。移動中は妨害をしたとしても完全には存在を遮断できないから」

「そうだと良いのですけれど」

スカーレットはおそらく、ガーネットかアランが搜索魔法を使うだろうと踏んでいた。だが、それはあくまで保険であり、そこまで頼りにしている訳ではない。いざという時は自分でどうにか出来なければ、こんな危険な事はするはずがない。

「今回の主犯格とも上手くいったら話し合いで解決出来るかもしれないし」

「主犯……。スカーレットさんは今回、事を起こした者を知っていますの？」

「私の考えが正しければ……。ね。まあ、今日はもう遅いし、少し休みましょう」

「あら、今は夜ですの？　ずっとここに閉じ込められていますから、時間の感覚がなくなってしまうて」

トウトリアはそう言い、困った顔で微笑んだ。しかし、ウトウトし始めたハワードを見て、その笑顔は黒いものへと変化していく。

「お子様は体内時計が完璧のようですね。お陰で時計いらずですわ」

「護衛と言うより、歩く懐中時計ね」

「まあ、お上手ですわ」

傍から見ると、愛らしい少女達の楽しげな談笑だが、話の内容は刺だらけの辛辣なものであった。

女と言うものは顔と台詞が合わない生き物である。半覚醒状態のハワードは二人を眺めながら背筋に寒気を感じていた。

*

毛布に包まりながら、浅い眠りについていたスカーレットは微か

に聞こえる足音で目を覚ました。身を起こしながら、隣にいるトゥートリアやハワードを揺り起した。

「スカーレット……さん？」

「誰か来るわ」

「その様ですわね。もしかしたら、朝食を運びに来たのかもしれないわ」

「それにしても、足音が多くないかしら」

「確かに……。いつもは二人くらいですから、この音は多すぎますわね」

やがて、足音が止むと黒い装束を身に付けた人物と共に、数十人の武器を下げた男達が部屋へと入ってきた。その中には、宮廷魔道師に変装してスカーレットに近づいた男の姿もあった。

「これからあなた達を城に帰します」

偽宮廷魔道師の男が言ったその一言に、スカーレットやトゥートリアは目を丸くした。

「何か裏があるのでしょう？ 攫っておいで簡単に帰すだなんて自殺行為だわ」

「裏なんてありませんよ。私共は貴女方を害すつもりは毛頭ないのですから」

「誘拐犯の言葉とは思えないわね」

「目的はほぼ達せられました。貴女方をこれ以上拘束する理由はありません。まあ、帰す前に記憶を少しいじらせてもらいますけどね」

平然と言い放たれたその言葉に、トゥートリアは瞬時、言葉を失った。

「あなた達、何を言っているのか分かっていきますの！？ 記憶操作は違法ですよ！」

「それにあればリスクの大きい、難しい魔法だわ」

男の信じられない発言に対し、トウートリアもスカーレットも吠えついた。副作用で何が起きるか分からないと言うのに、冗談では無い。

「安心して下さい。ここにおられる方は偉大な魔法使い様でしてね。今回のことを綺麗さっぱり忘れさせて下さいますから」

男がそう言い見つめた先には、黒装束を纏った中心人物らしき者の姿があった。部屋が暗いせいと、フードを深くかぶってしまっている為、顔はおるか性別も分からない。そんな良く分からない人間を「偉大な魔法使い」と言われても三人共信用できる訳がなかった。だが、スカーレットはその怪しい人物をじつくりと眺めてから、静かに目を閉じた。そして、瞼を開けると、確信に満ちた瞳で口を開いた。

「やっぱり、あなたが黒幕だったのね」

その言葉に、辺りは一瞬にして静寂に呑み込まれた。音を失ったその空間に、スカーレットの高く透き通る声だけが響き、円を描くように広がる。

「エステル室長。いいえ、国賊エステル・メイシー」

第26話

＊

「ここが『神に祝福を約束されし地』、ですか……」

ジゼーラルはそう呟き、眼下に広がる景色を眺める。彼らが目的地の頭上にやって来たのは、宣言通りに、日が昇り辺りが明るくなった時間帯であった。黒の世界はいまやすっかり青の世界にその座を明け渡していた。

大きくした黒い羽根ペンに跨って浮いていたジゼーラルをガーネットは横目で一瞥だけする。自分達は普通の竹箒なのに一人だけ格好付けて、と言うのがガーネットの心情であった。

そんなことを気にしている場合ではないと言うのに、ガーネットはジゼーラルの一挙一動を完全にライバルの眼で見ている。

「僕も来たのは初めてですけどね。アランさんが突き止めた場所や移動手段から考えて、この場所で間違いないと思います」

ガーネットは箒に乗りながら殺風景な乾いた大地を見渡し、目を細める。この広い地のどこにスカーレットがいるのかまでは皆目見当がつかなかった。

『神に祝福を約束されし地』が古代魔法遺跡だと言うことは分かっているのだが、それがどういった姿をした遺跡なのかまではガーネットにも理解が出来ていない。良く分からない場所で、しかも犯人がいる可能性が高いというのに、しらみつぶしにスカーレットを捜すのは危険だ。

だからと言って、このまま空に漂っていてはここに来た意味がない。

「とりあえず、下に降りましょう。上から見たところ、変わったところもないみたいです」

遺跡の影響を受けているのか、簾が不安定に揺れてきたことも考慮して、ガーネットはそう提案をした。

「そうだな。バトラレーゼ候もこのまま簾の上は辛そうだしな」

初めて乗る簾の不安定さにすっかり気分を悪くしてしまったルーファスは、ゴドウェルトの後ろで青い顔をして伸びていた。

それを見たガーネットは当然のように、

（ちっ役立たずが！）

と心の中で毒づいた。

下へ降りると、ふわりと乾いた土の匂いがした。砂埃が足元に纏わりつく。遺跡の影響を受けているのか、簾は元の小さい姿へと形を戻ってしまった。各々は、それを懐へとしまい込む。

「どうやら、地面に近い程遺跡の力が強くなっているようですね。もしかしてこの地下に遺跡の本体が？」

ガーネットは眉根を寄せ、自身の足元を眺めた。

「大丈夫ですか？ バトラレーゼ候」

「ああ、すまない。簾というのは思ったよりも酔うものなのだな」

ルーファスは地によやく足を付けることができたことにホッと胸をなでおろす。

「本当に殺風景ですね……。先に何も見えないのを踏まえると、確かに遺跡の本拠地は地下にある可能性が高いですね」

ガーネットの意見に賛同しながら、ジゼルは舞い上がる砂から喉を守る為、白い手袋をはめた手で口元を覆った。

「地下ならどこかに入口が……」

そこまで言つて、ゴドウェルトはハツとしたように動きを止めた。そして、剣の柄に手をかけ、勢い良く振り向く。そこには今にもゴドウェルトに殴りかかろうと、鉄の棒を振りかざした男の姿があった。

後ろから突然襲い掛かって来た男を、ゴドウェルトはとつさに鞘に収めたままの剣で突く。腹に重い一撃を食らったその男は空気の抜けたようなうめき声をあげた後、気を失ってその場に倒れ込んだ。いつの間にかガーネット達を囲むように、数えきれないほどの男達が湧いて出て来た。型の古い衣服を身に纏ったその男達は、暗めの茶髪に黒の瞳のものが多く、皆似たような容姿である。おそらくは同じ血筋に連なる一族なのだろう。

彼らの多くはそれぞれ武器を手に、距離をおいたところからガーネット達を取り囲み、様子を窺っているようだった。

「遺跡の守り人……といったところでしょうか」

「その可能性は大いにありえるな」

伸びた男に再び目をやってから、ゴドウェルトは正面を向き剣を鞘からそつと滑らせる。ジゼーラルやルーファスも剣の柄に手をやり、緊張した面持ちで彼らを睨みつける。

ルーファスは抑えた声でガーネットに確認の問いかけをした。

「敵……なのでしょうか？」

「十中八九、間違いないですね、タイミングが良すぎる。それに、僕をおびき出したあの男もこいつらと同じような容姿でしたから」

「その輩はここにいますか？」

「ここにはいないようですね……」

ガーネットは目だけを動かし辺りを確認し、そう判断をした。

「襲いかかって来る気はなさそうだな……」

「そりゃあ、さっきあなたが一人ぶっ飛ばした後ですからね。手加減なしの冷酷野郎に突っ込んでいく程、あいつらも馬鹿では無いんでしょう」

「手加減はした。だから死んでないだろ」

殺さなければ手加減したことになるのか。

ゴドウェルトの大雑把な思考回路にルーファスやジゼーラルはやや苦笑いをする。しかし、ガーネットだけは何故か納得したような表情をしていた。敵には容赦は無用、という点ではこの二人の考えは一致しているらしい。

「このまま睨みあつていても埒が明かない。どうするか……」

「この人達は恐らく、時間を稼ごうとしているのでしょうか……。この人数に対してだと、こちらから動くのは得策では無いかと……。魔法も使えないことですし……」

「時間を稼ぐ必要があると言うことは、この先におし……姫さまがいるという事です。うじうじと空論だけを巡らすくらいなら、最初から付いて来ないで下さい」

慎重すぎるジゼーラルの言動が癪に障ったのか、ガーネットの声

は語気を強めていた。

本当にどこまでも気に食わない奴だ。

「生憎、僕はあなたと違い気が短いんです。待ってなどいられませんよ」

「だが、ジゼーラル様の意見も一理ある。魔法が使えないのでは、味方の少ないこちらが不利だ」

一人でも突っ込みかねないガーネットに、ゴドウエルトは釘を刺す。しかし、ガーネットはそんなことは何でも無い様な顔をしてみせた。

「確かに、この地は魔力を極端に弱めます。でも、抜け道が無いわけではないんです」

「どういう事だ？」

「規格外に強い魔力を持つ人間の攻撃魔法や、特殊な魔法までは抑えきれないんですよ」

それを聞いたルーファスはポンと手を打って、大きく頷いた。

「そうか、ガーネット殿は規格外の魔力を！」

「そんな人間ほぼいません。ですが……特殊な魔法は知っているんですよ」

そう言い、ガーネットは不敵にほくそ笑む。そしてすぐに表情を引き締めると、守り人の男達に向かって大声を張り上げた。

「これは警告です。ただちに道を開けて下さい。さもないと実力行使をとらせてもらいます」

男達は一瞬たじろいだが、すぐに体勢を元の構えに戻し、ガーネット達を睨みつけた。

交渉に応じるつもりは毛頭ないらしい。

ガーネットはわざとらしくため息をつき、気持ちが全く入っていない声で話し始めた。

「あくまでも僕の前に立ちはだかると言うんですね……。普段はお師匠さまの許可が無いといけないのですが、緊急事態ですから特別にお相手しましょう」

風が吹き、雲が不気味に走り始める。ガーネットはいままで抑えていた鬱憤を晴らそうとしていることが手に取るように分かるほど、恐ろしい表情を見せる。

「いや……蹴散らしてやるっ」

前にも同じような顔を見たことがあるルーファスの背中に氷が張ったような寒気が走る。

そんな彼のことなど気にする様子もなく、ガーネットは地面に向かって手をかざし、小さく息を吐く。

「東の魔女は灯を燈す、西の魔女を黒く染め上げ、南の魔女が髪をなびかす、北の魔女の氷の微笑み」

ガーネットが瞳を閉じ、紡ぎ始めた不思議な言葉はエノワルドのものであった。

郷に行つては郷に従えの理論で、ジゼーラルはスイートピアではスイートピア語を話していたが普段使っているのは自国の言葉である。だからこそ、彼はこの『違和感』にすぐに気が付いた。

（エノワルド語……？ これは詠唱魔法ではないのか？）

スイートピアでも、エノワルドでも、詠唱魔法は音で覚えて唱えるものであり基本的に言語の意味を持たない。しかし、ガーネットの唱えた呪文はエノワルド語ではつきりと「言葉」としての存在を確立させていた。

「囲むは円、突き刺すは線、思い描くは月の吐息」

ガーネットの遠くまで響く声と共に、彼を軸として光りの線が目には見えない早さで駆けて行く。光は守り人である男達の足元にも手を伸ばし、やがてそれは巨大な魔法陣を形作った。

ガーネットはゆっくりと目を開け、大きく息を吸い込んだ。輝く魔法陣の中心で、姿を現した二つの緑がひと際神秘的に煌めく。

「大地よ夢見よ女神の足跡^{そくせき}！」

その大きな掛け声を合図に、魔法陣は青白い光を発し土埃を巻き起こす。やがてそれは天へ吹き上がる風へ姿を変え、男達を容赦なく遠くへと吹き飛ばした。勢いのついた風はそれだけでは物足りないかのように、空に漂っていた雲を全て消し去り、完全な青だけのキャンパスを作り上げた。

遙か彼方へと旅立たせられた男共を満足げな表情で見送ると、ガーネットは手で空を切り、魔法陣を空気に溶かすように消し去った。一部始終を近くで見ていたジゼーラルは小さく口を開けたまま、呆然とした表情をしていた。

「これは……古代詠唱魔法陣！？」

古代魔法を後世へと伝える為に、往年の魔法使い達は言葉の中に

呪文を隠し入れた。その呪文により姿を現すのが、光で描かれる自然の力を利用した魔法陣である。今ではその存在は薄れてしまい、使うものはおろか知る者さえ少ない。

「ジゼーラル殿下はあの魔法をご存じで？」

魔法に疎いルーファスは、目の前の出来事に驚きはしたが、これが凄いのか普通なのかの判断も付かないらしく、ジゼーラルに向かってそう問いかけをした。

「え、ええ。確か、エノワールド城内図書館の貸し出し禁止図書で読んだ事が……しかし實在に使うのを見るのは初めてです」
「目には目を、歯には歯を、古代魔法遺跡には古代魔法を、と言ったところか」

ゴドウェルトは感心した様子で、ガーネットの魔法を眺めていた。どうやら少しは見直したらしい。

そんな二人をよそに、ジゼーラルだけが驚きの中にも釈然としないう思いを抱え、複雑な顔をしていた。

「しかし……何故ガーネット殿がその魔法を？ 彼は一体……」

エノワールドでさえ、一握りの者しか知らない、知ることの出来ない魔法。それをどうしてスイートピアの一介の魔法使いでしかないガーネットが知っているのか。

頭の中に様々な考えが浮かんでくるが、結局納得出来る答えが見つからず、ジゼーラルはため息を落とし、遠くの空へと視線を移した。

その時、ジゼーラルの眼に空の青と共に信じられない光景が映り込んだ。彼は言葉も、瞬きの仕方さえも忘れて、『それ』を瞳で捕

らえ続けた。

第27話

*

スカーレットに名を呼ばれ、正体を明かされたエステルは頭のフ
ードをそつと後ろへと落とす。暗い部屋で、彼女の緋色に近い瞳が
不敵に微笑む。

トゥートリアは身内の裏切りに表情を険しくしながら、胸の前で
手を強く握りしめた。

「そつ、私が今回の騒動の主犯。でも国賊とは心外ね。私はこの国
のこと何より大切に思っているから、守りたいからこそ行動したと
言うのに」

「その言葉は……まあ嘘では無いのでしょうね。だからこそ、あな
たが犯人だと分かったのだから」

表情はもちろん、口調までも威圧的なものへと変貌したエステル
から、スカーレットは一切目を逸らさなかった。それは真つ直ぐな
のにどこか遠くからこの状況を眺めているような、どこか冷めた瞳
だった。

「あら、興味深い話ね。聞かせてもらおうかしら」

「まず、トゥートリア王女の誘拐。これは内部の手引きが無い限り
まず無理だね。そして二つ目、あの爆破事件はスイートピアの魔法
技術でエノワルドの王子を害そうとしていた。これは自国の技術で
エノワルドの人間を嘲笑うことが目的のような犯行だね。しかも、
あなたは誇りを何より尊ぶ、魔法使いの旧家メイシー家の人間。柔
らかそうな物腰で誤魔化してるけど、旧式の制服を愛用しているト
コといい、熱心に自国魔術の誇りを語るトコといい、頭が固いつて

「というのがバレバレだわ」

スカーレットの口から滑らかに流れる推論に、エステルはほんの少し顔を歪めた。しかし、すぐにその口元には笑みが戻り、エステルは乾いた音で拍手をしてみせた。

「お見事、としか言いようがないわ。あなたをただの田舎でのお譲さんだと思っていた私の誤算かしら」

「人は見かけ通りではないものよ。私も、そしてあなたもね」

冷やかな視線をスカーレットに送られても、エステルの微笑が崩れることは無かった。

「『目的は達した』、そう言ったわよね？ それはエノワールド縁談が破談になったということかしら？」

「ええ、そのよ。あんな事件があつたのだから、このまま城に留まるはずないもの。今日には帰国する予定で、今回の話はなかったことにする、と。残念だったわね、とても素敵な好青年だったのに」

「元凶であるくせに、よく言うわ。そんなに他国の王子がスイートピアの王族に加わるのが嫌なの？ いえ……違うわね、あなたはエノワルドの魔法技術がこの国の魔法に干渉すること自体が気に食わないのでしょう」

「ええ、ここにいて、古代魔法遺跡の守り人である彼らもそれは同じ考えよ」

エステルはそう言いながら、彼らを見渡した。男達はその言葉を肯定するかのように各々小さく頷く。

「懐古主義って奴かしら？ 紙きれに記された伝統なんて不確かなものにしがみ付いて……可哀想な人達ね。昔の事なんか、段々忘れ

去られていくものだと言うのに……」

その言葉を聞いた途端、エステルは眉間にしわを寄せ、表情を硬くした。彼女の心の奥で、彼女の自我を支える思いが燃えたぎる。そんなエステルの様子は、スカーレットはおるかトウートリアやハワードから見ても余裕の無いものに見えた。

「偉大なるトワール・ノディエを育んだこの国に、他国の魔法文化を持ち込むなんて冗談にも程があるわ。この国の素晴らしい魔法文化に不純物なんて一切不要なの！ 誰かが守らなくてはいけないのよ」

——私はこの国も魔法を守る為なら、自分を犠牲にすることは厭わない。私が一番、この国のことを考えてる。

エステルの瞳には、いまやスカーレットなどは映っていないかった。華々しい自国の魔法の歴史。彼女が、彼女の祖先が守ってきた国の誇り。それらが、眩い光の様にただ通り過ぎて行く。

だが、エステルのさも自分が正しいと言ったような、自信過剰な言い様にスカーレットは嘲笑を隠しえなかった。エステルにとって、トワール・ノディエは人間では無く、偶像なのだ。

「何がおかしいというの？」

「何か自国の魔法文化よ。この国の魔法を作り上げてきたのが自国の魔法使いだけだとも思っているの？」

「そうね、今は確かにそれなりに濁りがあるけれど、少なくともトワール・ノディエの時代は……」

「トワール・ノディエ、トワール・ノディエって、あなたは一体この魔法使いの何を知っていると言うの？」

「知っているわ！ この国の誰よりも、私はこの方のことについて勉強したのだから」

感情に任せた大声が暗い地下に木霊する。
スカーレットはそんなエステルをたしなめるような口調で、言葉を続けた。

「じゃあ、トワール・ノディエがエノワルドの出身だと言う事は？
知っていた？」

「な……！ 何をふざけたことを！」

頭には血が昇り、顔が熱さで赤く染まる。

エステルはスカーレットの言葉を侮辱としてしか捉えられずに、怒りで小刻みに震えていた。王立図書館の様にいつも美しく整理された、彼女の思考回路は加熱してしまい制御不能となっていた。もはや冷静な判断など、今の彼女には無理な話である。

「災いよ…… あなたはこの国を狂わす厄災そのものだわ！」

エステルは隣にいた守り人の男に視線を送ってから、スカーレットを指差した。

「あの小娘を始末なさい！ あれはこの国を脅かす、不浄な者よ！」
「あなたなんかに小娘呼ばわりされたくはないわ。全く…… あなたはもう少し冷静な判断の出来る人間だと思っていたのだけど」

三百十七歳のスカーレットからしたら、エステルなんてまだ赤子同然である。

小さくため息をつきながら、スカーレットは目の前にいる、剣の柄に手をかけた男に目をやった。

どうやら本気で斬りかかって来るつもりらしい。

男はスカーレットの恐れを感じていないかのような真っ直ぐな瞳

に、気味の悪さを覚え剣を抜く動作を鈍らせる。しかし、エステル
の苛立つた様子を背中に感じ、仕方なしにゆっくりと剣を鞘から放
った。

「お止めなさい！ 彼女に手出しはこの私が許しませんわよ！」

スカーレットから少し離れていたところにいたトゥートリアは、
今にも男に飛び付かんばかりの勢いで声を張り上げた。

しかし、彼女の制止の言葉は虚しく空気に溶け、男はスカーレ
ットの頭上めがけて勢いよく剣を振りおろす。

ハワードはその惨状を見せまいと、とっさにトゥートリアを抱き
よせた。どうして、こんなことに、トゥートリアはスカーレットの
死を覚悟し、形の良い唇を噛み締めた。

剣がうす暗い部屋の中、冷たくきらめく。

スカーレットはその瞳に、その残酷な刃を映し、ゆっくりと瞼を
閉じた。

赤い血が、堰を切ったかのように溢れだす。まるでそれは台風の
日に決壊した川のように、とめどなく吹き出した。

しかし、それはスカーレットの血ではなかった。

男の振りおろした剣が届くか届かないかの瀬戸際の時、突然スカ
ーレットを軸にして、目が潰れそうな程眩い光の柱が天を突く勢い
で現れたのだった。地下天井が光に裂かれ、スカーレットの頭上
には丸い青空と心地よい風が舞い降りてきていた。

剣を振りおろした筈だった男は自分の手元を恐る恐る見下ろした。
そこには、剣はおろか先ほどまで確かにあった右手までもが形を無
くしていた。男の傷みを超越した、恐怖と戸惑いの悲鳴が澄んだ空
へと吸い込まれて行く。

ワンピースに縫い付けられていたレースをはぎ取り、スカーレ
ットは男の腕にそれをきつく巻きつけた。応急処置でしかないが、何
もしないよりはましだろう。

処置が終わると、未だ状況が飲み込めていないらしいエステルの方にようやく視線をやった。

「私はね不器用な上、魔力が強大すぎて上手くコントロールが出来ないのよ。だから単純な攻撃魔法しか使えないし、威力も思ったように手加減できない」

「あなた一体……」

エステルの顔から表情がみるみる内に消え失せた。トゥートリアやハワードも、スカーレットが無事だったという安堵よりも驚きの方が大きかったのか目を何度も瞬かせた。

「言ったわよね、昔のことなんて段々忘れ去られていくものだって私の名前もその一つなのよ」

スカーレットは天井に開いた穴から新鮮な空気を取り入れるかのように、大きく息を吸いこんだ。

そして、一点の曇りもない青でエステルを見据え、落ち着き払った声で彼女に真実を告げる。

「スカーレット・トワール・ノディエ。これが私のフルネームよ」

一点の静かな光が降り注ぐ中、世界最高の魔法使いは朗らかに微笑んだ。

スカーレットの口から、信じられない事実を告げられたエステルは、目を見開いたまま、その場に座り込んだ。

第27話（後書き）

人物紹介の一番下にキャラ身長比較図アップしました！

第28話

*

「本当に、本当に心配したんですからね！」

誘拐事件が解決してから、スカーレットはガーネットによって同じ台詞を何度も聞かされていた。スカーレットから故意に捕まった事実を知らされたガーネットは、自分に何も言わずに行動したことに大いに腹を立てていた。

あの日、スカーレットの放った光により、ガーネット達は彼女達の囚われていた地下遺跡をさがしあてることが出来た。彼らが大きく開いた穴から覗いた先には、すっかり気の抜けたエステルが座り込んでいた。スカーレットの衝撃の告白により、目的を見失ったエステルはもちろん、守り人である男達も彼女の魔法に恐れをなし、戦意を喪失してしまっていた。

全員を連行するのは難しかったので、エステルと大怪我を負った男以外の人間は手足を拘束し、その場に残した。後の判断は国王やルーファスに任されることになったので、ガーネットは彼らがどうなったのかをまだ知らずにいた。

「確かに何も言わなかったのは悪かったけど、私だって自分の考えに確証があつたわけじゃないんだもの」

椅子に深く座り直しながら、スカーレットは外を眺めた。青い空から吹きこんでくる風が赤い絹糸のような髪を揺らす。ガーネットは美しくなびく、彼女の髪を見ているうちに、自分が腹を立てていることがくだらなく思えてきてしまった。

単純な弟子である。

「まあ、それはもういいとして。あいつら……どんな罪になるんでしょうか」

「それはこれから国王から聞かされるわ」

ルーファスが呼びに来たら、謁見の間へと向かうことになっていたスカーレットはそう簡潔に答える。

「死刑か、僻地への追放でしょうか？」

「私は人を傷つけるようなやり方は好きじゃないわ」

「でも！ あいつはお師匠さまを傷つけようと！」

本当は殺されそうになったのだが、それを言うとか、ガーネットが暴走することが火を見るより明らかなので、詳しい説明は省いたのだ。

「でも、実際大けがを負ったのは彼よ。報いは十分受けたわ」

スカーレットは自身の手を軽く握ったり開いたりするのを瞼を伏せがちに眺めた。それを見たガーネットはそれ以上何も言えなくなってしまうた。

敵とはいえ、魔法で人を傷つけてしまったことをスカーレットは悔いているのだろう。

そんな空気を断ち切る為、話題を変えようとしたガーネットの脳裏に、あるいけ好かない人物の顔が浮かぶ。

「そう言えば、あいつ……ゴドウェルトを何故怪しくないと判断したんですか？ ストーカーなんてどう考えたって怪しいのに」
「怪しいって……。きつとあんだだけには言われたくないと思うわよ」

スカーレットは小さく息を吐いてから、ガーネットを横目でちらりと見る。

「僕はどう見ても怪しい人物じゃないでしょう？」

「そう断言する時点で色々問題ね。特に頭の中が」

頭を指で軽くトントンと叩きながら、スカーレットは眉間のしわを深めた。

「ゴドウェルトのことは、これから国王がいる玉座の間に関係者が皆集まるから、その時わかるわよ。多分」

「関係者って……あのモラトリウム王子も来るんですか？」

「モラ……ってジゼルのこと？ 彼は今朝早く国に帰ったわよ」

「え！？ そうなんですか？」

ここで隠しもせず、堂々とガッツポーズ。

「だから、私に分かる範囲で今回の事件について話したわ。私の本当の正体についてもね。まあ、話さなくても今回の見合いは破談だったわけだけれど、彼には知る権利があるもの」

スカーレットは首をすくめ、そう答えた。そして、ガーネットはその言葉に対して、やけに食いつきを見せ始める。

「話したって……お師匠さまが本当は魔法使いだと言う事を？」

「ええ」

「でもってトワール・ノディエは実は自分だと？」

「ええ」

「そんでもって、弟子である僕と相思相愛だと？」

「勢いに乗って、『ええ』と言うと思ったたら大間違いよ」

——どんな引っかけ問題だ。

スカーレットは本気でがっかりとうな垂れる弟子を見て、平和な日常が戻ってきたことをしみじみと実感した。弟子の馬鹿な行動が平和のシンボルとはいささか情けない話ではあるが。

そうこうしている内に、彼女達を呼びに来たルーファスが扉を叩く音が聞こえてきた。

*

「おお！ 来たかレティ」

「……あら？ 髭はどうしたの？」

髭がなくなり、童顔を晒した国王を見てスカーレットは少しばかり面を食らった。髭がないと、二十代くらいに見える。

「少しばかり、反省を促しましたら自主的に剃られました。言葉よりも、身で表した方が分かりやすいですね」

口元に手をあて、国王の隣で優雅に微笑むトゥートリア。その一方で顔を引きつらせる国王とハワード。おそらく彼女の説教は「少しばかり」どころではなかったのだろう。

しかし、ルーファスは意外に落ち着いた表情をしていたので、これが日常茶飯事で、当たり前前の力関係であることが感じとれた。

「スカーレット様、昨日は挨拶もろくにせずに失礼しました。自分は宮廷騎士団所属のゴドウェルト・オルソンと申します」

騎士服を纏ったゴドウェルトがスカーレットの前に歩み出し、胸に右手をあて敬礼をした。騎士団の正装で彼女と会うのは初めての

ことである。

「ええ、知っているわ。リュディガーの孫でしょう？」

「ご存じだったのですか？」

「ええ」

ゴドウェルトはスカーレットに自分を知ってもらえていたことが嬉しかったのか、眉間のしわを少し和らげ、茶色の瞳を輝かせた。しかし、スカーレットはどこか歯切れの悪い笑顔で、彼の祖父の名を口にしていた。

「リュディガーって誰ですか？ お師匠さま」

師匠のことは自分のこと、自分の全ては師匠のもの、がスローガ
ンなガーネットがここで口を挟むのは必然だろう。

スカーレットが彼の問いに渋々答えようとした時、国王がそれを
遮り声をあげた。

「おお！ 懐かしい名だな！ リュディガーは、レティが私の教育
係をしていた頃の彼女の護衛でな。レティのいる所に彼の姿あり、
と言うくらいしつこく付きまとっていたな！ 周りの使用人が『こ
うしこんどー』『しょっけんらんよー』といつも言っていたが、当
時は意味が分からなかったものだ」

「……思い出したくもない思い出ね」

「も、申し訳ありません」

どうやら、リュディガーに散々アプローチを受けていたらしいス
カーレットは、当時を思い出しうんざりとした顔をした。そんな彼
女の様子を見て、ゴドウェルトは自身の祖父の非礼をすかさず詫び
た。

もちろん、ゴドウェルトが悪いわけではないが、この状況では真面目な彼のこと、謝らなくては気が済まなかったのだろう。

「そんな奴の孫なのに、どうして信用出来たんですか!？」

信じられない、と言った様な声をガーネットがあげる。

それに対し、スカーレットは指を軽く振りながら、重要な情報を付け加えた。

「ゴドウェルトが彼の孫だってだけじゃ信用は無に等しいけれど、彼はエルゼの曾孫でもあるからね」

「エルゼ? どこかで聞いたことがあるような……。あ、アランさんが言っていた、お師匠さまの昔の弟子っていう」

ガーネットはアランとの雑談の中に出てきたその名前を思い出し、ぽんと手を打った。

それなら確かに信用がおける存在だろう。

「そ、リュディガーの奥さんはエルゼの末娘なのよ」

「じゃあ、お前がお師匠さまの話を聞いたのって……」

「そうだ、お爺様と曾祖母からだ。それから、お婆様からも少し、な」

「エルゼとリュディガーからじゃあ、随分情報が違ったでしょうね」

遠い目をするスカーレット。青い瞳が少し灰色に濁って見えるのは彼女の心が反映されているからなのか。ゴドウェルトは軽く咳払いをして、今まで見つけていたスカーレットの瞳から一瞬だけ目を逸らした。

「そうですね……多少は。それでもスカーレット様が素晴らしい方

ということ、どちらの話からも伝わってきました」

「ふふ、それは光栄ね」

ゴドウェルトの心からの言葉に、スカーレットは再び笑顔を取り戻した。彼とリュディガーが全く異なった性質の人間らしいことも彼女の安堵の理由の一つである。

しかし、二人の間に微笑ましい空気が流れていることに嫉妬したガーネットがここで茶々を入れる。

「でもお師匠さま、こいつただのストーカーですよ」

「……自主警護していただけたと言ってるだろう」

「どうか。お師匠さまを見て萌え萌えしていたんじゃないですか？」

「それはあんたでしょう」

妙な言葉を使いゴドウェルトへ突っかかるガーネットに、スカーレットは呆れた顔で鋭い突っ込みを入れる。

そんな、三人の不思議なやりとりを、トゥートリアはおかしそうに眺めていた。どうやらこの姫は面白ければ細かいことはどうでも良いという性格らしい。

国王はトゥートリアの関心が自分に向く前に、本題に入ろうと考えたのか、わざとらしく咳払いをして全員の視線を集めた。

第29話

「さて、これで全員そろったかな」

「団長殿がまだですね」

国王の問いかけに、ルーファスは辺りを見回し、そう答えた。

「アランは後で来るわ。話を始めて大丈夫よ」

スカーレットに促され、国王は今回の事件における犯人達の処遇について話を始めた。スカーレットの口添えもあり、守り人達は遺跡の近隣に勤める魔法使いの監視下に置かれることとなった。執行猶予といったところだろう。

「それだけなんて、甘くはないですか？」

「仕方ないでしょう。魔法古代遺跡の守り人に適任な人間なんて早々見つかるものでもないし」

「私達^{わたくし}を傷つけるつもりはなかったようですし。指導者を失った今、彼らに大した力はありませんもの。それに、次はありませんわ」

にこり、満面の微笑み。トゥートリアのその美しい笑顔が、ハワードや国王には世界も滅ぼしそうな悪魔の微笑みに見えた。そんな彼女を攫う算段を立てたエステルはそうとうの策士だったのだろう。そして、今回の事件をについて、思いを巡らせていた国王がため息と共に言葉を洩らす。

「それにしても、レティがトワール・ノディエだったとはなあ。初耳だったから驚いたものだ」

「陛下もご存じなかったのですか？ てっきりご存じなのかと……」。

だから今回の件を安心してスカーレット殿に任せたのかと思っておりました」

「別に隠していたわけではないのだけど。だからといっていちいち言うようなことじゃないし、今は『生ける魔法史』って通り名があるし」

「僕は知っていましたけどね」

自慢げに胸を張りながら、声をあげたのはガーネットだった。

「僕のフルネームはガーネット・ノディエなんです。今のところ、僕はお師匠さまの弟子兼養子なので。ガーネットと名付けて下さったのもお師匠さまですから」

「だから、エノワルドの古代詠唱魔法なんて使えたのか……」

そうなのだ。スカーレットは自身の知っている限りの魔法を、一部除いて全て弟子のガーネットに叩きこんでいた。だからこそ、ガーネットは一介の魔法使いでは知りえない魔法でも熟知しているのだ。

「でもまさかお師匠さまに、山脈を一瞬で消し飛ばす力があるなんて思ってもいませんでしたよ」

トワールの正体を知るガーネットでさえ、そこは歴史によくある脚色だと思っていたらしい。スカーレットは彼のその台詞を聞いた直後、目線を宙に漂わし始めた。

「あ……あれはね。山を一個だけ消そうとしただけなの……」

スカーレットの声が段々上ずったものへと変わっていく。

「でも、やっぱりと言うか、思った通りと言うか……力を御しきれなくてね。私も驚いたのよ、あの時は」

たどたどしく、自分の若い頃のちよつとした失敗談を語る口ぶりのスカーレット。だが、照れながらそう告白した彼女とは対照的に、その場にいた全員の顔は引きつってしまっていた。

——この人を敵に回してはいけない。

誰もがそう思い、息をのんだ。

しかし、ここでガーネットの頭に一つの疑問が生じた。彼は首を傾げながら眉根を寄せ、スカーレットに問い掛けた。

「国主達が応じなかったら、本当に世界を無に帰すおつもりだったんですか？　優しいお師匠さまにそんな事出来ないと思うんですが」
「あの頃は、色々あって……私もやさぐれていたのよ」

困ったような笑みを浮かべてから、スカーレットはそんな答えをため息と共に出した。

彼女の昔を知る者はもはやほばいないと言っても過言ではない。スカーレットが今の彼女になるまでには様々な物語があったのだろう。ガーネットも知りたいと思いつつも、あまり深く彼女の過去を詮索したことはなかった。

ガーネットには彼女のことについてずっと引っかかっていることがあった。トワール・ノディエが登場した時代、英雄の存在を恐れた国の権力者達はその詳しい情報を隠蔽した。しかし、その存在は民達によって語り継がれてきたと聞く。だからこそその人物像はやぶやで不確かなものとなってしまうのだ。

だがおかしいのだ。スカーレットほどの魔法使いならば、既にその名は諸国で知れ渡っていたのではないか。それなのにスカーレットに関する書物は一切存在しない。それどころか、エノワルドにノディエ家などと言う一族が存在した記録がそもそもないのだ。

（まさか、『スカーレット・トワール・ノディエ』は偽名？）

ガーネットはスカーレットに一度そう聞いてみたかったのだが、それを聞いたところで、本当の答えを得られる気がしなかった。だからこそ、今日も一人頭を悩ますだけで終わるのだ。

ガーネットが何やら終わりの来ない思考の海に漂っていた時、ゴドウェルトが口を開いた。

「ところで、守り人達の処遇は分かりましたが、首謀者である彼女にはどういった罪状を言い渡したのでしょうか？」

「それが……あれについてはスカーレットがな」

国王はそう言いながら髭を撫でようとして、髭がないことを思い出し仕方なく顎を撫でた。

その時扉が開き、アランの白い髭がぴよこりと姿を現した。そして、その隣にいるある人物の姿にガーネットとゴドウェルトは目を見開いて言葉を失った。

「エステル・メイシー！？」

そこに立つて居たのは、紛れもなく、エステル・メイシーその人であった。スカーレットは彼女の方へ顔を向け、目線だけをガーネット達に飛ばした。

「彼女には、これまで通り古代魔法研究室の室長として王に仕えてもらうわ」

「な、こいつは首謀者ですよ！？ お師匠さま」

表情を陰しくし、声を荒げる弟子を見て、スカーレットは肩を少

しあげた。ガーネットの言い分がもつともなことであることは分かっているらしい。

「今回の件はね、なるべく穏便に済ませたいの。突然室長が退職したら怪しまれるでしょう？」

「でも……」

「まあ、結婚退職ならそんなに怪しまれないかもしれないけれど。ガー、あんたが彼女と結婚する？ 年上好きでしょう？」

いつもの仕返しとばかりに、にやり。

「いやいやいやいや！ 僕はお師匠さまが好きなのであって、年上好きなわけじゃ断じてありません！」

ガーネットは手が見えないほど左右に振って、スカーレットの恐ろしい考えを否定した。この師匠はの怖いところは本当にそれを実行しかねない所である。

そんな弟子の様子を微笑ましそうに眺めた後、小さく息を吐いて、スカーレットはぼつりと声を落とした。

「恨みは連鎖するものよ。絶ち切れるなら、どこかでそうすべきなの」

その言葉に辺りはしんと静まり返った。三世紀もの時代を見てきたスカーレットの言葉だからこそ、それは重たく悲しく、部屋じゅうに響き渡ったのだらう。

「大丈夫、あの後じっくりと話し合ったの。彼女はこれからこの国、そして王族の為にその身を捧げてくれるわ」

「もちろんですわ！ 私の子供の癪癪じみた過ちを許して下さいさるな

んで、本当にスカーレット様は素晴らしいお方です。この命懸けて、与えられた任務をまっとう致しますわ」

ここに来てようやく口を開いたエステル輝いた瞳と興奮して薄紅に染まった頬を見て、スカーレットの人心掌握の術に、ガーネットは改めて感心してしまった。だが、エステルが心酔しているのはスカーレットであり、結局王族に忠誠を誓っているのか怪しいのではないか。

（まあ、僕もそうだから問題ないか）

実は、ガーネットと同等だというのが一番危険なのだが、本人にはそのことが分かっていないらしかった。どこまでも自信過剰である。

こうして、傍目には何事もなかったかのように、事件は終息したのであった。

第30話<第一部最終話>

＊

スカーレットが姫を演じる要因となったトゥートリア失踪事件は無事終幕を迎え、スカーレットは本業に戻り、懐かしの我が家へ帰宅する――はずだったのだが。

「まさか、トゥートリアが家出をするなんてね」

お礼がしたいとのトゥートリアの申し出でスカーレット達は城に三日程滞在することに決めた。しかし、その後はガーネットを置いて、さつさと家に帰る気満々だったのだ。それなのに、三日どころか、既に一週間が経とうとしていた。

本来の予定をすっかり狂わされてしまったスカーレットは、一枚の高級そうな白い紙を広げながらため息をつく。

その紙には、『前々から国外に出て広い分野でものを見極める力をつけたいと考えておりました。スカーレットさんが城にいて下さるおかげで安心して勉強に励むことが出来ます。不甲斐ない、我が父をどうかよろしく願います』といったような事が、もっと国王に対して辛辣で容赦ない言葉で綴られていた。

今から四日前、この置手紙一枚を残して、トゥートリアはハーワード一人を引き連れて城を出て行ってしまったのだ。いつの間にか、留学の手筈を整えていたらしく、その去り際は実に鮮やかであった。この手紙にシヨックを受け、国王はめそめそするは、ルーファスは土下座してまでスカーレットの逗留を願うはで、結局城に留まることになってしまったのだ。

城にある自室のソファの背もたれに寄りかかりながら、スカーレットは後ろへと視線をやる。

そこには、ガーネットの代わりにスカーレットの護衛を任せられたゴドウェルトの姿があった。彼の身長が高いうえ、スカーレットは座ったままだったので、自然見上げる姿勢になる。

ゴドウェルトはスカーレットの視線に気が付き、眉間のしわをほんの少し緩めた。

「私も甘いわよね。トゥーにお願いされると、何だか断れなくて」「いえ、それもまたあなた様の良い所だと思いますので」

「あら、ありがとう。というか、ゴド、そんなに堅苦しい話し方しなくていいのよ？ 普通に話してちょうだい」

「堅苦しいのは地ですので」

「うーん。何て言うか、ガーに対してと同じように接してくれればいいのよ」

「スカーレット様とあんな奴を同等に扱うなど出来ません」

間髪いれずにそう返すゴドウェルト。その目には一切迷いが存在しなかった。しかし、『あんな奴』と言った時に一瞬見せた、げんなりとした彼の表情をスカーレットは見逃していなかった。

（この一週間、二人に何があったのかしら？）

主に変わったのはゴドウェルトのガーネットに対する態度だけなので、原因は全てガーネットにあるのだろう。

——まあ、ガーネットが普段通りにしていれば、真面目な人間は誰でも嫌悪感の一つや二つ覚えるかも。

そんな酷い結論を出し、スカーレットは手紙をそっと目の前に机に置いて、蛙の形をした重りを乗せた。そのタイミングを見計らったかのように、扉を叩く控えめな音が響いた。スカーレットは姿勢を正し、扉の方へと顔を向ける。

「はい、どうぞ。あら、ルーファス——にガーネット」

スカーレットは明らかに不機嫌そうな弟子の顔を見て、不思議そうに首を傾げた。ゴドウェルトが護衛に指名されてから、ずっと不機嫌ではあったがこれはいつになくひどい表情だ。

ルーファスはスカーレットに促されても、中々部屋へ入ってこようとせず、入り口辺りで直立したまま彼女に視線を送る。

「実は……。トウートリア様の留学先から、こちらにも留学生が参りました」

「交換留学ってことかしら？ いいじゃない。それに何か問題でもあるの？」「いえ、問題と言う訳では。こちらは歓迎ですし、光栄にさえ思っております」

ルーファスのやたら丁寧なもの言いに、スカーレットは眉を潜めた。

しかし、その訝しげな表情は次の瞬間、花が咲いたような満面の笑みへと変わった。なぜなら、ルーファスの横から姿を現したのは、エノワルド王子ジゼーラルだったからだ。

「ジゼル！ 留学生ってあなただったの？」

「ええ、ご無沙汰しています」

ジゼーラルは青い瞳に光を滲ませ、スカーレットに向かって微笑みを投げかける。それと同時にガーネットの不機嫌さがぐっと増したのだが、そこは軽くスルーされてしまった。

「慌ただしい帰国で、満足のいく挨拶も出来ずに申し訳ありませんでした」

「私もごめんなさいね。何だか結果的に騙したような形になってし

まって」

「いえ……さすがに初めは驚きましたが、それでもあなたがあなたであることに変わりはありませんから」

その言葉に、スカーレットはホツとしたのか、胸を両手で押さえた。純朴な若者を騙すというのは気分のいいものではない。

「あれから色々と考えました。私には、経験も知識もまだ乏しいことを痛感させられましたよ」

「それが留学の理由かしら？」

それもあります、とジゼーラルは指で前髪を少し流してから目を伏せる。スカーレットは彼の次の言葉を待ちながら、真ん丸な瞳を無邪気に輝かせる。

「私はまだ、自分のことさえも理解しきれていませんが、たった一つだけ確かな思いを得ました」

伏せていた瞳を前へ向け、ジゼーラルは真っ直ぐとスカーレットの青い輝きを捉える。

「あなたを好きだと言う気持ちです」

黒い髪を揺らしながら、心がくすぐったいかなのような、柔らかな微笑みを送る。

この告白に、その場にいた全員が目丸くして言葉を失った。スカーレットは言葉の意味がまだいまいち脳に届いていないのか、ただ茫然として瞬きを繰り返していた。窓から青々とした心地よい風が吹き込む。温かな頬を、優しい風に撫でられながら、青の目線が重なり合う。

そんな良い雰囲気呑み込むかのような、ガーネットの抵抗の叫びが、澄み渡る青の天井に高く、高く昇っていった。

《第一部・完》

第30話＜第一部最終話＞（後書き）

以上で第一部終了です。くぎりとして第一回キャラ人気投票を行います。今後の展開の参考に致しますので、是非ポチっとうご投票ください（m^□^m）お待ちしております！

次回第二部「修道女の逃亡」が始まるまでは、ほのぼの日常系幕間を3、4話はさみます。二部のあらすじは以下のようになっています←

トウトリアの留学により王宮に留まることとなったスカーレット。トウーの代わりにやってきたのは、なんとエノワルドの王子ジゼーラルだった。客員魔道師として王宮で過ごすジゼルにガーネットは敵意を燃やす。そんな様子を冷めた目で見つめるスカーレットとゴドウェルト。

そんなある日、城に二人の魔法使いが訪れる。彼らは失踪した修道女を捜している？

そして、スカーレットが男弟子をとらなくなった原因が明らかに――

お楽しみにお待ち下さると嬉しいです（*・ω・*）

変態の主張は揺るがない

「あれ？ 何してるんですか、こんなところで」

こじんまりとしたアランの個人研究室に訪れたガーネットは、先客であるゴドウェルトに対しそう問いかけた。本が散らばり、歩く隙間があるのか疑いたくなる床をどうにか歩き、ガーネットは二人の傍へと近づく。

「スカーレット様は王女殿下の家出について国王陛下と話し合いをなされているところだ。俺が聞いていい話でもないから席を外した次第だ」

「お師匠さまの傍を離れたわけを聞いてるんじゃないんですけど」

最近、護衛を自分からゴドウェルトに変更されたことを未だに根にもっているガーネットは据わった目で彼を見る。爆発すればいいのに。

「俺は陛下からお預かりした書類を届けに来ただけだ。そういうお前は何の用だ？」

「僕は少し、アランさんに用が……」

「私にですか？ 何でしょう？」

アランは本を積んで作った椅子に腰をかけながら、もふもふとひげを動かした。

「アランさんは、『動植物の成長』について研究なさっているんですよね？」

「ええ、まあ。ご興味が？」

ふわふわな白い眉毛のしたでアランの円らかな瞳が輝く。自分の研究について他人に興味を持ってもらうことは嬉しいことなのだろう。

「いえ、ほら。お師匠さまって何故か未だに小さいままじゃないですか」

「そうですね。確かに私が良く知っている七十年前と全く姿が変わりませんねえ。当時から非常に興味深かったのですが、何と云うか、あまりあの人には近づきたくなかったもので」

アランの記憶の奥底で、忘れかけていた鉄の金属音がこだまする。ガーネットはアランがどこか遠くへ意識を飛ばしてしまっていることに気が付き、目の前で手を叩く。その音にアランはハッとして、現実へと引き戻された。

「それで、ええっと、ガーネット殿はレティ殿が成長しないわけを知りたいのですか？」

「というか、成長薬を飲んだら成長するのか試したいな、と思いついて」

「確かに気になるところではありませんね」

「そうです！ 気になるんです！」

ガーネットは胸の前で握った拳に力を込め、自身の目的を高々と宣言した。

「僕は知りたい！ 成長したお師匠さまの胸は貧乳のままか否か！」

「分かった。とりあえず、お前がどうしようもなく馬鹿だってことは良く分かった」

ゴドウェルトは眉間のしわを深め、ガーネットの欲にまみれた願望を即座に切り捨てる。

「お前は永遠の思春期少年のようだな」

「僕も軽く見られたんですね。思春期はとつくの昔に卒業しましたよ。まあ、当時は若気の至りと言うか、倫理的に問題のある衝動に駆られたり、本能のままに行動しようとしたりもしました。けど、それも昔のことです。今は至って紳士に！ 同意は得てから、がモットーです！」

「……お前のような獣と一緒に暮らしてて、スカーレット様はよくご無事だったな」

背筋に何か寒いものが漂うのを感じ、ゴドウェルトもアランも目を引きつらせた。

「いやあ、お師匠さまの部屋、この城よりも頑丈な守りの魔法がかけられてて。天才の僕をもってしても、突破は不可能でした」

「破ろうとは試みたんですね……」

「僕に出来たのは、お師匠さまの部屋の前で健やかな寝息に聞き耳をたてることくらいでした」

「お前、もうこれからスカーレット様の十メートル以内に近づくな」

自分にもこれ以上近づくなと言わんばかりに、ゴドウェルトは鞘におさめたままの剣をガーネットに向ける。本当はここで切り捨てた方がスカーレットの為だろうが、そこは理性が引きとめた。

「無理ですよ！ 僕とお師匠さまは見えない引力で絶えずひかれあっているんですから！」

「吸いつけられてるのはお前だけだろう」

「花に吸い寄せられる蝶みたいですね」

「団長殿、こいつは蝶じゃなくて蛾ですよ、蛾」

発言をことごとく叩きのめしていく二人に、ガーネットは不機嫌そうな顔をしつつも、何かを悟ったように息をついた。

「お二人とも分かってないですね。嫌い嫌いも好きのうちって言うじゃないですか」

「お前の脳内では、どんなすごい言語変換が起きてるんだ」

ゴドウェルトはもはや突っ込む気力も失せたのか、どんよりと暗い目をし始めた。言葉の通じない相手に話をするのは根気が必要なのだ。

ガーネットはそんな彼の様子など気にも留めずに、延々と自身の思いのたけを語り続ける。

「別に僕は小さいのが嫌とかじゃないんですよ。お師匠さまの胸だったらそれが僕の一番理想の大きさだとは思ってます！ たとえ小さくても！ たとえ手のひらサイズでも！」

熱を帯びた変態の力説に、ゴドウェルトもアランも一歩二歩と後ずさる。

「団長殿、精神年齢を成長させる薬とかないんですか」

「ガーネット殿の場合、精神年齢の問題ではなく、もっと根本的なところから直さないといけないと思いますけどね」

二人の大きなため息は、ガーネットの部屋中に響き渡る変態演説によってかき消される。

ゴドウェルトはこんな変態の手綱を握ってきたスカーレットを心の底から改めて尊敬したのだった。

ガールズトークは甘くない

「何でもガーネットの奴、昔から姫様ひとすじらしいですよ」

手に持った帽子をくるくると回しながら、青年は目の前にいる女性たちにそう話しかけた。宮廷魔道師の制服を着た青年、ラルフの帽子には、前に国の紋章、後ろに太陽の刺繍が入った赤い布が付けられていた。魔道師団、実働組の一つで王城や王都警護が主な仕事である「太陽」に属するものが見に付ける帽子である。サンシャイン

古代魔法研究室でいつものように、お茶とクッキーと休憩をとっていた三人の女性はその話に興味深く耳を傾けていた。

「どつりで私がさりげなく胸を押しつけても涼しい顔していたわけよね。いつもなら大体これで男なんてイチコロなのに」

金糸のような美しい髪を両側で三つ編みに束ねた女性、ミレイユは憂いを帯びたようなわざとらしいため息を一つつく。

「そ……そんなことしてたのミレイユさん」

ミレイユの爆弾発言に対し、夕焼け色のような明るい茶色の髪をした少女、カヤナは半ばあきれながらも、面白そうに笑う。そして、自分の胸を見つめ、そんな芸当は自分には無理だということを悟った。

「なーんだ。俺に押しつけてくれればいつでも一撃でころりとしますよ」

「残念、風船男には興味ないの。そこら辺で勝手にこころしていて頂戴」

にこりと軽くあしなわれて、ラルフは苦々しい顔で肩を落とした。

「風船男って……」

「あつちの女やこつちの女にふわふわふらふらしてる軽い男のこと。あなたのことね」

「最低ー」

「男の風上にも置けないな」

カヤナと、もう一人の灰色に近い黒髪の女性アビゲイルは、ミレイユの意見に賛同してラルフを攻め立てた。確かに彼は女という女にとりあえず声をかける軟派男であり、女性の多いこの研究室の招かれざる常連客でもあった。

だが、いくら本当のこととはいえ、この完全アウエーな状況にラルフは焦って弁解の意を述べる。

「いやいや、素敵な魅力にあふれた女の子達が、世界中に居すぎるのがいけないんだって」

「この後に及んで言い訳とは、本当に最低だな。君はそれでも男か？」

「アビ様みたいな完全無欠な乙女の夢の象徴のような男、現実にはいませんって」

アビゲイルは「闇夜の貴公子」などと呼ばれ、城の女性陣から羨望の眼差しを受けている男前な女性なのだ。確かに、彼女は顔も身のこなしも、その言動も、そこらの男など敵わないほど紳士だった。

「いや、そもそも、私は女なのだが」

「アビ先輩、突っ込むところそこじゃないですって！」

「そうねえ、アビみたいな男性がいたら全力でハンティングするん

だけどな。私ももう結婚しててもいい歳だし。どこかに顔と性格が良くて、資産たんまり持つてる男落ちてないかしら」

この三人の中で一番童顔なのに、一番年上だったりするミレイユの現実的な発言に、他の三人は苦笑いをした。しかし、彼女が本気を出せば玉の輿も容易いことなのだろうな、とも同時に思った。

その時、扉が開く鈍い金属音がして、向こう側から赤いリボンで金の髪を高く結いあげた少女が顔をのぞかせた。

「おや？ チェルシー君じゃないか」

アビゲイルが優しく声をかけると、チェルシーは無表情だが可愛らしい顔をちょこんと下げて挨拶をした。彼女は魔法学院からの研修生であり、歳はまだ十四程度であった。普段はアランの助手のようなことをしていて、彼の後を付いて回っていることが多かった。彼女が部屋に入ると、続いて書類の山を抱えたガーネットが現れた。

「あ、噂をすればだね。んで、その書類どうしたの？」

ガーネットはこの研究室所属なので、この女性陣三人は全て上司にあたる。カヤナが部下の持ってきた書類の出所を訪ねるのは自然の流れだろう。

「チェルシーさんがこちらに書類を運ぶ途中だったんで、僕が代わりに引き受けたんですよ」

「どうもありがとうございました」

書類を机に下ろすガーネットに、チェルシーは深々と頭を下げた。その拍子に束ねた髪が前へとぱさりと降りてくる。その仕草は小動

物のようでとても愛らしいものであった。

「あら、あなたも優しいところあるのね」

「やだなあ、僕はいつでも優しいですよ」

胡散臭いほど輝かしい笑顔でガーネットはミレイユの嫌みをかわす。

「えー私には優しくなかったじゃない」

——だって、何だかヘタすると捕って食われそうなんですもん。などと、ガーネットは笑顔のまま考えたが、さすがにそれは言わないでおいた。あとが怖い。

しかし、ラルフは急に何かひらめいたような表情になり、ガーネットを指差して大声で叫んだ。

「姫様やチエルシーちゃんの共通点！　そうか！　ガーネット、お前ロリコンなのか！」

「まあ、確かに姫さまのペチャンコ……ではなくスレンダーな体型に対し非常に魅力は感じてはいます。むしろ欲情もしています！　だからといって別にロリコンと言うわけでは……ってチエルシーさんどうしてそんなトコにいるんですか？」

ガーネットの変態発言に大いに引いたチエルシーは彼から遠く離れた場所へと退避していた。その視線には軽蔑を通り越した、何か見てはいけないものを見るようなものが含まれていた。

ガーネットが一步踏み出すと、二歩下がる。それが面白いのか、じりじりとチエルシーに近づくガーネット。

しかし、そうしている内に、ついにアビゲイルに分厚い本の角で頭を殴られてしまった。かなり鈍い音がした後、ガーネットは下に

うづくまる。これは痛い。

「全く、君はか弱い少女をいじめて楽しいのか」

腰に手をあて、長い黒髪を後ろへ流すその姿は、本当にほれぼれとするかつこよさであった。

「まあ、確かに、涙目の女の子を追いつめるところにはロマンを感じるね！」

グツと親指を立て、満面の笑みでガーネットに同調するラルフ。それを見たチエルシーの元々無機質な表情はよりいっそう人間味を失った。もはやこの人間達がどこの言葉を話しているのか理解できていないという様子だった。

そして案の定その直後に、ラルフは本の角による、アビ様の制裁を受けたのであった。

変態二人がうづくまる中、新しくチエルシーを迎えたアフタヌーンティーは優雅に続けられた。

お姉様には敵わない

スイートピアへの留学が決まった頃、ジゼルは滞在の準備や、方々への挨拶回りに追われていた。

この日も、城の重臣の数人に出立前の挨拶へ行こうと急ぎ足で回廊を歩いていて、窓の外から日差しが零れこみ、つい外へと心誘われたが、やるべきことをまずやらねばと思いなおし、再び歩き出した。

その時だった。急に後ろから、可憐な声で名を呼ばれたのだった。

「ジゼーラル、帰っていたのね」

「姉上……。姉上のほうこそいつ帰って来られていたのですか？」

ジゼルを呼びとめたのは彼の姉姫、リリベルティーナだった。彼に瓜二つな容貌をした彼女は漆黒の髪を綺麗に編み込みまとめ、煌びやかな装飾品で飾り付けていた。

「スイートピアはいかがでしたか、ジゼーラル様」

「ああ、とても有意義な時を過ごせたよ。ジギスメントも姉上の供、御苦労だったね」

その労りの言葉に彼女の隣にいた顎ひげを生やした浅黒い肌の男、ジギスメントは笑って応えた。エノワルドの人間は基本的に皆、白い肌である。しかし、彼はどこか遠い異国の人間を祖父に持っているらしく、顔立ちも異国情緒さが漂っていた。

「有意義だったに決まっているわよね。またすぐに行きたくなるくらいですもの」

「留学のこと、もう耳に入っているのですか」

「あら、私の耳はこの城中についているのよ」

「ですから、リリー様の悪口は迂闊に言えませんよ、ジゼーラル様」
「ジゼーラルはあなたと違って、心が綺麗だからそんな心配は無用よ」

扇で口元を隠しながら、リリベルティーナは優雅に微笑んだ。しかし、目が笑っていない気がするのはきのせいだろうか。

「ああ、そうそう。これから大事な用事があるの。会食、代わりに出てくれないかしら？」

その言葉にジゼルの顔が引きつる。まさか。

「代わりにつて……。また私を女装させるおつもりですか、姉上」

何度か、姉のふりをして会食に出席したことがあったジゼルはあからさまに笑顔を引きつらせた。煌びやかなレースのドレスを着せられてはモラトリウムな彼でなくても自分を見失ってしまうだろう。

「あら、いいじゃない。そっくりなのだし」

「ええ、それにリリー様よりもお若いだけあって肌も綺麗ですし」
「あなたは少し黙ってなさいな、ジギスムント」

扇を音をたてながら閉じ、リリベルティーナは笑顔のままジギスムントに釘をさす。

「本当に困りますよ。流石にそろそろばれるかもしれませんが……」
「大丈夫よ。あなたはただ扇で口元を隠してにこにこしていれば良いのだから。いつもの私みたいにね」

「そうですね。それに、ジゼーラル様の笑みの方が、リリー様の何

か腹に一物ありそうな含み笑いと違い大変愛らしいのですから」
「ジギ、私は腹に一物ありそうなのではなくて、実際あるのよ」
「左様でしたね。流石は私のお育てした姫様です」

おほほ、あははと愉快そうに笑いあう二人を見て、ジゼルは顔が引きつってしまった。

——付いていけない。

「ドレスはどんなのがいいかしら」

「ああ、丁度ジゼーラル様用にお仕立てしたレースをふんだんに使った空色のドレスがございますよ」

リリベルティーナの問いかけに、さも当然とばかりに答えを返すジギスメント。しかし、ジゼーラルには彼が何を言っているのかがさっぱり理解できなかった。いや、正確には彼が当然のように言い放った事柄に対して疑問以外の考えが浮かんでこなかったのだ。

「……な、何故私用に？」

女装趣味のない、健全な青年なら誰でも思う疑問だろう。ジゼーラルが表情を固くしていると、ジギスメントは彼の質問とは全く無関係な言葉を返した。

「サイズもピッタリかと思われます」

「あら、よくジゼーラルの体のサイズを知ってたわね」

「リリー様のもばつちりですよ。スリーサイズの微妙な変化も随時把握しております」

「まあ、気持ち悪い」

従者の爽やか変態発言を、リリベルティーナは笑顔を崩さずに扇

を広げながら一言で流す。

ジゼーラルは、何故自分用のドレスがあるのか、何故仕立て屋でもないジギスメントが自分や姉の体型を熟知しているのか、など全てが謎に感じた。だが、ジギスメントもリリベルティーナもそんなことは何でもないかのように微笑んだまなので、何だか本当に大したことでないように思えてきてしまった。

流されやすい性格の上、この姉と従者相手ではそういった考えに至っても仕方ないと言うものだ。

脳内処理が上手くいかなくなり、ぼんやりとしたジゼーラルに、リリベルティーナは優しく声をかける。

「それじゃあ、ジゼーラル。頼んだわよ」

「え、ああ、分かりました……つて、え？ あ、姉上！」

考え事をしていて上の空だったジゼーラルは姉の言葉に思わず肯定の返事を返してしまった。

毎度のことながら、自らの不覚さを痛感する。

「姉上っ！」

「それじゃあね、スイートピアの可愛らしいお姫様によろしくね」

「あ、あ、姉上！」

リリベルティーナはジゼーラルに背を向けたまま、ひらひらと扇を振り別れの挨拶を告げた。去り際にもさりと弟をからかうことを忘れないのは彼女のポリシーなのだろう。ジギスメントも軽く会釈をしてから彼女の後へと従った。

だが、リリベルティーナは何か思い出したかのように一時足を止め、ジゼーラルの方へとちらりと顔を向け、最高の笑みで言葉を付けた。

「ああ、そうだね。前に代わりで出てもらった茶会でダリエ伯爵に言い寄られてたみたいだけれど、襲われないように気を付けてね。正体がばれてしまうから」

「あ、あ、あ、姉上っ！」

先程からかわれたことでほんのり赤く染まっていた顔はいまや青を通り越して白くなり、完全に血の気を失っていた。

—— ばれるばれないだけの問題じゃありませんよ。

涙ぐみながら、がつくりと肩を落としたジゼーラルの背後には、ドレスや宝飾類を手にしたりリー付きメイド衆が満面の笑みで控えていた。そして、この後、振り返って彼女達を見たジゼーラルは再び大きなため息をつくこととなったのだった。

恋する乙女は報われない

足元をころころ転がるリンゴが一つ。

（どうしてこんなところにリンゴが？）

非番の為、気分転換に来た本屋でリンゴを拾ったリネットは頭に疑問符を浮かべ首を傾げる。右を見て、左を見て、だが本を吟味している人以外特に何も見あたらない。古くて小さいが趣のある店内には、厳選された書物が、蕾の形をした間接照明によって照らされていた。

どうしようかと、真っ赤なリンゴに自分の姿を映しながら思案していた時、

「ごめんなさい！ それ私のリンゴなの」

と愛らしい声がした。声の主はリネットの手の中にあるリンゴの様に赤い髪をしていた。

（うわあ、可愛い子だなあ……）

リネットは紙袋を抱えた少女をまじまじと見つめた。まるで人形のような白い肌に宝石の様な透き通った青の瞳。

「あの？」

「え、あ！ はい、どうぞ」

ぼんやりしていたリネットはようやく我に返ったのか、手に持っていたリンゴを少女に手渡した。少女はにこりと微笑みながら、リ

ネットから受け取ったリングを持っていた紙袋へと押し込んだ。どうやらここから転げ落ちたらしい。

「あなた、もしかしてスイートピア騎士団の人？」

「え！？ どうして分かったんですか？」

「女性でパンツスタイルの人は珍しいし、腰に剣を下げてるから。ここの本屋は城から一番近いし」

「あ、そうですね。私、どうもスカートって落ち着かなくて。それにどうせ似合いませんしね」

硬くて癖のある赤茶の髪を耳にかけながらリネットは控えめに微笑んだ。少女は不思議そうに目を丸くして彼女をじっと見つめた。リネットはその真っ直ぐな瞳に射抜かれて落ち着かない気分になった。

「えーと、あの」

「十分可愛らしいのに」

「へ？ え？」

少女の口から出た思いもかけない言葉に、リネットは思わず顔を赤くした。

「そ、そんな！ 可愛くなんてないですよ！ 私のこと可愛いなんて言うの身内だけです！ 騎士団の中でもじゃや馬娘とか言われて、全然女扱いされてませんし！ いえ、別に女扱いして欲しいって訳じゃないんですけど、私だって一人前の騎士ですし。でも少しは気にしてくれてもいいんじゃないかなって……。いつも無愛想だから、ただでさえ表情から考えを読めないのに、その上無口って……。無口といえば、異動のことも直前になって『異動になった』一言ですよ！ いくら口数が少ないからってそれはないです

よね！ でも……それってやっぱり私が全く相手にされてないからかなって……」
「そ……そう」

一気に流れ出る言葉の濁流に押され、少女は力なく微笑む。今まで息継ぎも忘れて勢い良く話していたリネットはハツとした様子で我に返った。そして、その途端湯気が出そうなほどに顔を赤くして頬を両手で押さえた。

「すみません……。私ったらつい……」

「え？ いいのよ。好きな人のことになる」と冷静に考えられなくなるものよね」

「へあ！？ す、す、す、好きな人って訳じゃあ！」

「そうなの？」

「いえ、まあ、嫌いではないというか、むしろ何て言うかこんというか……」

指いじりをしながらもじもじするリネットを見て、少女は愉快そうに微笑んだ。なんと分かりやすいのだろうか。

「常に眉間にしわを寄せてて、不機嫌そうにしてるんですけど本当は優しくて、剣の腕も一流で……。だから、そう！ 尊敬してるんです、上司として！」

リネットが拳を握りしめ熱弁をふるっていたその時、カランコロンという鐘の音と共に扉が開かれた。

「スカーレット様、買い物はお済みになりましたか。中々出てこれないの……」

「ゴドウェルト先輩！」

噂の「尊敬している上司」の登場で、リネットは髪が逆立つほどの驚きを見せた。

「何だ、リネットもいたのか」

「先輩こそどうして……!？」

「あら、知り合いだったの。そうよね、同じ騎士団所属なものね。ゴドは私の買い物に付き合ってくれたのよ」

スカーレットはそう言い、ゴドウェルトが片手に抱えていた大きな紙袋を指差した。リネットはゴドウェルトと紙袋、そしてスカーレットを順々に眺めながら瞬きを繰り返した。

状況が分からない。

「スカーレット様、そのリンゴは？」

「これ？ これはここの店主がくれたの。田舎から沢山送られて来たからって」

「それはよろしかったですね」

「ええ、アップルパイでも作るわ。ゴドは甘いものは平気かしら？」

「自分にも頂けるのですか？ それは楽しみですな」

（え？ ええー何この恋人同士みたいな会話！）

どう考えても恋人同士には思えないと思うのだが、そこは恋する乙女の想像力。ドキドキする胸を押さえて、リネットはゴドウェルトに向かって問いかけた。

「ゴドウェルト先輩、この人は……」

「ああ、そうか。お前は初めてお会いするんだったな。俺が護衛をさせて頂くことになったスカーレット様だ」

「スカーレット様……って姫さ……!？」

大声でそう叫びかけたリネットの口を、ゴドウェルトは思わず手で塞いだ。

「ふ、んーんー!」

「大声で叫ぶな、周りに人がいるのに」

「ゴド、放してやりなさい。リネットが苦しそうよ」

少し呆れながらも、この光景を微笑ましく眺めていたスカーレットが注意を促すと、ゴドウェルトは反射的に口を塞いでいた手を引いた。

「え、ああ、すまない」

「い、い、いえ! 大丈夫でふ!」

「本当か? 顔が赤いぞ」

顔が赤いのは苦しかったからだけではないので、リネットは力のかぎり首を左右に振った。

(せ、先輩の手が、私の唇に)

唇をそつと押さえ、リネットはあわあわと口を動かした。一方のゴドウェルトはさして焦った様子も見せずにスカーレットと会話を続けていた。

ようやく、顔の赤みが引いて来たリネットは何か思い出したかのようにスカーレットに向かって姿勢を正した。

「す、すみませんでした。姫様だとは知らずに失礼を」

今度は小声で、リネットはスカーレットに謝罪をした。スカーレットは気にしていない意を示す為に、笑顔で小さく手を振った。そして、何か思いついたようにあやしげな笑みを浮かべた。

「そうだわ！　ゴド、あなたこの後リネットとお茶でもしてきたらどう？」

「へー？　ひ、姫様突然何を……！」

「だって、今回の異動も突然だったし、送別会も出来ていないのでしょう？　ちよっとした送別会のつもりで、ね、どう？」

手を合わせながら、スカーレットは首を傾げ二人に同意を求めた。

「いえ、遠慮しておきます。私にはスカーレット様の護衛がありますから」

「あら、私は平気よ」

「駄目です。それに、リネットと二人きりでお茶なんかした日には、こいつの兄弟達に何されるか分かったもんじゃないありません」

「兄弟？」

「あ、兄が四人に姉が一人それと弟が二人……。上の二人の兄と、姉以外は全員城勤めでして……」

「そして、シスコンで有名なんです」

「そ、それは、それは……」

スカーレットは感心したような、苦いような表情をしてから微笑んだ。

「あの、じゃあ、私はこれで失礼しますね」

力なく微笑んだりネットは、頭を下げてからその場を立ち去ろうと体を動かした。がっくりしながら、ゴドウェルト達に背を向けた。

「ああ、それじゃあな」

声と共に頭に降ってきた温かな手のひら。自身の頭に思いもかけずに乗せられたゴドウェルトの手に、リネットは顔を熱くした。彼にとっては、妹のような年下の部下への何気ない行動だったのだらう。

手が離れて、ゴドウェルト達が去った後もリネットは顔を緩めながらただ立ち尽くしていた。

「あなたって意外に罪な男ね、ゴド」

顎に手を添えながら、楽しそうに微笑むスカーレット。街道を歩きながら、ゴドウェルトはスカーレットが持っていたリンゴの紙袋を手に、彼女を見下ろした。

「はあ……よく意味が分からないのですが」

「そう言うトコも罪なのよね」

「左様ですか」

全く興味がなさそうな返事に、スカーレットは苦笑いをした。

——恋する乙女とは、いつもちよつとしたことで振り回されてしまうものである。

昔を思い出しながら、スカーレットは鈍感なゴドウェルトを見上げ微笑んだ。ぎこちなくも微笑みを返したゴドウェルトの眉間には、しわが微かに寄ったままであった。

第1話

あの方が話す、赤い髪の魔女さまの思い出。その話を聞くのが好きだった。

そして何より、その話をする時の、あの方の嬉しそうな笑顔が大好きだった。

すっかり遅くなってしまった。

少女は自身の要領の悪さを嘆きながら、小さく声を洩らした。

雨は容赦なく石畳にその身を叩きつける。ようやく辿り着いた大聖堂の軒下で、少女は雲に覆われ黒く染まった空を見上げた。

びしょ濡れになり、重くなったベールを脱ぎ力いっぱい絞り上げる。途端、水が足元に勢い良く落ち小さな水たまりを作った。

灰色のベールは、濡れてみすばらしくなった鼠のようで、少女は思わず涙ぐむ。

——新しく下ろしたばかりだったのに。

胡桃色の髪をつたう雨水と共に、目から雫が落ちる音が地面に小さく響く。白い修道服のスカートにも、泥の模様が点々と広がっていた。上に羽織っていたケープも脱いでしまおうと思い、少女は留め具と共に付けてあるロザリオを外そうと胸元に手を伸ばす。

その時、聖堂の中でなにやら物音が聞こえてきた。少女はその音に反応し、一瞬を体を強張らせる。

——司教様がまだいらっしゃるのかしら。

湿った髪を両手で撫でつけ整えてから、重い石造りの扉を体重をかけながら開く。いつもは魔法灯でほんのり明るい聖堂が、何故か今日は真っ暗である。

少女が扉の隙間から瞳を覗かせ、暗闇に目を凝らしていたその時、雷光が空から降り注いだ。

扉の僅かな間から届いた光で、きらり、光る何かが目に飛び込む。それと共に、赤が飛び散る。

何が起こったのか分からず目を見開いたままの少女の後ろで、少し遅れて雷鳴が唸りをあげる。その音を合図にしたかのように、少女の足は自然にそこから離れようと動き出していた。手から零れ落ち、残されたボールだけが頼りなげにその場に残された。

飛び散る赤、倒れゆく人、不気味に光った二つの瞳。

——どうしよう。どうしよう。どうしよう。

少女は自分の見たものを上手く頭の中で整理することが出来ないまま、雨の中を走り続ける。ただ、修道院に戻ってはいけないという警告音。その事実だけが少女の頭に響く。

駆けて。

とにかく、駆けて。

足がもつれ、そのまま大きな水たまりに倒れ込む。雨に濡れた上、泥だらけにもなってしまった少女の瞳から大粒の涙が流れ落ちたが、もはやどれが雨水でどれが涙かも分からない有様であった。

もうこのまま座り込んでしまいたいと思った少女の脳裏に、今は亡き彼女の恩師である前修道院長の優しい声が甦る。

『その人はね、とても真っ直ぐで、そして少し寂しい人なのよ』

少女の黄金色の瞳に、ほんの少しの明かりが灯る。

——そうだ、私にはまだ頼れる人がいるじゃないか。

「行かなきゃ、あの人のところへ——『生ける魔法史』スカーレット様のところへ」

＊

風が青々とした草達を優しく撫でる。この地に百数年近く根を張る私の友人は、腕の緑を心地よい音色と共に揺らす。その腕が作り出す影の下で私は雲一つない空を仰いでいた。

『誰かを待っているのですか？』

緩く編まれた三つ編みが、日の光を浴びて煌めく。私は自分の顔を覗きこんでいた少女の瞳を捕らえる。

葉の色を映しこんだ露のような、澄んだ緑の瞳。

私は少し微笑み、彼女に、何故そう思うのか問い掛ける。
すると彼女は、

『だって、寂しそうに遠くを眺めているから』

と困ったような笑みで答えた。
待っていた。

確かに私は待っていたのだ。
でも、誰を？

彼を？

それとも、遠い昔に失くしてしまった、長い様であったと言つ間に手から零れ落ちた、あの幸福な日々を？

『この世界には、言葉にした途端に消えてしまう永遠があるの』

私のその言葉に、彼女は不思議そうに目を丸くした。

『言葉に？』

『そう、呪文のようね。永遠の魔法がとける』

『永遠が、恐ろしいのですね。スカーレット様は』

私はそれを聞いた途端、彼女の迷いの無い瞳から思わず視線を逸らした。彼女は少し間を置いてから、再び言葉をぽつりと落とした。

『本当は、誰かの言葉でその永遠を壊して欲しいのでは？』

そうなのだろうか。

確かに彼の言葉は『つかの間の永遠』を壊し去った。

けれど、彼の言葉でさえ、『本当の永遠』はとけることがなかった。

本当は怖かったのかもしれない、認めることが。私の本当の心を。だから、手を放してしまった。

しばらくの間、風と草の声だけしか聞こえなくなった。少女は私の隣に腰を下ろし、私の次の言葉をただ静かに待っていた。

私は空を見つめたまま、少女に答えとは別の言葉を与えた。

『あなたは、人の気持ちをその人以上に理解しているのね。その力で、沢山の人に幸福を呼び込んであげなさい。あなたには、それが出来る優しい心があるから、シスターアンナ』

ぼんやりと瞳を開ける。すると、スカーレットの目の前に見えたのは優しい緑ではなく、金糸、銀糸の刺繍が素晴らしい絨毯や、凝った細工のされた木彫りの机、赤のビロードのソファなどであった。

（ああ、私ソファで本を読んでいてうたた寝をしてしまったのね）

——それにしてもなんて懐かしい夢を。

スカーレットは前髪をくしゃりと掻き上げる。そしてどこか悲しげな瞳で下を向いた。途端、彼女の目が怪訝なものへと変化する。

「な……」

何だ、この膝の上の物体は。

そこには、何故かさも気持ちが悪そうにすやすやと眠る馬鹿弟子の頭が置かれていたのだった。

スカーレットは次の瞬間、少しの迷いもなく勢い良く立ち上がった。それと同時に、ガーネットは床へと頭を打ち付ける。

ガーネットが痛みを訴える声を全て上げ終わる前に、扉が大きな音をたて開いた。そこには、眠ってしまったスカーレットを気遣い、今まで扉の外で警護をしていたゴドウェルトが立っていた。

いつもより多く眉間にしわを寄せたゴドウェルトはズカズカと足音をたて、座り込んでいたガーネットに近づくと、握りしめた拳を頭にお見舞いした。

「——っ！ い……痛いじゃないですか！ 何でもすぐに暴力にうつたえるのは感心しませ……」

懲りない馬鹿にもう一発。

「窓から不法侵入するような奴にとにかく言われる筋合いはない」

「僕はただ、風に誘われるがままに、この部屋に來ただけです！ そしたらお師匠さまが何とも愛らしい顔で眠っていたので、僕もついつられて……」

「つられて人の膝を枕にして眠る人間がどこにいるのよ」

スカーレットは弟子のあまりの図々しさに深いため息をつく。

「でも！ お約束の『就寝中で何もしらない彼女にキッス』はしま
せんでしたよ！」

「そんなことをしていたら、お前のその首と胴体、繋がっていない
と思え」

ゴドウェルトの目が猛禽類のように鋭く光る。おそらく脅しでは
なく、本気なのだろう。

スカーレットは何とも頼もしい味方が付いたものだと思ふそうに
何度も頷く。このまま、ガネットが親離れしてくればどれだけ
いいか。

「お取り込み中すみませんが……」

開かれたままの扉の隣に、入ってもいいものか思案しながら立ち
尽くしていたルーファス。彼はこの騒ぎに巻き込まれないように、
話しかけるタイミングを待っていたらしい。

「あら、ルーファス。どうかしたの？」

「陛下が呼びでして。何でもフィオルトからの使いだとかで……」

「フィオルト？ それってリゼ大聖堂のある？」

「ええ、その大聖堂関係で陛下に報告することがあるそうで」

「それでどうして私も同席する必要があるのよ」

スカーレットは怪訝そうな瞳をルーファスへと向ける。国王の呼
び出しでは、ロクな目にあつたことがない。

「その使いと言うのが、フィオルトの警護を担当するフィオルト魔
道師団の方なんです。ですから、スカーレット様がいた方が、と」

魔道師団は都市ごとに大なり小なり置かれていて、それぞれが領主によって管理されている。規模の大きい団には監視の意味も含めて、王宮魔道師も一定期間ごとに入れ替わりで派遣されていた。

大聖堂守護を生業とする、専属の魔道師もいるのだが、彼らが大聖堂から遠く離れることは滅多にないことなのだ。

「まだ詳しいことは聞いていないのですが、修道女を捜しているような事を言っていました」

「修道女？」

懐かしい友人、シスターアナナの夢を見たからだろうか。何故か、スカーレットは心の奥がざわつく感じを覚えたのだった。

第2話

*

普段着のワンピースから、軽めのドレスに着替えたスカーレットが向かった先では、中年に差しかった年頃の男性と、若い女性の二人組が深刻そうな表情で国王と話をしている最中であった。スカーレットが謁見の間に足を踏み入れると、国王は顔をあげ二人に彼女を紹介した。

「ああ、紹介しよう。第二王女のスカーレットだ。魔法については私よりも造詣が深くてな」

国王の紹介にスカーレットはスカートを軽くつまみお辞儀をする。それに続き、ルーファスやゴドウェルトは敬礼を、そして何故か当然のように付いて来たガーネットが頭を下げる。

二人の使者達は、スカーレットの方を向くと深々とお辞儀をしてから顔を上げた。

すると、男性の方はスカーレットの顔を見るなり、ひどく驚いたような表情となった。彼はスカーレットの顔をまじまじと見つめてから、何度も目を瞬かせた。

「私の顔に何かについているかしら？」

流石にスカーレットも彼の不自然な視線に気がついたのか、何でもないような顔を装いつつ、そう問いかけた。

「え、いえ、申し訳ありません」

元々ある笑いしわを深くして、トレヴァーは微笑む。歳のせいもあるかもしれないが、普段から笑顔でいることが多いので、そのしわが癖になったのだろう。

「トレヴァーと申します。こちらは弟子のパティ」

パティと呼ばれたトレヴァーの隣にいた女性は、帽子をとりながらにこりと微笑む。首を傾げた瞬間に、サイドの髪がふわりとする先が丸まった、柔らかそうな栗毛であった。

「初お目にかかります、姫様」

パティは愛らしくスカーレットに微笑みかける。二十代前半だろうか、上品な顔立ちをした美人であった。緑や水色を鮮やかに使った服装が、彼女のセンスの良さを物語っている。最近では、スカーレットや彼女のように魔女服もお洒落なものを好むようになってるのだ。

「いなくなったのは、シスターマリー——本名はマーシャといいます」

「修道女が失踪して、どうしてわざわざ城に報告を？」

「いえ、実は失踪ではない、かもしれないのです」

トレヴァーは困ったように目を細める。

「歯切れが悪いわね……失踪ではないとしたら何？」

「それが、シスターマリーには窃盗の容疑がかかっているんです」

「窃盗？ 何が盗まれたのかしら」

「昔、エノワルドの王女がスイートピアへ嫁いできた際に贈与された銀の聖杯です。文化的にも外交的にも非常に貴重なものでして…

…」

トレヴァーの口から出た単語に、スカーレットは一瞬顔をしかめた。そして、手を口にあてながら少し考え込むと何か思い出したかのように顔を上げた。そのまま何か言おうとして口を開いたが、自分の言おうとした事をもう一度確認するかのように瞳を泳がせる。

そして、思い出した事柄はあえて伏せ、当たり障りのない言葉を返した。

「よくそんなに貴重なものを持ち出せたわね」

「ええ、貴重ではありませんが、普段は大聖堂の祭壇に飾られているので、関係者なら誰でも手に取ることが出来るんです。身内に対しては気を許し過ぎてるところがあるのでしょうかね」

「いいじゃない、別に」

「はい？」

この言葉に疑問符を浮かべたのはトレヴァーだけではなかった。その場にいた全員が少し驚いた顔をしてスカーレットの次の言葉を待った。

「その程度のものだったって事でしよう？ いいじゃない聖杯の一つや二つ」

「ですが……外交的にもそれはまずいかと」

トレヴァーの笑顔が微かに引きつる。

「黙ってればいいじゃない。代わりの似たようなの置いておけばばれないわよ、エノワルドの人間が大聖堂に来る事なんてないでしょうし」

そもそもスイートピアとエノワールドでは信仰神が異なるので、確かによほどのことが無い限り、エノワールドの人間が大聖堂に来ることはないのだ。

だからと言って、ばれなければいいというものでもない。

「いやいやいや！ それは流石にまずいだろう」

ここに来て、国王は思わず声を荒げた。外交問題となった時に一番大変な思いをするのはその国の君主であるのだから、当然の反応だろう。

トレヴァーももう一度笑顔を整えて、国王の言葉に大きく頷いた。

「陛下の仰る通りかと……。それに、盗まれたものが何だとしても、窃盗は窃盗ですから」

「分かっているわ。冗談よ」

少しつまらなさそうに、スカーレットはにやりと言った感じの笑みを返す。

果たして、本当に冗談だったのか。

「で、その修道女が犯人だてっていう証拠は？」

「聖杯がなくなった日から姿をくらましたことと、大聖堂の前に彼女のベールだけが残されていたこと、が理由とされています」

「外部犯、の可能性は確かに低いわね。あの大聖堂の守りは完璧なもの」

——だとしたら内部犯？

また内部の人間の反乱か、とスカーレットは大きくため息をつく。どこもかしこも、平和に暮らしてはいけないものか。

しかし、前回の城での事件から考えると、その修道女などよりも

大聖堂の専属魔法使い達の集団、リゼ魔道師団の人間の方が怪しく思えてしまう。ここの魔道師達は、大聖堂の守護をしているだけあって、保守的な人間が多い。

「それでどうして城にまで来て報告を？」

「あの聖杯は国宝に指定されたものですので。陛下にもお知らせする必要がありますかと」

スカーレットは少し難しそうな顔をして、瞬きを繰り返した。

（でも、前回の事件と違って、聖杯を盗んだりしても不利な立場になるのはスイートピアの方よ。一体何の得が……）

「聖杯の紛失と修道女の失踪——だからと言って、これといった証拠はないのよね、彼女が犯人だと言う」

「ええ、まあそうですね。私達は大聖堂側に頼まれて彼女を捜しているのであって、犯人と断定したわけではありませんから」

「なるほどね、うん、犯人どうこうって事以前に、まずはその修道女を見つけることが先決と言う事ね」

「ええ、院長様もそれは心配なさっていますから。まさかあの子に限って窃盗なんてことあるはずがない——と。だからこそ何故いなくなったのか心配で仕方がないようでした……」

「『リゼの修道女』だもの。事件に巻き込まれてもある程度はどうにかなるでしょう」

スカーレットは確信に満ちた視線をトレヴァー向ける。彼もその言葉に、微笑んだまま小さく頷いた。

「トレヴァー、よかつたら城の魔道師団を少し見ていてはどうか。君達はこの件の報告に来ただけで、その修道女の捜索に加わっ

てはいないのだろうか？」

「はい、搜索は各地区の担当者が行っておりますので。あまり大々的に搜索をすると、市民が不安に感じるかと思ひまして。ではお言葉に甘えて少し寄らせて頂きます。アラン様とも久々にお会いしたいと思つておりましたので」

「そうするといひ。ルーファス、彼らを案内してやつてくれ」

「あら、ルーファスは忙しいでしょう？　ここはガーネットに案内させたらいかかしら？」

スカーレットのさりげない提案に、国王はちらりとガーネットに視線をやつた。前回の一件により、未だにトラウマを抱えたままらしく、彼を直視出来ないのだ。一国の王が何とも情けない有様である。

「そ、そうだな。ではそのように」

目を合わせようとしない国王を鼻で笑つてしまいたいのを堪え、ガーネットはトレヴァーの方を向いた。

「古代魔法研究室所属のガーネットと申します。以後お見知りおきを」

「ああ、よろしく」

トレヴァーは笑顔を向けながら、ガーネットに手を伸ばす。ガーネットは営業スマイルでその手を取り、彼と握手を交わす。

「それでは案内させてもらいますね。ああ、折角ですから道すがら姫さまと僕の話でも……」

「……ゴド、あなたも付いて行つて」

馬鹿弟子の脚色しすぎの余計な発言を阻止する為に、スカーレットは保険を付けることにした。ゴドウェルトも彼女の意を組んだのか、左胸に右手をあて、敬礼をした。

「スカーレット様は？」

「私はお父様と話があるからここに残るわ」

「左様ですか」

『お父様』の部分が強めに発言しながら、国王を見る。国王はその視線から逃れようと、ルーファスの方へ顔を向けたが、彼も王同様に視線を明後日の方向へと投げ出していた。

愛しい師匠では無く、目の上のたんこぶの同行に軽く舌打ちをするガーネット。そんなどうしようもない弟子を筆頭に、一同は謁見の間を後にした。

去り際にも、さりげなくスカーレットに注がれる師匠の視線に、パティは顔を曇らせた。そして隣にいるトレヴァーにだけ聞こえるくらいの声で一言ぼつり。

「随分気にかけるのですね、姫様を」

トレヴァーは一瞬虚を突かれたような表情をしてから、柔らかに微笑んだ。

「おや、焼きもちかい？ そんな可愛いものを焼いてもらえるとは嬉しいね」

その眩いほどの――少なくとも彼女には輝いて見えたのだ――笑顔にパティはほんの少し顔を赤らめて頬を膨らませる。そして、その笑顔から目を逸らすかのように石畳の床に視線を滑らせた。

「師匠せんせいはずるいです。そんな風に笑いかけられたらこれ以上何も言えないじゃないですか」

「そうかい？ でもこの笑顔は特別なんだよ。恋人限定」

予想外の師匠の返しに、パティの顔は耳たぶまで真っ赤に染まっていた。

嬉しい様な、悔しいような。

「やっぱりずるいです」

それだけ、か細い喉の奥からひねり出す。その言葉を聞いたトレヴァーは、前を向きながら優しく微笑んだ。

第3話

*

前に来た時とは見違えるほど綺麗になったアランの研究室にガーネットは感嘆のため息を漏らした。思ったよりも部屋が広かったことなどを新発見しながら、中へと足を進める。

「随分綺麗になりましたねえ」

「ええ、チエルシー殿が掃除をしてくれまして。今は図書室へ本を返しにいつてるところなんです」

ほくほくとした様子で微笑むアラン。確かに、あの散らかった部屋は、年寄りには毒だろう。チエルシーも同じことを思ったのだろうな、とガーネットは思いつつも、「良かったですね」とだけ言うに留めておいた。

「ああ、アランさん。こちらフィオルトからのお客様です」

ガーネットは入り口から少しずれ、トレヴァー達を部屋の中へ通した。

「おやおや、立派になりましたね、トレヴァー殿」

「ご無沙汰してます、アラン様」

嬉しそくに眉をぴよぴよこ動かすアランを見て、ガーネットは首を傾げた。

「お知り合いだったんですか？」

「ええ、トレヴァー殿は私の恩師のお弟子さんでしてね」

「恩師……？」

「王都の魔法学院の姉妹校、ウィシュトル魔法学院の学院長さんですよ。私はあの学院の出身で、一時期教師もしていたので随分お世話になったものです」

「アランさんの恩師……ということは結構な歳では？　もしかして今はもう……」

亡くなっているのでは、と少し渋い顔をしたガーネットに、トレヴァーは首を振りながら微笑みかける。

「いえいえ、お師匠様は今もご健在ですよ。見た目だけなら、私よりも断然若いですしね」

「見た目だけならってことは」

「ええ、歳は百二十とちょっとだったかと」

正確な年齢を覚えていないのか、トレヴァーは上を向きながら記憶を辿った。

しかし、ガーネットにとって学院長の確かな年齢などは問題ではない。彼にとつて重要な情報は、学院長がスカーレットと同じで不老長寿らしいという事だ。

ガーネットはトレヴァーやパティに背を向け、アランに小声で話し掛ける。

「お師匠さまのような人が他にもいるんですね」

「そういえば、レティ殿と学院長は知り合いらしいですよ。ただ……」

……

「ただ？」

「詳しくは知らないのですが、仲があまりよろしくないようでして」

その言葉に、ガーネットは驚いたようにため息を漏らした。

「あの天使のようなお師匠さまと仲が悪いなんて、余程性格に問題があるんでしょうね」

「お前なんかと十九年間も付き合ってられるんだから、確かに天使だな」

お前にだけは性格の問題など語って欲しくないだろう、と言いたげにゴドウェルトは目を細めた。確かにその通りだろう。

「ちよつ！ 会話に割り込まないで下さいよ。というかどれだけ地獄耳なんですか。それもストーリーカースキルの一つなんですか？」
「……お前は一度や二度、頭に衝撃を与えたくらいじゃまともにならないようだな」

眉間のしわを深くしながら、ガーネットを見下ろすゴドウェルト。しかし、彼の表情は怒りに満ちたというよりも、呆れているように見えた。

どうにかこの場を和ませようと、アランは急いで二人の会話に割って入った。

「いえ、学院長はそれは立派な方ですよ。生徒も教職員も皆、尊敬していて、とても人望のある人でしたし」

「じゃあ、どうしてでしょうね」

さあ、という風にアランは小首を傾げ口髭をもふもふとさせた。そして、三人が何やら話しこんでいたので、気を使って黙っていたらしいトレヴァー達に気が付き咳払いをした。

「ああ、すみません。客人を放って話しこんでしまい……」

「いえ、大丈夫ですよ」

本当に気にしていないかのような微笑みを返すトレヴァー。だが、彼は基本いつも笑顔なので、その真意は読み取ることが出来なかった。

ある意味すごいポーカーフェイスなのだ。

「お茶をお持ちしました」

可愛らしいが、棒読みに近い声が部屋の入り口から聞こえてきた。そこに立っていたのは、ティーポットやカップの乗ったお盆を持ったチエルシーだった。どうやら、図書室からの帰り道に、人づてに客人のことを聞いたらしい。彼女は、軽く会釈をするとアランの側にあるテーブルへと近づきお盆を下ろした。

アランは、トレヴァー達とチエルシーを互いに紹介した後、お茶をカップに注いで全員に勧めた。が、ゴドウェルトだけは「勤務中ですから」とその勧めを断った。

頭の固い男である。

入口の近くで腕を後ろに回し直立しているゴドウェルトを除いて、一同は椅子に腰を下ろしてお茶をすすりながら談笑をし始めた。

「じゃあ、古代魔法研究室って、女性が多いんですね」

ガーネットの話を聞いていたパーティが感心したように口を開く。

「ええ、今のところ男は僕一人で、非常に肩身の狭い思いをしていますよ」

ははは、と笑いながらそう答えるガーネットを見ると、とても肩身の狭い思いをしているとは思えなかった。こいつなら、どん

な条件の悪い場所でも自分仕様に変えてしまおうだろう。

「私の所属しているフィオルト魔道師団では女性は少ないですから。羨ましいです」

「そうなんですか？」

「ええ、まあ。魔法使いに限らず女性は大人しく家の奥に、という考えもまだ根強いですからね」

そう言いながら、パーティがチエルシーに視線を向けると、彼女も同意した様に無表情のままが大きく頷いた。そして愛らしいが抑揚のない話し方で言葉を返した。

「そうですね、私の地元でも女の人の魔法使いはあまりいませんでした。そもそも田舎なので魔法使い自体がごく少数なのですが」

「へえ……」。僕は田舎でお師匠さまと二人暮らしだったので、そういう世間一般の常識に関しては少し疎いので。そういうものなんですね」

パーティの話聞いて、ガーネットは意外そうに頷いた。

「でももちろん、素晴らしい女性の魔法使いは沢山いますよ」

「ええ、僕もそう思います！」

自分の師匠を思い浮かべ、ガーネットは勢い良く頷いた。これにはゴドウェルトも同意見だったようで、納得するように何度も頭を縦に振った。

「そうそう、アラン様のお師匠様も立派な女性の魔法使いでしたし。王都の魔法学院で教鞭をとってらしたんですね」

「ふふ、懐かしいですね。私もあの頃は若かったものです」

「ああ、噂の『金髪碧眼のツンデレ美少年』時代ですか」

ガーネットは思い出したように手を叩いた。

「……そんな奇妙な形容の表現をするのは一人しかいませんね。私は別にツンデレだったわけじゃないんですからね？」

アランはもふもふした眉毛の奥で目を細めて、自身の不名誉な呼称をやりわり訂正した。

「あ、あとそれから、セレストایت様のお師匠様も女性だったかと……」
「パティ！」

今までにこやかにしながら、話に耳を傾けていたトレヴァーが声を荒げる。パティは驚いて、目を真ん丸にしながら彼の顔を見つめた。

トレヴァーは彼女の瞳の深い藍に浮かんだ戸惑いの色を感じ、慌てて咳払いをしてから笑顔を作った。

「すまない。思わず大声を出してしまつて。お師匠様はあまり自分の話を他人にされるのが好きではないんだよ」

「そ、そうでしたか。申し訳ありません師匠……」

パティはいつも穏やかな師匠を怒らせてしまったことに動揺しながらも、自分を恥じた。俯いた彼女のサイドの髪は下へ垂れ、まるで叱られた子犬のように見えた。

ガーネットは彼女の口から出た「セレストایت」という人物が誰か、少し気にはなったが、状況が状況なので追及はしない事にした。こんな奴でも一応、空気を読めるらしい。

「そうだ、パティさん。もし良かったら古代魔法研究室を覗いてみませんか？」

気まずそうにずっと下を俯いているパティに気を使ったのか、ガーネットは機転を利かせそう提案をした。パティはちらりと顔を上げ、トレヴァーの顔を見る。

「行っておいで。僕はアランさんと少し話をしているから」

いつもの笑顔に戻った師匠を見て、パティは少しの気まずさを感じつつも安心したのか、ぎこちない笑顔で頷いた。

「それでは、お願いします」

第4話

*

美術品がところどころに置かれた長い回廊に、二つの足音が響く。他に聞こえてくる音と言ったら、窓の隙間から流れる風や木の葉の音、小鳥の愉快的なさえずりくらいのものである。

氣を利かせてパティをあの場合から連れ出したガーネットであったが、彼の辞書には他人に氣を使うという文字は無い。自分達の間には流れる氣まじりな雰囲気などさしたる問題ではないだろう。実際にこの空白に耐えられなくなり、初めに口を開いたのはパティの方であった。

「ガーネットさんは、スカーレット様の昔馴染みなのですか？」

スカーレット意外の他人との会話に関しては適当な返ししかないガーネットだが、話が愛する師匠のことなら別である。

「ええ！ 生まれた時からずっと一緒ですよ。そしてこれからもずっと一緒の運命です！」

「う、運命ですか？」

「ええ！ 宿命と言っても過言ではありません」

熱く語るガーネットを、パティは少し戸惑った瞳で見つめた。こういったタイプは彼女の周りに今まで居なかったのだ。

「お二人は恋人同士、なんですか？」

「もちろん！ ——と言いたいところですが、今は僕の愛情が溢れそうなので関係なんです」

「不思議な関係ですね……」

ガーネットの言葉の意味を半分も理解出来ないまま、パティは曖昧な笑顔で相槌を打った。

「それでも、そんな関係でもずっと一緒だって言いきれるのは羨ましいです。私は……そんな自信がないから」

「パティさんの好きな人はどんな方なんですか？」

「え、ええと。その……優しくて、笑顔が素敵で。いつもはおっとりなさっているけど、いざとなるととても毅然とした態度をとられて。私が世界で一番、頼りにしている方です」

トレヴァーのことを思い出したパティの顔から微笑みが零れる。

「もしかして、トレヴァーさんですか？　パティさんの好きな人って」

「え！？　どうして……」

「いえ、だってその説明にピッタリ当てはまりますし。話し方から、目上の人間だって分かりますしね」

ガーネットにそう返されて、パティは両手で頬を押さえ赤くなつた。そして、少し俯きながら足を止めた。

暖かな日差しが彼女の足元できらめく。

「私、不安なんです」

「不安？」

「私ばかり、あの人のことを好きなんじゃないかって」

外へと視線を移し、窓枠へ手を添えながらパティは高い空を見上げた。

「好きだって、いつもいつでも言い続けて。諦めようかとも思ってたけど、やっぱり好きで。だから『負けましたよ』って言ってもらえた時は本当に嬉しくて」

その時のことを思い出したのか、パティははにかんだような笑顔を窓に映す。しかし、ガーネットはその言葉を聞いて首を傾げた。

「僕、言葉が話せるような年になってからずっと言ってるんですけどね、好きだって」

「それは……色々な意味ですごいですね……」

ガーネットの発言に少し引いた様子を見せ、パティは無理やり笑顔を保った。

「でも、という事は付き合っているんですよね？ 何が不満なんですか？」

「不満なんて……。ただ、あの方に好きになって頂けたなんて。思いを返して頂けたなんて、私にとってはまだ夢みたいで……。だから」
「なるほど、ね。でも僕からしたら、師弟でお付き合いをしているなんて羨ましい限りですけどね」

「え？ ガーネットさんの好きな方は姫様なんですよ？」

「お師匠さまも同じくらい好きなんです」

同一人物なのだから当然なのだが、そんなことは知らないパティは目を瞬かせその言葉の意味を考え込んだ。結局、好きな人が二人いてもおかしくはないかという考えに落ち着いた。

「ということはガーネットさんのお師匠様は女性なのですね」

「ええ！ とても素敵な方です！ そうだ、折角だから師弟で付き

合う極意などを教えて下さいませんか」

きらきらと目を輝かせるガーネットを見て、パティは少し後ずさった。

——おかしい。さっきまで自分の悩みを吐露していたはずが、いつのまに他人の恋愛相談に？

「で、でしたら私ではなくアラン様に相談されてはどうですか？」

「アランさんに？」

「ええ、アラン様は師弟で結婚なされたんですよ。亡き奥様はアラン様の魔法の師匠だったんです」

「そうなんですか!？」

ガーネットは初めて聞かされる驚愕の事実に関口をしばらくの間閉じることが出来なくなった。

（後でアランさんを質問攻めにしよう!）

そう心に決めたガーネットはパティを促し、研究室へと再び歩き始めた。

*

国王との話、もとい説教を終えたスカーレットは、肩を手で軽く叩きながらため息をついた。

（全くもう。いくら私が城にいらって便利屋みたいになにに使わないで欲しいわ）

スカーレットがそう思うのは、面倒事に巻き込まれることが嫌だ

という思いもあるが、国王の自立の妨げになるという危惧があるからである。だが、五十を目前にしたい大人の自立を心配すること自体既に問題だということには気が付いていないらしい。

うんと背伸びをしてから、スカーレットは自室へと歩みを進める。そんな時、聞こえてきた音に彼女の足は反射的に縫いとめられた。日差しを眩く反射させる白の大理石に響く、ゆったりとした足音。スカーレットはスカートをふわりとさせ、軽やか振り向く。そこには彼女の思った通りの人物が微笑みながら佇んでいた。

「随分成長していたから、思い出すのに時間がかかったわ。立派になったものね、トレヴァー・ガート」

スカーレットにどこか苦々しげな感情の混ざった視線を向けられ、足音の主トレヴァーは頭を軽く掻いた。そんな仕草を見せながらも、彼は笑顔を絶やさなかった。

「ご無沙汰しています。スカーレット様」

「それで私に何か用かしら？ 少年」

「その呼び方は勘弁して下さい。もうそんな歳ではありませんよ」

トレヴァーはそう言い、困ったように微笑んだ。

その笑顔は、スカーレットが彼と初めて会った二十七年前と全く変わっていなかった。彼の微笑みにあの頃の少年を垣間見たスカーレットは、少し寂しそうに微笑んだ。

第4話（後書き）

人物紹介＜第二部＞に第二部の表紙絵を掲載しました。よろしかったらご覧下さい（o・人）

第5話

*

中庭が見渡せるバルコニーに移ったスカーレットとトレヴァーはしばらく無言で下に広がる緑を眺めていた。

スカーレットは風に煽られ顔に張り付いた髪を手でそつとよけると、トレヴァーの方を横目で見た。

「あなたはこう思っているの？ 今回の事件について」

「そうですね……。おそらく、スカーレット様と同じ考えかと」

手すりに寄り掛かっているスカーレットとは対照的に、背筋を伸ばし立っていたトレヴァーは少し体勢を崩しながらそう返した。

「同じ？ ということは、あなたも聖杯を盗んだのはシスターマリーではないと考えているのね」

「ええ。一介の修道女が盗んで得をする様なものではありませんから。それに、シスターマリーの修道院での評判からもそんなことをするとは考えにくいかと」

「評判？」

「『鈍くさくて、少し抜けているところはあるが、素直で優しい子』だと」

「なるほどね……。聖杯が盗まれたことに最初に気がついたのは誰なの？」

「司教様だと伺っています。朝の礼拝の時に気が付かれて、リゼ魔道師団の団長に相談したそうです」

「その団長経由で、あなた達に話がいったのね」

「ええ」

そこまで聞くと、スカーレットは顎に手を添え考え込んだ。

「これだけの情報じゃ、確かに何とも言い難いわね……」

「リゼ修道院やフィオールでも怪しい人物を見ていないかなど聞き込みをしたのですが……。ああ、それとシスターマリーについても」「そういう情報はどうでもいいのよ、案外」

小さく息を吐き、ひらひらと手を振るスカーレットの姿にトレヴァーは頼りなさげに微笑んだ。

「しかし……私達に依頼されたのはシスターマリーの搜索ですから」「そうね。あなた達がすべきなのは彼女の搜索よ。でも私達は違うわ」

「……何をお考えですか？」

スカーレットの何か意味を含んだような言葉にトレヴァーの目に鋭い光が灯った。

「少しね、いいことを思いついたの。あなた達にも協力してもらおうよ」

今にも籠から飛び出そうとしている小鳥のような弾んだ声で、スカーレットはそう言い放った。いつも何だかんだ言いながら、トラブルに真正面から突っ込んでいくのは彼女である。

城での静かな生活も飽きたのだろう。歳をいくらとっても本来の性分というものは治らないらしい。

「……ところで、先程から事件の話ばかりですね」

「あら、当たり前でしょう？ 一体あなたはここに何をしに来たの

よ」

ずっと話を切り替えるタイミングを見計らっていたらしいトレヴァーは、柔らかないつもの笑みを浮かべる。だがスカーレットはそんな彼に冷ややかな視線と言葉を送っただけだった。

「それは仕事ですけど……。でも、まさかあなたにこんな場所で会えるとは思ってもいませんでしたから」

「それはこちらの台詞ね」

スカーレットのその言葉に、トレヴァーは同意しながらも苦笑した。

そして、笑みの消えた真剣な表情をするとスカーレットの正面に立ち直し、彼女の視線を捕らえた。

「あれから随分時間が経ちました。でも、私はもう一度あなたに伝えたいんです」

トレヴァーの真っ直ぐな瞳に、スカーレットの記憶がほどけていく。彼の瞳はあの少年時代と変わらず、彼女の心に響きながら大きな波紋を作り出す。

——その先は聞きたくない。

スカーレットは耳を塞ぐ代わりに、ゆっくりと瞳を閉じた。

*

「すごい賑やかでしたね。いつもあのような感じなのですか」

研究室の女性陣の勢いに圧倒されたらしいパティは部屋を出た少し後に大きく息を吐いた。実際、彼女は研究室で息のつく暇のない

くらい質問攻めにあっていた。

女のおしゃべりにかける情熱とは、恐ろしいささえ感じる程のものなのだ。

「そうですね、いつもあんな感じですかね。でも慣れると結構楽しいですよ？　おもしろい話も聞けますし」

ガーネットは何でもないうにそう笑って答えた。

ここでガーネットが言う『面白い話』とは城内の根も葉もなくだらしない噂話などである。まるつきり嘘のことの方が多いが、時に真実も混じっているので時として役に立つこともあるのだ。主に『弱み』という名の切り札として。

「ガーネットさんは確かに楽しそうでしたね。あの場にとっても溶け込んでいて……」

「コツはあまり深く関わろうとしないことですよ」

「それはどういう事ですか？」

「あまり全体に気を使いすぎたり、相手を全部知ろうとすると凄い労力が必要ですから。そういう力は本当に大切な人に取っておくものです」

「大切な人に……」

「そうですね！　だから僕はいつも万全な態勢で好きな人に全力投球出来るんです！」

ガーネットの場合はただ単に協調性がなく、尚且つ興味対象に粘着気質なだけなのだが。しかし、パティのような気を使いすぎる人間には彼の言うくらいの力の配分がいいのかもしれない。

「全力投球ですか」

「そうですね！　積極的になったもの勝ちです！　この世は弱肉強

食。少くく我がまな方がおいしい思いを出来るってもんです
！」

ゴドウェルトが聞いていたら「お前は自己中心的すぎだ」と突っ
込まれそんなことを、堂々と拳付きで宣言するガーネット。

こういつ奴が絶体絶命な状況でもしぶとく生き残るのだろう。

「もつと我がままに、なつていいのでしょうか」

パティはすっかり考え込んでしまい、俯きながら足早に前へ前へ
と進んでいった。そんな彼女を特に追いかけてようとせず、ガーネ
ットは後ろからゆつくりと付いて行つた。

床を踏んだ感じが少し変わり、パティはようやく我に返つた。廊
下の先にある少し広い空間に差ししかかつていたらしく、床が絨毯に
変わつていたのだ。

その時、心地よい風がパティの髪を優しくすいた。広間にあるガ
ラス扉が少し開いていたらしい。彼女がその方向に視線をやると、
ガラスの向こうに見知つた人物の姿を見つけた。

「せんせい
師匠……？」

パティは少し驚いたように目を丸くしながら、そつとバルコニー
へと近づいた。

（誰と話をなさつてゐるのかしら……）

パティの視界にスカーレットが入ると同時に、トレヴァーの声
が彼女の耳に響いた。彼女の好きな、低く良く通つた声が。

「——まだ、あなたを愛しています」

それは、風が運んできた悪戯。そんな囁きを、どうして私の耳へと届けてしまったのだろう。パティはただそこに、瞬きもせず立ち尽くした。

第6話

さっきの言葉は本当に師匠せんせいの口から出たものなのだろうか。

「愛しています」という低い声が未だに耳の中に、頭の中に響き渡る。だが、それはパティ以外の、違う女性ひとに向けられた言葉だった。

瞳が曇ったガラス玉のように、目の前の光景を鈍く映しだす。

「パティ？」

彼女の存在に気がついたトレヴァーは少し驚いた顔をしながら首を傾げる。そして、パティの今にも泣き出しそうな表情を見て困ったように微笑んだ。

「師匠は……本当はその方が好きなのですか？」

「え？ 何を……」

「わ……私……」

涙を、これ以上は無理だというくらい瞳に溜めたパティは唇を噛みしめながら、その場から勢いよく走り去った。

「パティ！」

トレヴァーは反射的にパティへ向かって手を伸ばした。しかし、彼女は既に彼の手の届かない場所へ行ってしまった。

事態が上手く呑み込めないトレヴァーは前髪を掻きあげ、瞬きを繰り返す。その表情からはいつもの穏やかな笑みが消えていた。

「どうしたらそんな誤解に……スカーレット様も何か言って下さい

よ」

「どうして私があなたの痴話喧嘩の仲裁をしなくちゃいけないのよ」

「しかし……」

「これで分かったでしょう？ 他人のことにとやかく口出しするとどうなるか」

「そ、それとこれとは」

スカーレットは腕を組みながら、トレヴァーに厳しい言葉を突きつけた。

しかし、そう言われて余計にしどろもどろになったトレヴァーを見て大きなため息を吐くとパティの去った方を指し示し一言。

「ほら、早く追いかけなさい。あの子今頃ポロポロ大粒の涙零してるわよ」

トレヴァーはすまなさそうな顔でスカーレットに軽く会釈すると、パティを捜しに廊下を勢い良く駆けて行った。

すると彼と入れ替わりに、ガーネットがスカーレットの前に姿を現した。

「パティさんもトレヴァーさんもどうしたんですか？」

ようやくパティに追い付いたと思ったら、急に走り去ってしまったことにガーネットは少し不思議そうな顔をしていた。

「別に何でも無いわ。余計なことをしようとするから、ややこしいことになるのよ」

「はあ……？」

「まあ、それはいいとして。少し頼みたいことがあるのだけど」

「心の準備はいつでもオッケーですよ！」

イキイキした顔で両腕を広げるガーネット。

「何を期待しているか知らないけど、あんまり変な事考えてると脳が腐るわよ」

「変な事なんて考えてませんよ。お師匠さまとのあんなことやこんなことを考えてるだけです」

「そうね、もう腐ってたわね。それで頼みごとはね……」

スカーレットの口から出た期待とはもちろん異なった頼み事に、少し残念そうに頷くとガーネットは背中を丸めながらその場から去っていった。

*

涙を道しるべのようにして、廊下を走り続けていたパティの腕を大きな手がしっかりと捕まえた。

「パティ……」

息を切らしながらも彼女の腕をしっかりと捕まえたトレヴァー。パティは足を止めたが振り向こうとはせず、俯いたままであった。

「ごめんなさい……。私、取り乱してしまつて。本当はずっと不安だったんです、あなたが本当に私を好きなのかって」

「私の方が不安だよ。君は若くて、とても魅力的だ。私なんて歳も歳だし、飛びぬけて容姿が優れているわけではない。本当に私なんかでいいのか、と」

トレヴァーは目を伏せながら、弱よわしい声で本音を吐きだした。

パティは彼のその言葉に反応し、反射的に振り向いた。

「そ、そんな！ 師匠はとっても素敵です！ 誰よりもどんな人よりも！ 私の一番の人です！」

真っ直ぐな瞳で自分を見つめるパティに、すごい勢いでそう断言されてトレヴァーは驚いたように目をぱちくりさせた。

しかし、パティは我に返ると再び先程の師匠の言葉を思い出し、涙を溜め下を向いた。

「私じゃ、やっぱりあなたにはつり合わないのかもしれませんが。だから……」

——好きな人の所へ行つて下さい。

どうしてもその一言が喉より上に出てこない。パティは自分の声がかすれるのを感じ、何度も息を呑み込んだ。

自分のことを必死になりながら想ってくれるパティに、トレヴァーは心を満たされながら優しく微笑みかける。

「僕は君が好きだから傍にいたいと思う。それだけでは駄目なのか」

「で、でもさつき師匠は姫様に……」

「彼女を好きなのは、私では無く、お師匠様なんだよ」

「お師匠様……セレスト様ですか？」

意外な人物が話題に登場したことに、パティは目を丸くしてトレヴァーを見上げた。

「君はどうやら最後の方しか聞いていなかったようだね。私は『お師匠様は、今もまだ、あなたのことを愛しています』と言ったんだ

9

第6話（後書き）

拍手画像に女装ジゼル追加しました（o・人）

第7話

「セレストایت様が姫様を？　今でもって……。お二人は知り合いましたんですか？　でも、セレストایت様って百歳を超えていますよね……」

「スカーレット様はさらに年上だと聞いているけど。何と言ってもお師匠様の師匠だしね」

「え！？　セレストایت様のお師匠様？　でも姫様でもあって……。え？　え？」

完全に思考回路がこんがらがってしまってアワアワするパティに、トレヴァーはスカーレットの姫副業の事情について説明をした。

一通り話を聞いた後、パティの頭は安堵と驚愕でいっぱいになっていた。与えられた情報が全て突拍子もないものばかりだったのだから仕方がない。

「でも、師匠せんせいはよくスカーレット様をご存じでしたね？」

「お師匠様に師事して二年くらい経った時かな、偶然見かけたんだよ。彼女の写真を見ながら悲しそうな顔をしていた師匠の姿を。写真はちらりとしか見えなかったけど、あの赤い髪も印象的だったし、お師匠様があそこまで気にかけている人間なんて珍しいから強烈に頭に焼き付いていてね」

「写真……ですか？」

彼が見た「写真」とは魔法道具で対象の姿を焼き付けた紙であり、機械で撮ったものではない。魔法を利用しなくても使える写真機は、魔法国であるスイートピアでは数が少ない上に未だ単色である。魔法が盛んでない他国ではもう少し技術が進んだものが開発されているが、どちらにしろ、高級な品なので一般にはあまり流通していない

いのが現状だ。

しかし、貴族や王族は権威を示す為に写真よりも有名画家による自画像を好むので、上流階級の間でもさほど流通はしていないのだ。

「スカーレット様から聞いた話によると、お師匠様が作られた魔法写真機だそう。完成した時、試し撮りしたらしい」

「そうなんですか……」

自分の姿を残したがないスカーレットの写真がセレストタイトの手元にあるのはそう言った理由からなのだ。

「僕はね、お師匠様のその姿を見てスカーレット様に会ってみたいになったんだ。感情が無いんじゃないかと疑う程いつも無表情で、人との関わりも嫌うお師匠様の心を捕らえて離さない人がどんな人物なのかってね」

「それで……会いに行かれたのですか？」

「うん、まあ色々ツテを頼ってね。しょっちゅう住処を変えるらしくって、探すのに時間がかかったものだよ」

当時の事を懐かしそうに思い出し、トレヴァーはくすりと笑った。しかし、何故かすぐにバツの悪そうな顔を見せた。

「でもまあ、何とか会う事が出来てね。会う事は、ね……」

「『事は』ということとは？」

「僕がお師匠様の弟子だと分かった途端、とても渋い顔をなされてね。お師匠様に関する事は一言も聞けないまま、お茶だけごちそうになって帰ったよ。もう来ないよう念まで押されてしまったね」

「どうしてですか？」

「スカーレット様はお師匠様を避けていたからね。破門したくらいだから、それも当然といえば当然なのだろうけど」

「破門？ セレスタイト様が？」

何でもそつなくこなす学院長に限ってそんなことがある筈ない、という表情でパティはトレヴァーを見た。

「いや、私もその経緯は詳しくは知らないんだ」

「詳しく知らないということは、大体は知っているんですよね？
どうしてなんですか？」

「いや……その……」

突然しどろもどろになったトレヴァーにパティは怪訝そうな瞳で見つめた。一体、二人にどんな諍いがあったというのだ。

じつと自分を見つめるパティに、トレヴァーは力の抜けるような笑顔を向けた。

「これはお師匠様とスカーレット様のプライバシーに関わる話だから、私の口からは何とも言えないんだよ」

「そうですか……。でもそうですよね、人の私事にやたら首を突っ込むなんて失礼ですものね」

先程、首を突っ込んできたばかりのトレヴァーの顔が微かに引きつる。

肝に銘じなくては。

「でも、人に言えないようなことをして破門されるなんて、セレスタイト様の印象が変わりそうです。完璧な人間なんていないものなんです」

「パ……パティ……」

弟子のトドメの一言に、トレヴァーの笑顔は大いに引きつった。

言った本人は大まじめなのだから、余計にたちが悪い。

誤解は解けたが、自分の師匠の株を落としてしまったことに、ト
レヴァーはちょっとした罪悪感に駆られたのであった。

第8話

*

ガーネットを使いに出した後、スカーレットが向かったのは城内の薬草園であった。薬草と言っても様々であり、色鮮やかな花を咲かすものもありそこはまるで花園のようだった。

その中心に佇む一人の青年。スカーレットはその姿を確認すると、手を挙げながら大声で叫んだ。

「ジゼル！」

その声に反射的に振り向いたジゼーラルは驚いたような表情をしてから、スカーレットに微笑みかけた。そして、彼女の方へ近づくと優しく声をかけた。

「レティ、どうかしたのですか？」

「ええ、少しあなたに用があつてね。魔法薬研究室へ行ったらここだつて言われたから」

「そうでしたか」

「研究室にはもう慣れたかしら？」

「はい。皆さん本当に良くして下さつて……。とても充実していますよ」

ジゼーラルが所属することになった魔法薬研究室の魔道師達の平均年齢は魔道師団で一、二を争う高さである。そのせいか、割と穏やかな雰囲気の研究室であり、ジゼーラルの気質には丁度良かったのだろう。

彼がこの研究室に配属された主な理由はベテランが多いことと、

女性がいらないことである。要人を受け入れるのだから、厄介事の種は少ない方がいい。

「それで用とは？」

「そうそう。少しあなたに聞きたいことがあってね」

「私に分かる事でしたら、何でも聞いて下さい」

質問されることが嬉しいかのように微笑むジゼーラルにつられて、思わず頬が緩むスカーレット。

しかし本来の目的を思い出したのか、咳払いをして緩んだ表情を元へと戻す。

「あなたのお兄さん、エノワルドの第一王子ってどんな人なの？」

今回の聖杯の件では、下手をしたらエノワルドに対しスイートピアは不利な条件を抱え込むことになる。スカーレットにはそれが分かっていたので、エノワルド側にどんな人間がいるか知っておきたかったのだ。

「兄上ですか……？　そうですね、身内の私が言うのもどうかと思うのですが……頭脳明晰で魔法のセンスも飛びぬけている人です。ですが、その……」

「その？」

「他人の弱み握り、つけいるのを得意としているような人でもありません」

「国王としての素質十分って感じね。トトにも見習わせたいわ」

ジゼルは一瞬、「トト」が誰なのか分からず目を瞬かせたが、スイートピア国王のことを指していることに気が付き苦笑した。

「それだけ、この国が平和だと言う事ですよ」

「そうね……。私が若い頃は、いつも近隣の国同士で小競り合いをしていたものだわ。国の中でも権力争いが絶えなくて、お兄様達はいつも気を張ってらした……」

スカーレットはそう言いながら、ふと寂しい表情を見せた。

「お兄様がいたのですね」

「ええ。それからお姉様もね」

「意外でした。レティはしっかりしているので、てつきり長女かと」「私がしっかりしているのは、歳のせいよ。随分親のいない子を拾っては育てもしたし、お姉さんというよりもお母さんって気分ね」

駄目な息子兼弟子の顔を思い出し、スカーレットはため息まじりに微笑んだ。

「レティのご兄弟はどのような方達だったんですか？」

「とても優しく、勇敢な人達だったわよ。まあ……今となっては遠い遠い昔話ね」

「お兄様方を、お嫌いだったんですか？」

いまいち空気の読めない王子様は、スカーレットが流そうとしていた昔の話を再び引き上げた。

スカーレットは少し困ったように、遠くに広がる緑へと視線を向けた。

「いいえ、大好きだったわ。下のお兄様になんて、お嫁さんにして欲しいって頼んだほどよ。小さい子の初恋って兄か父が多いのかしらね」

「では……」

「叶う筈もないけれど……。もし、また会えたら。謝りたいわ、沢山のことを。幼くて、受け入れられなくて、沢山傷付けたから……」
「レティ……」

スカーレットの表情が急に知らない女性のものに思えて、ジゼーラルは目を細めた。スカーレットのことを何も知らない事を突きつけられた気がしたが、それでも何故か彼女から視線を逸らすことが出来なかった。

少しでも目を離したら、ジゼーラルが辛うじて捕まえているスカーレットの一部が溶けて消えてしまう気がして。

そんなしんとした空気を日常へと力技で戻したのは、毎度お馴染みの雰囲気粉碎男、ガーネットの雄叫びであった。

「お師匠さまっ！ そんな奴と二人きりで何話しているんですか！」

スカーレットの肩をがっちりと掴むガーネット。スカーレットは暑苦しい弟子の両手をつねり上げると、頭痛を押さえるかのように額へ手をやった。

「うるさいわね……。大体二人きりじゃないわよ」

スカーレットはそう言い、手を軽く叩いた。すると近くの木の陰からゴドウェルトが敬礼しながら姿を現した。

突然の彼の登場に、ジゼーラルはもちろん、ガーネットも驚いた表情を見せた。

「そ、そんなとこにいたんですか。流石プロのストーカーですね」
「護衛だ」

「自分をストーカーだと認めないところがますますプロっぽいですよね」

「……お前は少し言葉の意味を学び直す必要があるみたいだな」

怒りで眉を微かに引きつらせるゴドウェルト。

二人のやり取りを聞いていたジゼーラルは感心したように声を洩らした。

「ストーカーって……プロとかあるんですね」

「ないわ」

スカーレットに真顔で突っ込みを入れられ、ジゼーラルは少し不思議そうに首を傾げてから、納得したように頷いた。

——そうか、アマしかないのか。

「で、ここへ来たってことは用意が出来たってことね？」

「もちろんですよ。言われた通りに皆さんを部屋へ集めました。それでこれから何を？」

ガーネットの問いに、スカーレットは口元だけで笑って見せた。

「潜入捜査ってどこかしらね」

第9話

王都には劣るが、都会的で活気に充ち溢れたフィオルトの町の中でも一際目を引く、白い石造りの大聖堂。天にも届きそうな塔の一つには、黒く錆びた情緒のある銀の釣鐘。広い敷地は黒い柵で囲まれ、さらに敷地内に覆い茂る木々で見隠しをされていた。

「ようこそいらつしやいました。王立魔法学院の生徒様方」

手を合わせながら、満面の笑みで迎えてくれたのはリゼ大聖堂の修道院長であった。

「本日は、急なお願いにも関わらず見学を了承して頂きありがとうございます
「ございます」

そう言い、にこりと院長に頭を下げたのは、白いワンピースに丈の長い深紅のベストという魔法学院の夏服を身に纏った、スカールットであった。そして、彼女の後ろには同じく魔法学院の制服を身に付けた、チエルシーとジゼル姿。

なぜ、このような状況になったかという、遡ること一日前。

「大聖堂に潜入して探りを入れてみましょう」

両手を机に軽く置きながら、スカールットは自室に集まった面々を見回した。

スカールットの指示でガーネットに集められたのはアランとチエルシー、そしてトレヴァーとパティであった。

「潜入……ですか？」

そんな提案をされると思っていなかったトレヴァーは、不思議そうに何度も瞬きを繰り返した。

「そう、潜入。王立魔法学院の生徒の振りをしてね」

「何故わざわざそんな回りくどい変装を……？」

「今回の事件との関連性なるべく持たせたくないのよ。授業の環境で見学に来たと言えば向こうも怪しまないでしょうし」

「それで、一体何をお調べになるんですか？」

「まあ、それは色々だね。私に任せて頂戴。他にも少し気になることがあって、今調べさせているところだから」

「はあ……」

余裕の笑みを浮かべるスカーレット。その有無を言わせぬ笑顔に、トレヴァーはただ微笑み返す事しか出来なかった。

「そこでアラン！」

「何でしょうか？」

「全員偽物だと流石に怪しまれるでしょうから、現役の学生であるチエルシーを借りたいのだけれど」

「ええ、それでしたら良い勉強にもなりそうですし。いいですよね？ チエルシー殿」

「はい、是非お供させて下さい。護衛もお任せ下さい」

普段通りにあまり表情を変えないまま、チエルシーは深々と頭を垂れた。

「メンバーはお二人なんですか？ 僕も一緒に？」

期待に満ちた目でスカーレットを見つめるガーネット。彼のその期待は、スカーレットの次の言葉でこなごなに砕け散ってしまった。

「今回は私とチェルシー、そしてジゼルの三人での潜入よ」

この言葉には、ガーネットはもちろん、一同が息を呑んだ。ジゼルだけは前もって知らせていたのか、静かにただ頷いた。

「何でこんな優男を！？ 僕の方が絶対頼りになりますよ！」

「レティ殿……流石に王子を潜入捜査に加えるのは……。もしものことがあつたらどうするのですか？」

「ガー、ジゼルの剣や魔法の腕は確かよ。それとアラン、今回はそんなに危険なこととはしないし、大聖堂内で何か起こることはまずないわ。そんなに危険だつたらチェルシーだって連れていけないもの」「私も良い経験になると思ひまして。それに、レティに何かあつたら守り通す自信……」といいますか覚悟はありますので」

そう言いながら、スカーレットににこりと笑いかけるジゼーラル。無意識のうちに繰り出される彼の輝かしい笑顔に、スカーレットはつい表情を崩した。

納得した様なしではないような表情のアランとは打って変わって、ガーネットはさも不服そうに目じりを吊り上げた。そもそもこの状況も気に入らないらしい。

「なんで僕じゃだめなんです？」

「あんたには初々しさつてものが無いでしょう？」

それはスカーレットもでは？ とアランとトレヴァーは思ったが、言わない方が賢明だと判断したのか口を閉ざしたままだった。

「じゃあ、引率の先生として！」

「生徒はともかく、教師なんて本物かどうかばれやすいものに変装できないでしょう？」

「う……うつ」

スカーレットの言ってることはもったもなのだが、その言葉のひとつひとつには、『面倒な人間』を連れて行きたくないという気持ちに滲みだしていた。

「でも！ でも！ フィオルトには付いていきますからね。前回の件もありますし。今回は意地でも引きませんよ！」

「……分かってるわ。あなたはトレヴァーの自宅で待機して頂戴」

「トレヴァーさんの自宅ですか？ フィオルト魔道師団本部ではなく？」

「ええ、あくまでこれは独自調査だから。余計なところから介入されたくないのよ」

「私の家は、リゼ大聖堂にも近いですから、何かあったらすぐに駆けつけますしね」

トレヴァーはそう言いにくりと微笑む。

「それで、ええっと、私はチェルシーに制服を借りるとして、ジゼルの……」

潜入調査は学院とは無関係な上、出発まで時間が無いので入手が難しいのだ。

しかし、ここで今まで扉の近くで黙って立っていたゴドウェルトが口を開いた。

「それでしたら、自分が調達します」
「制服収集癖でもあるんですか？」

ガーネットの余計なひと言に無言での鉄拳。そんなに力を入れていなくても、かなり痛いらしく、ガーネットは頭の中がぐわんぐわん鳴っているような感覚に襲われた。だが、所詮自業自得である。

「弟達のだ」

「あら、弟さん達は魔法使い志望なの？」

「ええ、自分以外は皆」

「他にも兄弟が？」

「後は、妹が。もう外に嫁いでいますが」

「そうだったの。そうよね、エルゼの家は代々優秀な魔法使いの家系だったものね」

ゴドウェルトの曾祖母であるエルゼはスカーレットの昔の弟子であり、友人でもある。彼女のことを思い出し、スカーレットは少し嬉しそうに微笑んだ。

「じゃあ、明日の早朝に出発と言う事でいいわね？」

その言葉にゴドウェルトは一瞬戸惑ったような表情を見せた。スカーレットはそれに気がつく、彼に声をかけた。

「ゴド、あなたはいいわ。明日は毎年用事があって休んでる日でしょう？」

「いえ……ですが……」

「大丈夫よ、そんな危険なことをするわけじゃないと言ったでしょう」

「しかし……」

「ゴド」

スカーレットの諭すように声に、ゴドウェルトはようやくくぐりと頷いた。

「では、出発にはお供させて下さい。自分も目的地はほぼ一緒ですので」

「一緒ってことは、あなたもフィオルトに行くのね？ あ、もしかしてエルゼの？」

「ええ、曾お婆様が昔住まわっていた家です。曾お婆様が亡くなった後、自分が譲り受けて一時期住んでいました」

「そう、あそこはね、私が結婚祝いに彼女に譲ったもののよ。エルゼが弟子だった頃はそこで一緒に暮らしていたの」

「そうでしたか……。ああ、だから書庫があんなに充実していたのですね」

楽しそうに話しを続ける二人を、ガーネットが恨めしそうな瞳で見つめる。スカーレットはそれに気がつく、呆れた顔で大きなため息を漏らしたのであった。

第10話

*

「魔法学院の生徒さんに、我が教会について興味を持ってもらえるなんて嬉しいですね」

院長は控えめに微笑みながら教会内を案内していく。院長は上品な初老の女性で、真っ白な修道女服に身を包んでいた。

ジゼルやチエルシーの前を歩きながら、スカーレットは院長の話に相槌を打つ。

「リゼ大聖堂は歴史も古く、文化財としても有名ですからね」

「ええ、この大聖堂が建造されたのは三百年以上も昔なんです」

「建物ももちろんですけど、美術品なども価値のあるものが多いんでしょうね」

にこりと微笑んだスカーレットとは対照的に、院長の表情に陰りが見えた。おそらく、聖杯の事が外に漏れることを懸念したのだろう。

「そうですね……。その、本日は修道院の中しかお見せできないのですが……」

「仕方ありませんわ。急なお願いでしたし。修道院を見学できるだけで感謝します。外から見る大聖堂も十分綺麗ですし」

「あの、あれは何ですか？ 井戸……にしては大きいようですよ」

ジゼーラルが指を差した先には、彼の腰ほどの高さの石造りの円

柱があつた。見た目は井戸そのものののだが、大きさはその数倍はあつた。また、上には重そうな石造りの蓋が載せられていた。

「あれは昔からあるものでして。どうやって使っていたのかは文献にも記載されていないのです。ですが、貴重な文化財なのは確かですわ」

修道院内部を熟知している院長もこの井戸に関してはあまり造詣が深くないのか、軽く首を傾げる。確かに所々苔なども生えていて、随分と古いものであることが窺えた。

「研究のしがいがありそうですね」

「まあ、エノワルドから留学に来るだけあつてとても勉強熱心ですわね」

王子と言う事は伏せて、エノワルドの一般市民の留学生として紹介を受けていたジゼーラルは今日はきちんと耳飾りを外していた。本来、お忍びの際はネックレスにして身に付けるものなのだ。

「この井戸はトワール・ノディエが作ったと言う言い伝えもあるのですよ」

この院長の一言に、ジゼーラルは目を丸くしてスカーレットを見た。スカーレットは彼の真偽を問う様な眼差しに、小さく頷いてみせた。

どうやら本当にトワール・ノディエが関わったものらしい。

ジゼーラルはチエルシーが院長と他愛も無い話しをしている間――どうやら学園生活のことらしいので、彼女を連れて来て大正解だった――スカーレットに小声で尋ねる。

「驚きました。この国にはあなたの足跡がいたる所にあるんですね」

「まあ、昔時間があつた時に国中を歩いて回つたからね……」

「そんな時期があつたのですか？」

「そうね……あの頃はとにかく様々なことを頭や心に詰め込んでいっぱいにしないといられなかったのよ」

「レテイ……？」

余計な事まで話してしまったことに気が付いたのか、スカーレットはバツの悪い顔をしてから微笑んでみせた。これ以上は詮索しないで欲しいと言う事だ。

「院長様、ごきげんよう」

様々な音色が調和した声達が響く先に、スカーレットとジゼーラは顔を向ける。そこには灰色の修道女服を身に付けた少女達の姿があつた。胸には金のクロスが日の光を受けて眩しく輝いている。

「ごきげんよう。ああ、紹介しますわ、我が教会のシスター達です。皆さん、お客様方に挨拶を」

院長がそう促すと、修道女の中でも一番年上らしい少女が前へ出て頭を下げる。すると他の修道女達もそれに続くように頭を下げていった。

「皆様、当修道院によっこそおいで下さいました。どうぞごゆっくりお過ごし下さいませ」

少女はそう言うのにこりと微笑んだが、その表情にはどこか曇りが窺えた。何か心の片隅に引っかかることがあるのだろうか。

「院長様……少しお話が……」

「そのことはまた後で……。あなた達はお務めに戻りなさい」

スカーレットたちを横目に見ながら、院長は慌ててそう言い放った。少女はまだ何か言いたそうだったが、彼女の言葉に渋々従い、その場を後にした。

「何かあったのですか？」

何気なさを装い、スカーレットは院長に問いを投げかけた。

おそらくは失踪した修道女のことだろう。詳しいことを知らされていない同僚達が彼女の安否を気にして、院長に話を聞こうとしたのだ。

「いえ、お気になさらないで下さい。大したことでは無いのです……」

「そう、ですか」

こちららも身分を偽って情報を探りに来ているのだ。問い詰めすぎても、ぼろが出てしまう。

「ところで司教様はどちらに？ よろしければお会いしたいのですが……」

「申し訳ありません……その……司教様は今はこちら……」

「そうですね、残念です」

司教にも聞きたいことがあったスカーレットは残念そうに肩を落とした。

外に面した回廊に終わりが見え、小さな天使像がある角を曲がり四人は建物の中へと足を進めた。薄暗い修道院の天井には所々にス

テンドグラスの窓があり、ちらちらと色とりどりの光が降り注ぐ。
光の海に意識を漂わせていたスカーレットの視界にある人物の姿
が飛び込んできた。

「あちら方は……？」

「ああ、リゼ魔道師団の団長ですわ」

「優しそうなお方ですね」

にこにこ微笑みながらこちらへ向かってくる団長を見て、ジゼー
ラルはそんな感想を述べた。確かに立派な服装を除いては人のいい
お爺さんといった感じであった。アランよりは歳下だろうが、身に
付けていた魔道師服と長いベールの付いた筒型の帽子は教会らしく
純白である。

「おや、院長様、お客人ですかな」

「ええ、王都の魔法学院の生徒さん方ですわ。院内を案内していま
したの」

「そうですか、そうですか、勉強熱心なのは良いことです」

団長は何度も頷いてスカーレット達を順々に眺めた。スカーレッ
トは彼と目が合った時、何か違和感を感じ顔をしかめた。それに団
長も気が付いたのか、困った顔をして口を開いた。

「私の顔に何かついていませんか？」

「あら、いいえ。ごめんなさい、知り合いに似ている気がしまして
……。誰だったかしら」

スカーレットは適当な理由を述べ、彼の追求を適当にかわした。
しかし、団長はそれで納得したらしく。「似ている人間というもの
は世に三人はいると言われていますからね。これも神の悪戯ですか

な」と返し片目をつぶった。

外へ出掛ける途中だったらしく、少し会話を交わした後、団長はすぐさまその場を去っていった。

「レテイ、何か気になることが？」

「いえ、別にいいの。今回のこととは関係ないだろうし」

不思議そうに顔を見合わせるジゼーラルとチエルシーを後目に、スカーレットは院長を促し先へと歩みを進めた。

第11話

*

懐かしい香りがする。ざわめく緑の、乾いた土の、雨が残した水たまりの、不思議と落ち着く匂い。

一年ぶりの第二の故郷に戻ってきたことをゴドウェルトが感じるのは、いつも鼻からであった。風景も、彼がここに住んでいた七年前と全く変わっていないのに、目で懐かしさは感じることはあまりなかった。

目の前に広がる景色はいつもゴドウェルトの頭の片隅に存在していた。あの頃と変わらず、色あせぬまま。だからこそ懐かしいとは思えないのかもしれない。

匂いや、体を感じる空気だけはこの場所に帰って来ないと実感出来ない。ゴドウェルトは周りの空気を吸い込んで、ため息のように吐きだした。

「さて、久々の大掃除だ。一年ぶりだから埃だらけだろうな」

首を軽く回し、ゴドウェルトは一年ぶりの家路を辿った。

煙突のある赤い屋根、石造りの白い壁にはツタが伸びていた。穏やかな家庭をそのまま表したような可愛らしい家は、周りの田園風景にそのまま溶け込んでしまいそうである。

白いペンキが少しはげた木の板で出来た柵の前にしばらく立った後、ゴドウェルトはその先へと足を進めた。

扉の取っ手に触れた時、ゴドウェルトの耳に銀の棒を弾いたような、細く心地よい音色が響く。しばらくその歌声に耳を澄ましていたゴドウェルトはハツとした様子で駆けだした。

歌声には金属がすれる耳障りな音も微かに混じっていた。音のする方へ向かう足が次第に早まる。家の裏にある庭には草木や盛られた土しか無かったが、自家菜園や花壇の名残が感じられる風景が広がっていた。

ゴドウェルトの視線の先には、卵型の籠が大きな木の枝に鎖で吊り下げられていた。ブランコらしいそれは、小さく揺れる度に金属音をたてた。

頭に響く音を優しく包むメロディー。

そこに、ゴドウェルトの鼓動の音が加わり、静かだった庭が突然賑やかになる。

——そんなはずがない。そんなことはあり得ないのだ。

あり得ないと分かっているのに、ゴドウェルトの口はその名を呼んでいた。

「ルマ……！？」

勢い良く鎖を掴み、ブランコを自分の方へと引き寄せる。途端、彼の瞳に小麦色の髪と驚きで真ん丸になった金の瞳が飛び込んだ。

ゴドウェルトは自分の目の前にいる小さな少女をしばし見つめ、少し悲しそうな顔を見せた。

——何を夢見ていたのだ。

少女の方は突然現れた顔の厳つい男に驚いたのか、子兔のように怯えた表情を見せた。ゴドウェルトにも少女の怯えが伝わったのか、出来るだけ優しい顔を心がけ少女に話しかけた。

「こんなところでどうしたんだ？」

「わ……私……」

良く見ると、少女の服はひどく汚れていた。髪も顔もだ。シート

の様な大きな布を羽織つているところを見ると、旅をしていたというのとも少し違つようだ。歳もまだ十代と少しに見え、余計に一人旅とは考えにくい。

どちらかという逃げてきた、という形容がぴったりな格好であった。

何か訳があるのかもしれないと思ったゴドウェルトは、とりあえず少女を家の中へ上げようと思い手を伸ばした。

「ここは寒いだろう。詳しい話しはとりあえず中で」

「こ……ここはあなたの家なのですか？」

「ああ、そうだが……」

「私……行かなくちゃ。会わなくちゃいけないんです」

「会つ？ 誰に？」

少女は怯えたように俯いてそれ以上は何も言わなかった。ゴドウェルトが困つたように頭を掻いていると、少女はふらりと立ち上がった。

「危なっ！」

少女は立ち上がつてすぐにその場に崩れ落ちた。ゴドウェルトは間一髪で彼女を受け止めると、地面に座り込んだ。

「おい！ すごい熱じゃないか……！」

少女の体が尋常でない程熱いことに気が付き、ゴドウェルトは彼女を抱え上げた。そのまま家に向かうゴドウェルトの腕の中で、少女はうわ言のように小さく呟いた。

「ス……カーレット様……」

少女の呼んだその名前に、ゴドウェルトの顔が微かに険しくなる。一体この少女に何があったというのか。今にも聞き出したい気持ちを押さえて、ゴドウェルトは少女の看病が先だと家の中へと急いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5585p/>

サイドワーク プリンセス

2011年11月20日10時17分発行